

秘められた恩恵

横井 秀治

目次

序章	大自然
一章	介護の日々
二章	温かい手
三章	「おめでとう」
四章	ドイツの粉ミルク
五章	おもちゃライブラリーと九さん
六章	ハウスマンとして
八章	笑顔の輝き
九章	東ドイツ訪問
十章	人を信用しない社会
十一章	青年たちの自立
十二章	愛でる心
十三章	耳を澄ます
十四章	故郷、そして
終章	再び、大自然

序章 大自然

スイス・アルプスの広々とした牧草地のすそ野に佇む、小さなユーフ村（標高二二二六m）の山荘を私たち家族三人は、昨日と同様に八時前に出発する。

遠くに望める山と山の谷間には、濃い霧が漂っている。上を仰ぐと、透いた青空だ。朝の爽涼な大気を吸いながら、村の土道を歩いていると、今まで立ち込めていた朝もやが少しづつ飛び散り、周りの緑の草原が見えはじめてくる。うしろを振り返ると、五日前から宿泊している山荘の赤っぽい屋根が、真夏の朝日を浴びて光り輝いていた。

山へと続く緩やかな傾斜の道をゆっくりと進んだ。少しすると、村からかなり離れたところにポツンと建つ農家らしき木造つくりの平屋が見えた。

黒ずんだその建物の母屋に接した牛舎前では、赤いセーターに青い吊るしの半ズボンをはいた十四歳ぐらいの牧童と、茶色の厚ぼったい野良着を身につけて褐色に焼けた顔のおばあさんらしき人が手に棒を持ち、数頭の牛を牛舎から追い出しているところだった。これから牛たちを山へ連れていくのだろう。山村農家の一日のはじまりだ。

数羽の放し飼いの鶏が、「ユケコッコ」と鳴いている。それを耳にしながら、また歩き出した。さらに行くと、カランカランと音を響かせながら、ヒナギク類の草を食んでいる牛たちの群れに出遭った。

五十頭はいるだろう。その牛たちを引き連れているのは、片眼がキラキラ輝く二匹の犬と、頬が赤く染まった十三歳ぐらいの少女。彼女がピーと口笛を吹くと、二匹の犬はきびきびとした動きで、群れから離れた牛を追いかけて群に戻す。犬たちは、少女の手足となつて働いている。

牛たちと一緒に歩くことになった。妻のゲートルトは彼らを恐れて近寄らないでいたが、息子のミヒヤエルは気にすることもなく、群れの真ん中を歩いていた。四ヶ月前に十九歳になったダウン症の彼は、小さい頃、犬に咬まれたことがあって、どんな小さな犬を見ても恐ろしがって近寄らないが、牛は平気なようだ。

彼と肩を並べて歩いていると、前にいた茶色と白のまだらな牛が尻尾を振りながら立ち止まり、私たち二人に大きな目をギョロリと向けた。と、ミヒヤエルがその牛のお尻に手を伸ばし、ほんの少し触れた。そのところがピクピクと動いた。

十分ほどすると、二股道となった。牛たちはかなり急な登りへ、私たちはさらに傾斜の緩やかな道へ。

人の姿をまったく見かけなくなった。空はもう澄み切った青色に変わっていた。絶好の登山日和だ。これからのようなアルプスの風景が目の前に展開してくるのだろうと想像するだけで、わたしの胸の内はワクワクしていた。

しばらくの間、朝露に濡れた草原の中をゆっくりと歩き続けていた。と、厚い板で造られた小さな簡易的な小屋前に出た。夏の三ヶ月間、牧夫が牛の世話をしながらミルクを搾ったり、チーズを作ったりするところだ。

その小屋近くで、黒色チョッキを身につけた牧夫が背丈ぐらいの長い鎌を持って、膝まで伸びている草を刈っていた。声をかけた。

「先ほどまで、五十頭ほどの牛の群れと一緒に歩いていました。あの牛たちは、あなたが飼っているのですか」

「いや、違うよ。わしのは、ほれ！」

牧夫は五百メートル先の山の中腹を指差した。

「ああ、あそこに牛たちが何頭かいる。人の姿も見える」

「あれは息子だ」

牧夫は長い鎌の刃を石で研ぎながら、私たちに話し出した。

「以前は、この谷に住んでいた若者たちは、皆街に出て行ってしまい、帰ってこなかったが、今はその反対に、ここに戻って暮らすようになった」

「それはいいですね」

「うん、そうだ」

そう言うてから、牧夫はミヒヤエルに、

「搾りたてのミルクがあるから、飲んでみるか」

と、訊いた。彼が「ウン」と答えると、牧夫は釜を草の上に置いてから小屋へ向かった。

私たちは、谷川の水音とカウベルの音が風に乘って聞こえるなか、丸太で造られた椅子に座り、牧夫が牛の乳を持ってくるのを待った。

牧夫がミルクの入った三つのコップを持って小屋から出てきた。

一口飲むと、街で飲む牛乳とはまったく違う味。それも生暖かいのである。喉が渴いていた妻とミヒヤエルは、「オイシイ、オイシイ」と連発しながら飲み干した。

乳の代金を払おうとすると、牧夫は手を横に振ったが、五フランを机の上に置き、礼をのべてから再び歩き出した。

牛の乳の匂いとねばねばが口に残り、牛のウンコが微かに漂うなかの歩きとなった。陽は次第に高くなり、顔から汗が少し滲み出てくるようになった。壮大な山々に囲まれた緑の広い谷間を進んだ。

隣にいる妻に話しかけた。

「このような大自然豊かな地で育った青年なら、一度は街に出ても、ここに戻ってくる気持ちはわかるな」

「そうね。とくに、あなたのように自然が好きな人には、ここの生活があっているかも知れないわね」

「自然と人間が共存し、その調和したなかで、生きている実感というか、生きている幸せを肌で感じ取ることが出来るだろうな」

「そうですね」

私たちはアルプの匂いが漂うなか、肩を並べながら話していた。

少しして、妻の横顔を見ながら言った。

「先ほどの牧夫のことだけれど、息子が戻ってきたら、三世代一緒に暮らしたくなるね」

「お互いに農作業という同じ目的があるなら、協力し合えるし、良いのではない。わたしたちだって三世代同居だし、母とミヒヤエル、それにあなたとの関係はいいし」

「そうだね」

さらに三十分ほど行くと、飛沫を上げながら勢よく流れている幅四メートルほどの沢に出遭った。

橋がないと渡れないほどの速い水の流れである。それは、あなたがたの山歩きはここままでしておきなさい。これ以上先へ進むのは止めなさいと忠告しているかのようでもあつ

た。そんなことはない、地図にも登山道は記されていることだし、どこかに渡れそうなどころがあるはずだと思いつながら辺りを見回した。と、三十メートル先に小さな木橋が架かっているのが目に入った。

フランスの取り方がぎこちないミヒヤエルの手を握りながら、私たちはその橋を慎重に渡った。

いよいよ本格的な登り道となった。かなりの急傾斜だ。日射が強烈になり、額から汗が噴出してくるようになった。妻は盛んにハンカチで顔を拭いていた。立ち止まると、下の沢から冷たい湿った風が湯気の立っている体を撫でていく。足元に目を落とすと、身丈五センチぐらいの、トランペットのように咲いている鮮やかな青紫色をしたエンチアンが風に揺らいでいる。森林限界を越えているので、周囲には樹木がまったくない。

しばらくすると、妻がハアハアと息を切らせながら声を出した。

「お昼にしてはどうかしら？ お腹が減ってきたわ」

「歩き出して、もう三時間が過ぎたのか」
わたしはミヒヤエルのほうを見た。彼は手で額の汗を拭きながら、ニッコリした。そこで、見晴らしのいい所を探し、朝握ってきた梅干しとカツオ入りのおむすびを食べることになった。

おにぎりをリュックから取り出し、食いつくように口に入れる私たち。山登りでのこの味は格別だ。眼下には、今登ってきた山道が草原の中を蛇行しているのが見え、遠くには、雪の峰々が白銀のように連なっているのが望める。それを眺めながらの昼食だ。

おにぎりを食べ終え、リンゴを手に入れている時だった。ミヒヤエルが自分のリンゴを手元から落としてしまった。妻がコロコロと転がるリンゴを追いかけたが、そのリンゴは下の沢の流れに入ってしまったようで、がっかりしながら戻ってきて、真面目な顔で言った。「たぶん、リンゴはライン川の小さな支流の水に乗って、流れ流れてドイツとスイスの国境に横たわるボーデン湖までたどり着くと思うわ」

「うん、そうだろう」

私も真顔で言った。山の中の会話は面白いものだ。たとえ冗談で言ったことでも、人が出る言葉はその通りだと思うようになるからだ。それは自然の中になると、時と動きが自分と共振し合い、自分の心が浄化して純粹になって子供のような心になり、目に映るものに新鮮さと驚きを感じたりするからだ。

一時間ほどの昼食を済ませてから、再び急勾配の山道を這うように登り出した。

日射は強く、鼻先からは汗がしたり落ちてくるようになった。さらに高度をグングンと上げて行くと、乗越しのところに出た。と、サッカー場ぐらいの湿原地に、高山植物の花々が、色とりどりに咲き乱れているのが目に飛び込んできた。花に優しく迎えられたような気持ちになった。もし人間が楽園を想像するなら、このようなところだろう。

お花畑の湿原の奥には、残雪で覆われた三〇〇〇メートルの峰々が角を立てたように聳え、まさに岩と雪と花の大パノラマだ。これから、さらに登り続けようとしたが、この景観にすっかり魅せられてしまい、妻と話し合い、ここでしばらく休むことになった。

山靴を脱ぎ、柔らかい草の上で仰向けになった。と、前に聳え立つ高峰の雪渓から吹き下してくる涼しい風が、体全体を渡っていく。目を閉じ続けていると、山の静寂に吸い込まれ、大自然に包まれたようになり、自分の存在が無くなっていくようになった。ウトウ

トとなり出した。

ふと、目を開けると、妻とミヒヤエルが雪溪から流れ出た水の上に、草船を浮かべて遊んでいるのが見えた。

その二人のところに寄ると、日に焼けて鼻が赤くなった顔の妻が、

「入院中の母に、このような景色を見せたいわね」

と、周りの光景を見ながら言った。

「そうだね。お母さんと一緒に住むようになって十三年間、自分たちは毎夏三人でスイスの山々に訪れているが、お母さんとは一度も来たことがなかったからね。せめてこの写真を撮って、それを観せることにしよう」

どこを写しても絵になる風景に、レンズもよろこんでいる。

二時間があつという間に過ぎていった。私たちはさらに進む予定だったが、山の午後は天気が安定しないので、登ってきた山道を引き返すことになった。健脚の足なら二時間半の下りだが、筋力が弱いミヒヤエルと一緒になので、四時間は計算しなければならぬ。

彼は母の歌に合わせて、たのしそうに歩いていった。遠くから近くから、カウベルのカランカランとした澄んだ音が聞こえ、そちらへ視線を向けると、放牛たちが草を食んでいた。なんと長閑な眺めなのだ。

周りの草原には、数知れぬ高山植物が誇ったように咲いている。紫色の小さなリンドウや鉄帽子、それに白い色のマーガレットとアネモス、黄色のアルペンモーアと赤色のアザミ、どの花も色鮮やかだ。アルプスの山々を飾る可憐な高山植物、そこには力強さが秘められてあり、気高いまでの気品が備わっているのだ。花好きな妻は、足を止めては腰を折り、それらを見入っていた。

草と花の織りなす香りのなか、柔らかい道を踏み続けていると、山靴が草地に沈み込んで、体が自然と浮いたようになり、心は弾み通した。二人も同じような気持ちだろう。

時々、兎よりもいくらか大きいアルプスマーモットがキーキーと鳴いているのを耳にする。その方向に目をやると、後ろ足二本でちょこんと立ちながらこちらを見て、警戒している様子だ。

再びユーフ村に戻ると、太陽はもう山の奥に沈みはじめ、辺り一面は茜色に染まりかけていた。いつもより長い山行のため、三人とも疲れ切ってはいたが、快い疲れでもあった。

ミヒヤエルと妻がシャワーを浴びている間に、わたしは夕食作り。

一時間して、できあがった料理を食べていると、玄関の戸を叩く音が聞こえた。妻が椅子から立ち上がり、早足でそのほうへ向かった。

五分が過ぎたが、彼女は戻ってこない。気になり、玄関先に出ると、妻と貸山荘の女将であるマイヤー夫人とが話をしていた。

その二人に近づいて、

「どうした？」

と、深刻そうな顔となっている妻の目を見ながら訊いた。

「兄がマイヤー夫人宅に電話をかけて、母の病状が急に悪化したと伝えたのよ。兄は、私たちがすぐに帰るようには言わなかったようだけれど」

それを聴くや、私の体内に電気のようなものが走った。妻は私の目を見つめている。その彼女に、急に熱くなった言葉で言った。

「とにかく、これからすぐにお母さんのところへ行こう。一刻も早いほうがいい！」

妻は即肯いた。彼女の気が動転していることは、二十年間一緒に暮らしているので、手に取るようにわかった。まさかと思つたことが現実となり、私も同じ心境だった。

妻は居間に戻り、今も皿に盛つたパスタを食べ続けているミヒヤエルに、ゆっくりわかるように、

「これからすぐにテュービンゲンへ戻るわよ。おばあさんの具合が急に悪くなったのよ」

と言うと、彼は母の顔を見ながら、

「おばあさん　おばあさん」

と、同じ単語を何度も繰り返した。ダウン症の中でも障がいの発達がかなり重たいので、どこまで妻が言ったことを理解したかわからないが、おばあさんのところへ帰るのでうれしそうな表情を浮かべた。

彼はかれなりのやり方で、またマイヤー夫人も室内の持ち物をまとめるのに手伝つてくれる。それらを車に詰め込んで腕時計をのぞくと、針は十時過ぎを指していた。手を伸ばせば、キラキラ輝いている星に届きそうな夜空の下、テュービンゲンへ向けて走り出した。

秘境の地であるユーフは、ライン川支流のそのまた支流の最奥にある小さな村。深い渓谷に沿つた狭い道なので、ハンドルを少しでも間違えれば、谷底まで一気に落ちてしまうだろう。

「暗いので、気をつけてゆっくり、ゆっくり走って！」

助手席に座っている妻が、語を区切るようにして何度も声を出した。

「ここで事故にあつたら、大変だ。大丈夫、慎重に走る」

カーブの多い道も終わりとなつた。

「今回、休暇を取つてここに来るべきではなかつたね」

「でもね、ヒデジ、病院で母とも話をしたでしょ。母は自分で食事を摂れるようになつたし、私たちに『行つておいで』とニコリした顔で言つたでしょ。兄たちも私たちが毎日病院通いをしていたから、休暇を取るようにと薦めてくれたし」

「そうだけれど。それにしても、お母さんに何が起こつたのだろう？」

「兄と直接話をしていないからわからないわ。とにかく運転気をつけてね。あなたは相当疲れているから、わたしから絶えず話しかけていくわよ」

落ち着いた彼女の声だ。胸がさらに騒いでいるだろうと想像していたのだが、心が乱れていたのは、むしろ私のほうだった。

緊張した三十分の渓谷の道も終り、スイスの高速道路に入った。と、今度は単調な運転となつた。それにつれて、睡魔が襲つてくるようになった。後部座席では、ユーフ村を出てから直ぐに寝入つたミヒヤエルが、今は深い眠りのなか。今日歩いてきた山の光景を再び見ているのだろう。

妻が盛んに話しかけてくるのに応じながらの運転となつた。

スイスからドイツの高速道路に入ると、妻も今日の山行の疲れが出てきたようで、言葉数が少なくなつた。わたしはライトに照らされる一点を見つめながら、

「眠つてはいけない、眠つてはいけない」

と自分に言い聞かせながら、真夜中の高速道路を時速百三十キロメートルで走り続けた。

一章 介護の日々

家の裏にある駐車場に車を停めてから腕時計をのぞくと、午前三時過ぎ。後席ではミヒヤエルがぐっすりと眠り込んでいる。その彼を揺り起こし、家に入り、ベッドに運んだ。ミヒヤエルが寝入ったのを見届けてから、妻は病院へ行く仕度をはじめた。

「ミヒヤエルは朝まで眠っているわ。これから、わたしひとりで病院へ行くわ。あなたは、彼が目覚ましたら一緒に来てね」

「でも、こんな真夜中にバスは走っていないし、歩いたら四十分はかかるぞ。車で病院まで連れていくよ」

「あなたは相当疲れているわ。それに、ミヒヤエルが目覚ましたとき、誰かがいないといけないわ。自転車だと十分で着くから」

「わかった。お母さんが危ない状態だったら、すぐに電話をしてくれ」

彼女が家を出てからベッドに入ったが、義母の容体が気になつてなかなか寝入ることができないでいた。それでも二時間ぐらいウトウトとしただろうか、浅い眠りのまま目が覚めた。ちようど近くの教会の鐘が七つを打ち出した。

それを耳にしながらかベッドから身を起こし、ミヒヤエルの部屋に行つてカーテンを開けた。と、彼は目を覚まし、辺りをキョロキョロと見回した。自分がどこにいるか不思議そうな顔である。

「ミヒヤエル、ぐっすり眠つたようだね。もうテュービンゲンの君の部屋だよ。これから朝食を摂つてから、おばあさんのところへ行くからね」

「おばあさん ママ どこ？」

彼は目を擦りながら、単語を並べた。

「ママは病院のおばあさんのところにいるよ。ミヒヤエルもおばあさんに早く会いたいですか？」

「うん おばあさん」

そう声を出してから、彼はベッドから出た。

二人で朝食の準備に取りかかった。さいわいユーフ村で買ったパンがあったので、それにジャムを塗り、紅茶を飲んでから病院へ向かった。

入院患者百名ほどの病院は、玄関がそう広くないために受付の人と必ず目が合う。三週間半前に、義母が入院してから私たち家族は毎日通い続けていたので、受付の人たちは私たちのことをよく知っていた。

「休暇はどうだった？」

いつもの若い女性がミヒヤエルに声をかけた。彼は、「ウン」と応えてから奥へ進んだ。人と会う時はいつも手を上げてニコニコしている彼だが、今は違っていた。

二階の病室のドアを開けてから、ベッドで横たわっている義母のところに寄った。

「おばあさん！」

ミヒヤエルがいつもより高い声で呼びかけた。しかし、義母は深く眠つたままだった。

頭の上には二つのビンがぶら下がり、鼻には管が入っていた。重篤な状態だと一目でわかった。

義母の顔をしばらく見続けたあと、ベッドサイドに座っていた妻とミヒヤエルを連れて病室を出て、廊下にあった長椅子に腰かけた。

妻が話し出すのを待った。

「三日前から肺炎に罹ったようで、非常に高い熱が出たらしいわ。でも、抗生物質を飲んでから、落ち着いたと看護師さんが話してくれたわ。お医者さんとはまだ会っていないけれど、一時間したら説明してもらおうことになっているわ。兄たちとは、電話でもう話をしたわ。とにかく、あなたもお医者さんの話を一緒に聞いて」

「もちろん。でも、よかったよ、命にかかわる状態でなくて」

「でもね、わたしに話してくれた看護師さんが変なことも言ったのよ」

「変なこと？」

「ええ、肺炎になってから、急に薬も食べ物も摂らなくなってしまったらしいの。看護師さんが言うには、自分で決めていられるらしいと。それに、頭の働きが低下したともつけ加えたわ」

妻の顔に影が差した。

「おかしいな。私たちがスイスへ行く前には、薬も飲んでいたし、食べ物も自分で摂るようにもなっていたのに」

その看護師が言ったことを、打ち消そうとした。しかし、経験のある看護師が理由もなく、そのようなことを口に出すはずもないだろうとも思った。

「本当だろうか」

妻は黙り続けていた。

しばらくして、なおも母の手を握り続けている彼女に、

「お母さんと、話をすることはできたの？」

と、訊いた。

「二時間前に母はうっすらと目を開けたわ。そして、わたしの顔を見たわ」

「反応はあったの？」

「わたしが来たことは、わかったように思えたわ。でも、またすぐに眠りはじめたわ」

そう言うてから、妻は二人の兄たちが見舞いに来ていたことなどを語り出した。それを聴いてから、私たち三人は再び病室に戻った。

二人部屋なのだが、義母の病状が悪化したので、今はベッドが一つだけ。睡眠をとっていない妻は、かなり疲れ切った様子で椅子に座り、私たちが家から持ってきたパンを口に入れながら、ミヒヤエルと話をしていた。

一時間が過ぎた時だった。義母が目を開けたので、声を高くして妻に、

「目を覚ましたようだ！」

と、言った。彼女は急いでベッドに駆け寄った。

「お母さん、私たちはここにいますよ。スイスから帰って来ましたよ」

義母は、娘の顔をじつと見つめた。隣にいたミヒヤエルが、「おばあさん おばあさん」と声を上げると、彼女はゆっくりりとミヒヤエルのほうに顔を向けた。いつもの優しい笑顔だ。私たちが来たことはわかったようだ。その彼女に、

「お母さん、気分はどうですか」

と訊くが、彼女は何も応えないまま、再び眠り出した。ちょうどその時、顔馴染みの看護師がドアを開けて入ってきた。

「主治医が待っていますから、こちらに来てください」

私たちは、彼女に連れられてドクターが待つ室に入った。

「いやー、帰ってきましたね」

そう言つて、立襟の白衣を着た四十代前半のいつもの医師が、私たち一人ひとりに手を伸ばしてきた。三週間半前にこの医師と初めて握手をした時、こんなにも柔らかい手があるのかと思つたほどだった。その彼に、昨晚スイスの山麓の村ユーフを發つて五時間近くかけてチュービンゲンに戻つたことを手短かに話した。学生時代に東京の大学で実習をしたことのあるその医師は、ニコニコした顔で聞いていた。

そのドクターに、妻が訊いた。

「私たちがスイスの山へ行くときは、一人でも食事を摂っていたのに、肺炎に罹つたと看護師から聞きました。どうしたのでしょうか」

「二日前に肺炎に罹り、高熱となつたので、抗生物質を投与しました。今は熱も下がりが、落ち着きましたが、心臓の機能がかなり低下しています。そのうえ、入院した時点よりも、脳の血管障害がかなり進行しています。あす、何が起ころともおかしくない状態です」

ドクターは妻の目を正視しながら、さらに続けた。

「お母さんは八十七歳の高齢で心臓も弱く、手術するには危険が大き過ぎます。わたしが親族と話をしたとき、お母さんは延命治療を希望していないとおっしゃいましたね」

「ええ、母は以前からそう言っておりました」

ドクターは静かに肯いた。

それを見た時、義母の命はあとわずかなのだろうかと思つた。と同時に、看護師が話した「薬も食事も急に摂らなくなつて、自分で決めているらしい」とのが浮かんできた。そうなのだろうか。しかし、今、この場でそのことをドクターに訊ねる勇氣はない。それとドクターがどのようなことを言うのが恐ろしくて、口を噤み続けた。妻は沈思しながら、床の一点を見つめていた。その彼女の肩に手を置きながら、

「とにかく、熱が下がつたことだし」

と、言つた。妻はなおも床を見つめていた。彼女もわたしと同様に「決めているようですよ」とのことを思っているように見えた。また、彼女もそのことをドクターに訊ねる勇氣がないように思えた。その彼女に、

「とにかく熱も下がつてきて、私たちのことがわかつたようだし、よかつたね。ありがたいことだ。ミヒヤエルの声も聞こえただろうし」

と言うと、妻は、

「そうね」

と低い声を出し、床から目を外し、私の顔を見つめながら肯いた。

私たちの会話を聴いていたドクターが、私と妻を交互に見た。

「今後のことは、一週間して、お母さんの症状をみてから決めましょう」

そう言つたあと、ドクターはミヒヤエルのほうに顔を向けた。

「スイスの山はどうだった？」

彼はそれには答えずに、「おばあさん おばあさん」と声を上げた。

翌日、妻は駅での仕事を半日で終わらせてから、自転車に乗って病院へ行き、以前のよりに毎日通い出した。二人の義兄たちも、一日置きに病院を訪れるようになった。

義母はほんの少量の水分を自分で摂るようになり、会話しきものがいくらかできるようになった。ただ、会話といつても脳の血管に障害があるので、話し方は以前とは違っていた。それと、時々私たちが誰なのかといった表情を浮かべるようになった。それでも、私たちは彼女の傍で、少しでも言葉を交わすことができるようになったのをよるこんだ。点滴とわずかの水分を取るだけだったが、彼女の頬に赤みが出てきた。

それから一週間が過ぎ、今後の話し合いが小さなカンファレンス室で、主治医と二組の義兄夫婦と私たち夫婦とで持たれた。

ドクターが今の義母の病状について詳しい説明をはじめた。私たち六人はその言葉に耳を傾け続けた。ドクターがさらにのべた。

「お母さんがこの病院を出たあとのことですが、二つの可能性があります。一つは介護が百パーセントできる高齢者ホーム、もう一つは自宅での介護です。今のお母さんの病状からして、百パーセント介護が必要なので、それなりに設備の整った高齢者ホームがいいように思います」

そのあと、ドクターが次に何かを話そうとしたので、それを遮るようにして、「もうそのことについては、妻と決めていきます」

と、わたしは隣にいる妻の手を握りながら言った。妻も、兄たちに懇願するような声を出した。

「このことについては、数日前からヒデジと話しあっていたわ。ヒデジが自宅での介護を強く主張し、わたしも母の介護をどうしてもしたいわ。母は私たちとずっと一緒に暮らしてきたし、母の住み慣れた私たちの家で看たいの。いいでしょ？」

二人の兄たちは直ぐには返事をしなかった。が、少しすると、長兄のエアハルトが私と妻の目を正視しながら、

「ゲートルトたちがそう決心しているなら、自宅での介護もよいだらう。自分たちも近くに住んでいるから、交替で看ていこう」

と、言った。私たちの会話を聴いていたドクターが、最後にのべた。

「みなさんの意見がそうなら、自宅での介護となりますね。この病院には、自宅介護に必要なことを相談する専門員がいますから、その人と話をしてください」

三十分ほどの話し合いが終わった。前日、妻と話し合って、「自宅で看よう」と彼女に伝えてあった。ここで恩返しをしなければと、心に決めていたからだだった。義母が示す、私たち家族への思いやり、それに彼女の生きかたを見ていると学ぶことが多かった。その彼女の最期を自宅で看ようと決めたのだった。

家での介護が決まってから、妻は母の部屋を整えはじめた。陽が直接当たらないようなところに電動式ベッドを据えたり、母の好きなランの花を寝ているも見られるところに置いたりして、きめ細かい心配りをしていった。ミヒヤエルはおばあさんが戻ってくるので、うれしそうな表情を浮かべていた。私たちは彼女が帰ってくるのを待った。

病院からの寝台車が家の前で停まり、義母が部屋に運ばれた。私と妻とミヒヤエル、そ

れに二組の義兄夫婦が、その様子を見守っていた。家から救急車で病院に運ばれて、四十日ぶりの帰宅であった。

義母は自分のベッドに移されるや、声を少し高くして、
「ここはわたしの部屋ではないの。一体、どうしたの？」

と私たち全員にわかるような高い声で、それもよろこばぬ表情で言った。その口調は意識のはっきりしたもので、病院での夢現の時とは違っていた。予想もしなかった彼女の反応を見て、私たち全員は目を見合わせた。と、エアハルトが母にゆっくりと言い聞かせるように語りかけた。

「お母さん、自分の部屋に戻って来たのですよ。ここでゲートルートとヒデジ、そしてわたしたちが看ていきますよ」

母は息子の顔を見続けたあと、少し黙っていた。

その彼女に、私たちが声を上げた。

「お母さんが帰ってきてうれしい」

それを聴いた義母は、私たちを見ながらニッコリした。その顔は白く痩せてはいたが、頬に赤みもあつて、以前の義母の顔であった。それを目にしてホッとした気持ちとなった。しかし、それと同時に、彼女はなぜ自分の部屋に戻ってきた時、よろこばぬ表情を浮かべたのかとの考えがわたしの頭の中を駆け巡った。

看護師が言った「決めているらしい」との言葉が浮かんだ。しかし、それを打ち消した。恐らくお母さんは自分で体を動かすことができず、寝返りも難しく、尿管がついたままで常時点滴を外せない状態では子供たちへの負担が大きくなってしまふと考え、よろこばぬ顔をしたのだらうと思った。と、その時、妻が寝ながらも飲めるコップを、母の口元に運んだ。

「のどが渴いていない？ リンゴジュースの薄めたのがあるから、飲んでみない？」

彼女はそのコップをしばらく見つめてから、ジュースを一口飲んだ。

「なんて、おいしいの」

実に澄んだ声である。珍しく自分から何口か飲んだ。それを目にして、私たちはお互い顔を見合わせて微笑みあった。その様子を見て、飲んでくださいとわたしは心の中で呟いた。

エアハルトの嫁であるクリスタが、義母に顔を近づけながら、

「家で飲む水はおいしいでしょう」

と語りかけると、彼女は窪んだ目を瞬かせたあと、再び眠り出した。私たちは部屋を出て、今後についての話し合いとなった。

妻が皆に紅茶を入れながら、

「今日の母の表情は、病院にいたときとは、すこし違うようにも見えたわ」

と言うと、クリスタが、

「自分の部屋はいいのよ。病院とは違って、住み慣れた家が一番いいのよ。体がそれを証明していたわ」

と、合槌を打った。

紅茶を飲み終えたエアハルトが、話し出した。

「今日のような状態が続いてくれればよいのだが。とにかく、退院するときも医師から、

『あす、何が起こつても不思議でない』と告げられたし、誰かが常に母の傍にいなければならない。これからは皆で一日一日のローテーションを組んで、母を見ていこう」
私たちは肯いた。

クリスタがパンを食べているミヒヤエルに、同情した目つきで、
「おばあさんと遊ぶことができなくなってしまったわね」

と言うと、彼は私を見ながら「おばあさん　へや」と単語を並べた。その彼に、言った。
「これからは一人でおばあさんの部屋に入らないように。パパかママと一緒にいるときは、入っていないからね」

彼はわかったようで、隣に座っている母に顔を向け続けていた。

義兄たち夫婦が帰ったあと、妻はキッチンで食器を洗い出した。そのうしろ姿を見ながら話しかけた。

「家に戻ってきたとき、なぜお母さんは困惑したような顔をしたのだろうか」

妻は黙っていた。母のことを一番よく知っている彼女だ。もうこのことは、口に出さないことにしよう。妻も私と同じ考えでいたのだろう。

義母が病院から戻って、自分の部屋で過ごすようになって二日目の夜のことだった。病院では毎日点滴をしていたのに、家に戻ってからはしてないのに疑問を持ったわたしは、妻に言った。

「お母さんは自分でいくらか水を飲むようになったけれど、食事はまったく摂っていないので、点滴をする必要があるのではないか」

「わたしもそう思っていたの。なぜ、しないのかしら。明日の朝、介護センターから来る介護士に訊いてみるわ。変ね」

彼女は首を傾げながら応えた。

翌日、介護センターから派遣されてきた訪問介護士に、私たちは点滴について訊ねてみると、三十歳前後の赤い髪をした介護士は、

「病院からの伝達事項には、点滴については何も記されていないだったので」

と答え、直ぐに義母のホームドクターに電話をかけた。ドクターは、「すぐに点滴をするように」と彼女に指示し、また点滴がはじまることになった。病院側の単純な記入ミスとはいえ、わたしは慥然とした。

その介護士が点滴の針を刺すのだが、腕の血管が狭くなっていたので、足からの注入だった。痩せ細った足に針が刺されると、針だけが大きく見えるのだった。

一日に一リットルの点滴と、時々口からほんの少しの水分を飲む義母だった。水分を口に含むと、「ああ、おいしいわ」と潤んだ声をしばしば出した。それを聴くたびに、わたしは安堵感を覚えた。しかし、コップを口にもっていても飲まない日も多くあった。そのような時は、次はぜひ飲んでくださいと願った。

肺炎がまだ治っていないのか、義母は時々咳をした。その時は体が少し揺れるが、それ以外はまったく動かぬ状態であった。そうなると床ずれが生じてしまうので、三時間置きに体の向きを変えねばならなかった。体位を変える時は辛そうにしていたが、私たちに合わせて体を動かしてくれた。その体位変えも介護士からやり方を教わり、何度か経験しているうちに、難なくできるようになっていた。

日中は寝て、夜はウトウトと目を覚まし、時々意識のない声で、「ハロー、ハロー」と

何かに向かつて呼びかける義母だった。もちろん、彼女は介護保険の最重度に認定されていたので、介護センターから一日に三回、一回につき一時間の割りりで介護士が訪れて、専門的な処置をしてくれた。しかし、水を飲ませたり、体位を変えたりするのは私たちの役割だった。夜は、私たち夫婦と二人の義兄がいつも交替で、眠らずに看ていた。

義兄たちは私の家から車で四十分離れたところに住んでいた。平日は仕事を終えてから来て、翌朝職場へ向い、週末も泊まりがけで母を看っていたので、二週間が過ぎる頃になると、彼らの目の下に隈ができていた。

エアハルトは音楽好きで、バイオリンを上手に弾く。義母の部屋から、澄んだ音色が時々流れてくるのを何度か耳にした。また学校の教師である次兄のディーターは、声を出して本を読んでいた。

妻は日中仕事をしていたので、義兄たちの食事を作るのは私の役割だった。献立には頭をいため、気をつかったが、彼らとより親しくなっていた。私たちは皆それぞれの仕方で、ベッド上で寝たきりになっていた彼女と接していた。

義母が家に戻って、三週間が過ぎた。いつもの介護士が来て、尿袋から尿を取り出し、彼女の体をタオルで洗い、口の中を脱脂綿で拭いてから点滴の針を足に刺した時だった。「何をしたの」

と、義母は弱々しい声で訊いた。いつもはそのようなことは訊かない彼女だったが、意識がはっきりあった声だった。

「点滴の針を足にさしましたよ。なぜ点滴をしたか、わかっていますよね」

介護士はそう言い、さらに、「もし点滴を拒否したかったら、おっしゃってください」

と、義母の耳元でゆっくりわかるような声で言った。それを聴いた彼女は低い声で、「ありがと」と言い、肯いた。

これを傍で介助しながら聴いていたわたしは、本人の意志を尊重している会話内容とはいえ、愕いた。義母の体はもう弱り切っている中で、たとえ意識がはっきりしていたとはいえ、これほどの深刻なやりとりが、目の前で話されたことに、大きな衝撃を受けたのだ。水分をほんの僅かしか取らない彼女にとって、点滴をしないと言うことは、即、死を意味したからでもあった。

自分からたとえ死んでいくことを願っても、本当に心の底から死を望んでいる人はいないのではないかとの考えを持つ私だったので、義母がたとえそれを願ったとしても、私の理性とは別に、心情的にはなかなか肯定できないのだった。

たしかに、義母は毎日の暮らしの中で、「ありがとう」をしばしば口に出す人だった。そのことから言えることは、彼女は、神、自然、社会、それに周りの人から生かされていることに、常々感謝していたのだらうとも思った。

介護師は一時間ほどいてから、

「また来ます」

と言うと、義母はか細い声で、

「ありがとう」

と、答えた。

仕事から戻ってきた妻に、この時の会話を話すと、彼女は何も言わず、直ぐに母のどこ

ろへ行つた。私も一緒だ。

彼女は部屋に置いてあつた薄ピンク色のランを義母に見せ、

「きれいに咲いているわね」

と、話しかけた。義母は弱々しい目で、その花を見続けてから、

「そうね」

とか細い声を出してから、再び目を閉じた。

何も食はず、わずかな水分と点滴の毎日だったので、義母の体は少しずつ衰えていった。

一カ月が過ぎた頃から、眠っているような時間が多くなり、夢をよく見ているのか、意識のない声を時々出すようにもなった。ベッドサイドにいた時のことだった。

「上を開けて、上を開けて」

訴えるようにして何度も呟いているのを聴いた。それを耳にした時、わたしは信仰の篤い彼女から出た言葉だと思つた。その顔は和んでいた。

家に帰宅した妻に、そのことを話すと、彼女は寂しげな声を出した。

「わたしはそのような言葉を耳にしたことはないわ。母はこのところ、意識がまったくないわ」

それを聴き、嫌な予感に襲われた。居間の壁に貼り付けてあるローテーション表を見た。

「今晚の泊まりはディーターか」

「ええ、そうよ。兄は夜の十時ごろに来て、明日も仕事があるので、朝の六時に家を出ると思うわ。わたしは朝食を母の部屋で兄と摂るわ」

翌朝、妻は一階下の母の部屋に行き、兄を送り出してから私たちの居間に戻つた。

「昨夜、兄は聞いたらしいの。母が二十五年前に亡くなった父の名前を、何度も呼んだのを。今まで父の名前を口に出したことがなかったのに。それに、母のお母さんと亡くなつた、わたしの姉の名前も数回呼んだらしいの。そのあと、咳も出て熱も上がったとも言つたわ」

肩を落とす、涙ぐんだ妻の声だ。目尻には、涙の跡が残つていた。わたしは妻の顔をまともに見ることができないでいた。

しばらくしてから、彼女に低い声で言った。

「また肺炎に罹つたのかな」

「そうかもしれないわ。心配だわ。母はここまでよく生きていると思うわ」

「そうだね。医者も看護師も心臓が弱い、彼女がここまで生きているのが、奇跡だとも言つていたからね。私たちのために、お母さんは生きているのだよ」

「そうね。兄たちもそう思っているわ」

わたしは頭を下げ続けた。妻はハンカチを手にとって、何度も鼻をかんでいた。

義母は、意識のない中でも私たちの願いを叶えてくれているのだ。これが彼女なのだと思つた。頭を下げ続けた。

その義母とわたしが初めて会つたのは、一九七七年のことだった。

一章 温かい手

教室内を見回すと、皆女性である。まもなく自分の番だ。もう一度これから言うことを頭の中で整理した。何とかなるだろう。立ち上がった。

「わたしの名前は横井秀治、二十八歳です。日本から二週間前にここベートルにやってきました。日本では、重知的障がいのある子供たちが住んでいる施設で働いていました」さらにドイツ語で語ろうとしたが、二十三名の女性たちの視線を一斉に感じたので一瞬言葉失ってしまった。と、黒板前に座っていた先生が、皆に、

「これから半年間、横井さんはこの教室で皆さんと一緒に学びます。彼は正規の研修生ではなく、聴講生です」

と言い、私のほうを見た。

「そうですね、横井さん」

「はい、そうです。よろしく、お願いします」

三十歳前後の女性たちが、手で机をたたいて歓迎してくれる。その彼女たちに、外国人であるわたしがなぜここで勉強したいのかを言おうとしたが、隣の人がもう立ち上がって話しはじめたので、止めにした。

これから机を並べて一緒に学ぼうとする彼女たちのほとんどが、幼稚園の保育士や看護師、それに社会福祉士たちである。今まで働いていた職場から離れて半年間、障がいのある子供たちを療育するための教育を勉強するために、ここ北ドイツ地方の障がい者の街であるベートル内にある治療専門学校に、国内から集まって来たのだった。皆、生き生きとした声で自分を語っていた。

一通りの自己紹介が終わったあと、この女性たちとこれからドイツ語での授業に、毎日ついていけるだろうかとの不安が走った。が、今からではあとに引けない。自分で希望したことだ。最後までやり通そうと言い聞かせた。それにしても、すべて女性なのに驚いたと同時に、多少うろたえた。

その二十三名の中に、ドイツ南西の黒い森地方生まれのゲートルト・ゴメルという幼稚園の保育士がいた。私の席の横にいつも座っていた女性である。学校での講義内容が難しくなると、授業が終わってから、わたしはしばしば彼女から説明をもらっていた。

背丈は百六十センチぐらい、髪の毛は明るい栗色、スカートがよく似合い、自転車によく乗っていた。その彼女と週末になると、近くの森をしばしば散歩をするようになった。学校に通い出して三カ月が過ぎた頃になると、わたしはクラスの皆と溶け合うようになった。と同時に、障がいのある人と一緒に暮らす、住民七千名のベートルでの生活にも慣れ出した。

そのようなある日、授業が終わわり、ゲートルトと一緒に歩いている時だった。彼女が立ち止まって、私の目を見ながら、

「隣の街の映画館で、今チャプリンのライムライトを上映しているのだけれど一緒に観に行かない？」

と、訊いた。私の好きなフィルムだった。即座にOKと答えた。

二日後、路面電車に乗って隣の大きな街ビーレフェルトに行き、映画館に入った。かなり混んでいたが、私たちは二つの空席を見つけ、そこに座った。

スクリーンにチャプリンの姿が映り出されて十分もしないうちに、隣にいた彼女がハンカチを目に当て出した。情が深い女性なのだと思う。

何度観ても、チャプリンの動きとメロディーは心に残るものだ。映画館を出たあと、私たちは肩を並べてライムライトのメロディーと一緒に口ずさみ、そしてチャプリンの動作をわたしは真似しながら、プラタナウスの並木道を歩き続けた。

十分ほどで停留所に着き、路面電車を待っていると、彼女が私に突然訊いた。

「来週の水曜日に、母がテュービンゲンから来るわ。よかつたら会ってみたい？」

一瞬、迷ったが、前にいるゲートルトに関心を抱くようになっていたので、彼女を育てた親がどのような人なのかとの思いとなり、「いいよ」と答えた。

「まあ、うれしい。母には、ヒデジのことは電話で話をしてあるわ。山が好きで……」

そう言ったあと、彼女は言葉を弾ませながら母について語りはじめた。

夫人はゲートルトと同様に、黒い森地方で生まれ、父及び祖父は牧師。五人のきょうだいの末っ子として育ち、姉二人は牧師と結婚し、夫人も牧師と結婚して四人の子をさざかった。ゲートルトは末娘だった。

夫人と会う水曜日になった。小豆色をした古いレンガ造りの郵便局前で、わたしは立っていた。目の前を濃いねずみ色の服を着て白い帽子を被った、姿勢正しい六十歳ぐらいの奉仕女が通り過ぎていった。てんかん発作を起こした際に、頭を地面に直接打たないため特殊な帽子を被った男性が、ゆっくりとした足取りで郵便局に入っていく。

腕時計をのぞくと、二時五分前。約束した時間まであと少しだ。春のうららかな陽を浴びながら、二人を待ち続けた。

近くの教会で、二時を告げる鐘の音が鳴った。そろそろ来る頃だと思っていると、五メートル先に二人の女性の姿が見えた。彼女たちのようだ。手を振ると、向こうも手を振り返した。歩み寄った。

二人の前に立つと、ゲートルトがニッコリして、隣にいた人を紹介した。

「母です」

「こんにちは、マリアンネ・ゴメルです」

夫人は笑顔を浮かべながら、私の手を握った。

「こんにちは、お目にかかれてうれしいです」

彼女の手を握り返した。ゲートルトと同様に、掌がとても温かい。その時、「ヒデジ、ヒデジ」の大きな声が耳に入った。そのほうを見ると、数名の子供たちが車椅子に乗って、寮母さんたちと反対側の通りを歩いていた。その彼らに、「ハロー」と声を出して手を振った。その様子を見ていたゴメル夫人が、薄ブルーの青い瞳を私に向けた。

「知り合いの子供たちなのですか」

「はい、わたしが実習しているグループホームの子供たちです。今、散歩の時間なのです。今日の夕方、彼らのところへ行くことになっています」

「そうなのですか」

夫人はそう言いながら、車椅子に乗っている子供たちを見続けていた。何かを想い出したような顔つきである。その横顔は、娘とそっくりだ。色白で額が広く、背丈は私と同じぐらいで一六八センチはあるだろうか。濃い緑色のオーバーコートを着て、グレーの帽子がよく似合っていた。

ゲートルトと知り合ったのが四ヶ月前のこと。彼女をよく知らないうえに、今度は彼女の母に会うということで、いくら緊張していた。が、子供たちが、「ヒデジ」と大きな声で呼んだのがきっかけで、その緊張も解れ、ゴメル夫人とスムーズに言葉を交わすことができた。

ベーター内を散歩することになった。歩き出すと、夫人は娘とよく話をしていたが、次第に私とも話をするようになった。

「あなたのことは、娘から電話で聞いていましたよ。ここで勉強するために日本から来たのですね」

「はい、そうです。日本では重度の知的障がいのある子供が住む施設に勤めていたのですが、てんかん発作を起こす子も多くいて、療育の難しさを感じていたのです。そのようなある日、てんかんの治療では世界に知られているベーターのことが専門書に載っていたのを読み、勉強しようと決心して、ここにやって来たのです。昼間は学校で治療教育学を学び、夕方はホームで実習しています。日本を発つてから、もう四カ月が過ぎました」

「そんな短期間で、よくドイツ語を話せますね」

「学生時代、大学を一年間休学してドイツ語圏内の国に滞在したことがあります。そのときにドイツ語を勉強しましたから。それに、今も夜は近くの市民大学でドイツ語を習っていますので」

「そうなのですか」

夫人は背きながらオーバーコートの前ボタンを外し、私の横顔を見た。

「どのような理由で、知的障がいのある子供たちの施設で働くようになったのですか」

ゲートルトと知り合った時も同じ質問をされたことがあった。

「知的障がいのある子供たちに初めて出会ったのは、学生時代の最後の年、そろそろ就職先を考えはじめていたときでした。友人に誘われて、彼らの住む施設に行き、一緒に一週間過ごしたことがあったのです。彼らは、初めてのわたしに親しく寄ってきて、何かと話しかけてきました。その振る舞いは明るく、とても純粋に映ったのです。とにかく、彼らと一緒にいるだけで楽しかったのです」

夫人は耳を傾けて聴いていた。

「それから数週間して再びその施設に行き、園長に、『是非、ここで働かせてください』と願いを出して、職員になったのです。言葉での会話が乏しい彼らと寝泊りを共にしていると、ますます彼らに魅せられてしまいました。贅沢にも、彼らと同じような心境になりたいと思うようになったのです。その心境というのは、自分をありのままに出して、自分を守り、防衛しないということでした。そこに、言葉を越えた真実性があると感じたからです。とにかく、彼らと接していると、彼らが鏡となって自分が映し出され、それも自己中心的なエゴを自分の中に見出すことがしばしばでした」

さらに続けた。

「その施設には重たい障がいをもつ子供も多く、彼らは自ら語りかけることがすくないこともあって、問いかけるこちら側の真摯な心が大切なものになりました。それはまさに自然との出遭いのなかで、自然からの語りかけは直接ありませんが、こちらから積極的に話しかけ、問いかけると、それなりの返事を得るのに似ていると思ったのです。自然そのものの存在に尊さを思ったのです。それは彼らの存在の尊さと同じだと。とにかく、

自分は、この道で歩いて行こうと決心したのです」

そう話した時、夫人とゲートルードが目を見交わして肯いた。それが何を意味しているか、よくわからなかった。

私たちは再び歩き出した。二月下旬にしては暖かな日射しである。ゲートルードの案で、丘の上にある教会に行くことになった。

通りを歩いていると、奉仕女や看護師や介護士、それに医者や障がいのある人たちとすれ違った。

しばらくすると、かなり急な坂道となった。そこを登り切ると、大きな木々が立ち並んだ、うっそうとしたところに出た。その中に建つ、歴史を感じさせる古いレンガ造りの大きな教会堂へ向かった。

私たちは厚い鉄製の扉を開け、堂内に足を踏み入れた。日曜日の午前中の礼拝は、ベートルに住む人たちが満席なのだが、今はシーンと静まり返って誰もいなかった。

ゲートルードと婦人が祭壇の前に歩み寄っていくと、ステンドグラスを通した光が眩しいくらいに二人の周辺に注ぎ出したのである。娘が、母にこの教会の歴史について話しをはじめた。

しばらくしてから堂内を出て、再び歩き出した。ゲートルードと知り合ってから二人でこの静寂な森の中を週末になると、よく散歩していたが、今日はゴメル夫人も一緒である。太陽の光が、時々葉と葉の間から差し込んでくる。五分ほど行くと、神学大学の建物が見え出した。夫人に話しかけた。

「ドイツ南部地方のテュービンゲンに住んでいると聞きました。学生るとき、その街に寄ったことがあります。とても素晴らしいところですね」

「テュービンゲンに来たことがあったのですか」

夫人が驚いた表情で訊いた。

「はい、あの街には、知り合いの日本人もいるのです。その人はこのベートル神学大学でギリシャ語とラテン語を勉強していました。脳性マヒの人で、今はテュービンゲン大学で哲学を学んでいます」

「まさかあの人ではないかしら」

夫人は、そう言いながら娘と話をはじめた。二人が会話をする時は、方言語となるので、よく聴き取れない。しばらくすると、ゲートルードが話し出した。

「その日本の人、マルクト広場近くの大きな学生寮に住んでいない？ 母はその人を通りで、時々見かけたことがあると言っの」

「うん、彼は市庁舎から歩いて一分もしない学生寮に住んでいると思うけど」

「それでは、母のいう人とヒデジのいう人とは同じだわ。母はその学生寮の前に住んでいるのよ」

驚いた。と同時に、ゴメル夫人と共通した人のことで、話ができたとよるこびを覚えてた。夫人が私のほうに顔を向けた。

「わたしには障がいのあった長女もいて、娘からそのことを聞きましたか」

「はい、彼女よりも七歳上のお姉さんのことですね」

「その娘のアンネが」

夫人がそう言った時、数メートル先を歩いていたゲートルードが、草むらに春一番に咲

く白い身丈十センチほどの小さいマツユキソウの花を見ながら、「春になったわね」と弾んだ声を上げた。

夫人が何を語ろうとしたのかを訊ねようとしたが、会話の流れが再び母と娘になったので止めた。春を告げる黄色い花が芽吹き、木々の梢には小鳥が止まって、盛んに囀っていた。私たちは春の訪れを感じながら歩き続けた。

その散歩も終わり、ゲートルートが住んでいる寮の玄関前に私たちは立った。二人に別れの言葉を言おうとした時だった。

「午前中にりんごパイを作ったから、ヒデジも食べていって」

ゲートルートが私の顔を見ながら言った。どうしようかと迷っていると、ゴメル夫人が私に穏やかな声で訊いた。

「夕方の何時から実習があるのですか」

「六時からです」

それを聞いたゲートルートは、ニッコリした。

「では、それまでいいのですよ」

小さなテーブルを囲んで、ゲートルートが作ったりんごパイとコーヒーを飲みながらの談話となった。部屋の片隅に、ゴメル夫人の旅行カバンがあったので、夫人に訊ねた。

「明日から東ドイツを訪問すると、ゲートルートから聞いたのですが、そうなのですか」

「ええ、娘と一緒に、東の友人たちに会いに行く予定です」

夫人はニッコリして答えた。

「東ドイツには、そう簡単に入れないのではないですか。ビザ無しで行くのですか」

「ビザは取ってありますよ」

私たちの会話を聴いていたゲートルートが話し出した。

「もちろん、滞在許可は必要よ。でも、ライプツヒ市で本の見本市が開かれる際は、その期間だけ、簡単にビザが取れるのよ」

「でも、ライプツヒ市内から、移動してはいけないのでは？」

「原則はね。でも私たちは何度も見本市に行って、そこからドレスデン市近くに住む友人宅にも列車で訪れていたわ。今回、わたしと母が東ドイツへ行くのも、表向きには見本市見学となっているのだけれど、友人たちに合うのが目的なのよ。彼らとは、ドイツが東西に分離する前から親しくしていたわ」

彼女はそう言う前から、コーヒーをゆっくりと飲み、再び話し出した。

「障がいのある姉のことを、ヒデジにすこし話したことがあったでしょ。姉のアンネは、十歳までは一般の子供のよう成長していたわ。でも、それ以後、急に筋肉の発達が止まり、こんどは反対に筋肉が縮まって、不自由な身になって車イスで移動するようになってしまったわ」

彼女はそこまで言う前から一息入れ、再び話し出した。

「母はその姉をよく見ていたわ。もちろん、父もよ。その父が、五年前に突然の交通事故、それも車に撥ねられての即死だったわ。それ以来、母はアンネと二人で暮らしていたのだけれども、その姉も昨年三十七歳で生涯を閉じたわ。今回はその姉の死を、東の友人たちに知らせに行くのよ」

先ほどゴメル夫人が、「娘のアンネが」と言いかけたあとに話そうとしたのは、このこ

とだったのだろうと思った。と同時に、わたしが障がい者と出会った時のことを話した際、二人が目を見交わし肯いたのは、アンネと暮らした二人の経験から肯いたのだろうと思っ

た。壁にかかった時計を見ると、五時半を指していた。子供たちが暮らしているホームへ行かねばならぬ時刻だ。椅子から立ち上がった。

玄関先まで出てくれたゴメル夫人に握手しながら、

「再び会うことを願っています」

と言うと、夫人はニッコリして私の手を握り返してくれた。

子供たちの住むホームへ行く途中、ゴメル夫人のことが浮かんた。車椅子に乗った、障がいのある娘を三十七歳まで育て、一緒に暮らしてきた年月は並大抵のことではなかっただろう。それに、夫の急死。さぞ辛い日々が続いたことだろう。でも、それを感じさせない、あの優しい笑顔。それに、何と温かい手だったのだろう。

初めての人と会うのは、新鮮なものだ。特に、こちらがその出会いに意味を見出そうとしている時は、それがさらに生き生きしたものになるのだ。先ほど知り合った夫人との出会いは、まさにそのようなものだった。

三章 「おめでとー」

半年間の研修を終えたゲートルトとわたしは、列車に揺られ、七時間かけてドイツ南部地方のチュービンゲン駅に到着。二人とも大きな手荷物を持っていたので、駅前からタクシーに乗った。

五分もしないで夫人が住むネットカーハルデ十二番地に着くと、彼女が厚い木扉の前に立っていた。ベーターで会った時は冬のオーバーを身につけていたが、今は白い半袖のシャツを着て、いかにも涼しそうなスタイルである。ベーターで別れた際に目にした、あの優しい笑顔を浮かべている。夫人と握手をしてから建物内に入った。

ゲートルトから、「母とわたしが暮らしている家は、四百年以上も前に造られた五階建てで、階をかえて四家族が暮らしているわ」と聴いていたので、その家がどのようなものかと関心があった。

先ず、木の階段を上って二階の住居に入ると、フロアは明るい色の壁、それによく磨かれた板張りの床で、とても中世に建てられた家とはとても思えなかった。想像していたような、古く傷んだ住いではなかった。

ゲートルトの姉が使っていた部屋に通された。壁には、車椅子に座っているかなり痩せた女性の写真がかかっていた。それを覗いていると、ベーターで車椅子に乗った子供たちに優しい眼差しを向けていた夫人の姿が浮かんだ。自分の娘の面影と、あの子供たちが重なったのだろうと思った。

その部屋を出てから、ひとりで居間に入った。かなり広く、三十平米はあるだろうか。床は木張り、真ん中に重厚な木で造られたテーブルが置かれ、その上に三つのコーヒ―

カップとお皿が並んであった。大きな部屋の空間の割には窓が小さく、そのせいか、少し暗いようにも感じられた。

表通りに面したその窓から外を眺めると、正前に赤オレンジ色の瓦をした学生寮の屋根の部分が見えた。私と同じ年齢で、哲学の博士号を取ろうとしている知人が住んでいる、二百五十人用の寮だ。その向こう側には、川が流れ、遠方には低い山々が連なっているのが望める。高台に建っている家なので、遠くまで眺めることができる。家の前に立っているアカシアの木に、小鳥が止まって囀っているのが耳に入った。

向きを変えて部屋内を見回すと、ピアノとスピネットが並んであった。誰が弾くのだろうと思っていると、夫人が部屋に入ってきた。

「娘は今、近くのパン屋へケーキを買いに行きましたよ。すぐに戻ってくるでしょう。どうぞ、腰かけてください。電車に長く乗っていたから、疲れたのではないですか」

「いえ、そうでもありません」

そう言うってから、夫人を何と呼んだらいいのかと一瞬、迷った。というのも、二週間後には、前に立っている夫人が義母となるので、ムッター（お母さん）でもよいのだが、その言葉が口からなかなか出てこなかったからだだった。

黙ったまま、椅子に腰かけた。と、その時、ゲートルトがケーキを手にながら部屋のドアを開けて椅子に座った。駆け足でケーキを取りに行ったのか、息を切らしていた。「このケーキ、この地方の名物となっているのよ。甘くておいしいわよ」

彼女はそう声を出しながら、大きなケーキをお皿にのせた。夫人は私のカップに紅茶を注いでくれる。それを見ながら、夫人に、

「ありがとうございます、ゴメル夫人」

と言うと、ゲートルトが声を上げた。

「母はもうあなたのお母さんにもなるのだから、ムッターと呼んでもいいのではない。お母さんも、彼のことをヒデジと呼んで」

娘と同様に、顔に化粧をしていない夫人はニッコリした。

夫人と会うのは二回目。どの何者とも知らぬ私の存在を、どのように思っているのだろうか。それも、あと一カ月したら、娘を連れて日本へ行くことになっている。夫に先立たれ、長女も去り、今度は次女との別れとなるのだ。その心境を思うと、複雑な気持ちになった。と、その時、「ボーン、ボン」の音が聞こえた。そのほうに目をやると、古そうな時計がカチカチと時を刻みながら、長い振り子を左右に揺らしていた。ゲートルトが、その時計を見ながら言った。

「あれは、祖父母が使用していたもので、わたしが生まれた黒い森地方で作られたゼンマイ仕掛けの時計よ。一日一、二回は下に付いている重い金具を、上に引き上げないといけないわ。一時間ごとに時刻を告げるわ。とても、正確なのよ」

「そうすると、百年以上も前につくられた時計か」

「ええ、そうよ」

「この居間には昔のものが多くあるね。窓にかかっている色鮮やかなステンドグラスは？」

それを耳にした夫人が話し出した。

「あれはわたしの兄の作で、この地方の多くの教会堂で、兄の作ったステンドグラスを見

ることができませんよ」

「たしか、お父さんもお祖父さんも、牧師だったと聞きましたが」

「ええ、そうでしたね」

夫人は微笑みながら肯き、壁にかかっている写真に目を向けた。そこには、両親・兄弟などの写真がかかっていた。その牧師家系の娘が、キリスト教徒でもない私と結婚して日本へ行くことになっている。何か申し訳なさを感じていると、ゲートルトがニッコリしながら、

「日本での暮らしになるのね」

と、声を出した。その彼女に訊いた。

「あの角にタイルで造られた暖炉らしきものがあるが、冬はあれが暖房となるの？」

「ええ、そうよ。あそこに薪を入れて、暖を取るわ。お風呂も薪で焚くのよ」

夫人は私と娘のやり取りを、ニコニコしながら聴いていた。わたしは更にゲートルト訊いた。

「あそこに、ピアノとスピネットが置いてあるけど、誰が弾くの？」

「次兄がピアノを、アンネがスピネットを弾いていたわ」

「音楽好きなきょうだいなのだね」

「ええ、長兄は上手にバイオリンを弾き、わたしは笛を吹くわ。昔は皆で演奏をよくしたわ。そういえば、チェロも家にあるはずよ。ヒデジもチェロを習ったら？ ねえ、お母さん、家にあるチェロをヒデジに渡したらどうかしら？」

「それは、いいわね」

楽器などを持ったことがなかった私だったので、遠慮した。しかし、ゲートルトが強く勧めたこともあって、「それでは習ってみようか」と応えた。そのチェロが私たちの日本での生活に大きな助けとなるとは、この時は知る余地もなかった。

翌日、朝食を済ませてから、ゲートルトに連れられて街を歩くことになった。

家の裏門を出ると、目の前に、歴史を感じさせる石の門が威風堂々と立っているのが見えた。彼女がその門について説明した。

「あれは、一六〇六年に造られたテュービンゲン城の石門よ。私の家の裏はお城なのよ」

そう言っ、彼女は歩きはじめた。その門を潜り、石畳の坂道をゆっくりと上ると、展望のよい高台に出た。前景には旧市街が一面に広がり、遠方には濃い緑でおおわれた低い山々が、緩やかな曲線でつながっているのが望める。それを眺めていると、彼女が話した。

「この地方一帯は、大昔海底だったのよ」

私たちはテュービンゲン城内をしばらくのんびりと歩き廻ってから、先ほど潜った城門を出た。しばらく下っていくと、ある家柱に、一四九一年の文字が刻まれているのを目にする。彼女が話した。

「この曲がりくねった小路に建ち並ぶ家々は、最古のものよ」

さらに薄暗い狭い路地を下ると、急に前面が明るくなり、大きな広場前に出た。

「ここがマルクトよ。月、水、金曜日の午前中だけ、ここで朝市が立つわ。新鮮な果物や野菜が売られ、チーズやハムやパン、それに花も買えるわよ」

そう言いながら、彼女は広場内を歩き出した。店には、あんず・桃・サクランボ・スイカなどの果物が並んでいた。広場の周りは、独特の木組みの五、六階建ての大きな家ば

りである。そのうちでも、ひと際目立つ建物が噴水の前に建っていたので、訊いた。

「あの建物は？」

「あれは、十五世紀に建てられた市庁舎よ。広場を囲んでいる建物は、どれも五百年前に造られたものばかりよ。テュービンゲンは戦災に遭っていないので、当時のままの姿で残っているのよ」

「ここに立っていると、別世界にいるような気になるね。中世にいるような錯覚に陥るよ。あの建物などを維持するのは、大変だろうな」

「そうよ。どの家々の外壁も、約三十年に一度の割で塗り替えられるわ。それにかかる費用は二百万円ぐらいかしら。それに母とわたしが住んでいる家の屋根瓦も、五十年に一度は取り替えられるわ。建物を所有している人たちは、大変なことだわ」

「通りの美観がよいのも、そのような並々ならぬ努力がなされているからだろうな」

「そうね」

そう言うってから、彼女がある店を指差した。

「ほら、あそこではお魚も買えるのよ。あなたはお魚が好きだと言っていたから、今日のお昼はマスよ。母が買いに行くわ」

「誰が料理するの？」

「わたしがするわ」

「それはたのしみだ」

私たちは活気に満ちた広場をゆっくりと横切った。と、美しい音色が聞こえてきた。二人の学生らしき人が気持ち良さそうにバイオリンを弾いている音色だった。ゲートルトは立ち止まり、彼らの前に置いてあった帽子にコインを入れた。この一帯は歩行者天国なので、ゆっくりと歩いていられる。

そのバイオリンの音色を耳にしながら、中世に建てられた家々を縫うようにして石畳の道を進んだ。

しばらくすると、右側に天に向かって聳え立っている塔が見えた。

「大きな教会だなあ。日曜日は、ここで礼拝がまもられているのか」

「ええ、そうよ。わたしも母もこの教会の会員よ。街一番の大きなプロテスタント教会で、千二百名は座れるかしら。いつもの礼拝だと二百名ぐらいが出席しているわ。ほら、あそこあの高い塔にも立つことができるのよ。あそこからの眺めがいいわ。街全体が見渡せて……」
彼女は、そこから眺めた景色の模様を語った。そのあと、教会前広場の筋向かいにある本屋を指差した。

「あそこで、ヘルマン・ヘッセは書籍商の見習いとして四年間働き、詩人としての礎を築いていたのよ。ほら、教会正面前のあの白い建物は、昔は出版社だったのよ。ゲーテもあそこを訪れたことがあったのよ」

「ヘッセもゲーテも学生のころ、何冊か読んだことがあるよ。とくに、ヘッセには魅せられたね」

「そうなの」

私たちは再び歩き出した。

「テュービンゲンは大学の街なこともあって、名の知れた人たちがここで勉強していたわ。人口は約八万人で、学生の数は二万人ぐらいかしら。若い人とお年寄りが共存している街

よ。催し物は頻繁にあるし：」

彼女はこの街を誇っているかのように語った。

教会前広場を通り過ぎて右側に折れると、変化に富んだショーウィンドウが並ぶ下り道になった。少し行くと、イタリアのアイスクリーム店の前に出た。

店頭には、強い日差しを浴びて十名近くの人が並んでいた。その列に私たちも加わった。周りを見回すと、老いも若きもアイスを持って、大きな舌でそれを包むようにして食べている姿ばかりである。

私たちは手にアイスを持ちながら、再び歩き出した。

さらに行くと、長さ百メートル近くはあるだろう橋の上に立った。下に目を落すと、川面に何羽もの鴨と白鳥が遊び、三十センチぐらいの鱒が体をうねらせながら何匹も泳いでいるのが見えた。

彼女が話し出した。

「この川はネッカーと呼ばれ、ハイデルベルグまで流れ、大河ラインに注いでいるのよ。ここからの眺め、いいでしょ。旅行者がよく写真を撮るところよ。『テュービンゲンの顔』とも言われているわ」

確かに美景だ。緩やかな流れに沿って建ち並ぶ、色とりどりの歴史を感じる大きな家々を眺め続けた。

「あそこに、細長い小舟が一本の竿で操られているね」

「あれは、この学生たちが主に乗っている舟よ。ほら、向こうの小さな塔の近くから乗り入れするのよ。あの塔にヘルダーリンが精神錯乱して三十六年間も住んでいたのよ」

「あの詩人のヘルダーリンが、あそこに」

再び歩き出すと、橋の中央に中洲に通じる階段があった。そこへ降りると、大きなプラタナスが百本近く整然と並んでいるのを目にする。

その並木道の下をゆっくりと二百メートル進んで行くと、一つの銅像が目に入った。

「あれはローレライの歌を作曲したジルヒャーの銅像よ」

彼女はそう言い、ローレライのメロディーを口ずさんだ。ちようどその時、一匹の小さなリスがすばしっこい速さで樹によじ登っていくのが見えた。川面に視線を向けると、色とりどりに並ぶ古風な家並みが水面に揺れているのである。まるで絵本に出てくるような光景に、うっとり眺め続けた。

テュービンゲンに来てから二週間が過ぎて、私たちの結婚式となった。

キリスト教徒でもない私だったので教会堂では式を挙げずに、またホテルやホールなどで披露宴をする経済的余裕もなかったため、それもしないことにした。さいわい、ドイツでは戸籍係員の前で結婚式も挙げられるので、私とゲートルト、それに友人二人の計四名でテュービンゲン市庁舎の戸籍室へ行き、そこでの式となった。

結婚指輪は、ドイツに住んでいる私の知り合いの日本人が銀のスプーンを溶かして作ったもの。式はわずか二十分ほどで終わった。背広を持っていなかった私だったので普段着のまま、彼女は真っ白いブラウスに黒いスカート。結婚式とは、とても思えない二人の姿だった。

家に戻り、義母と義兄家族、それにテュービンゲン大学で哲学を学んでいる人を加えて

の祝会となった。義兄たちは自分たちの家で作ったサラダなどを持ってきて、子供たち五名も含めての賑やかな一タとなった。このような結婚式もあっていいのではないかと思いつながら、皆から祝いの言葉をもらい続けた。

「おめでとう、ヒデジ」

義母が私の目を見ながらそう言った時、ゲートルートがすっかりと日本で暮らしているようにしなければならぬと、自分に強く言い聞かせた。

その賑やかでたのしい祝会も終わり、義兄家族たちは家に帰った。急に静かになった部屋で、一通の手紙を書くことをはじめた。

宛て先は、日本のキリスト教組織で運営されている知的障害児施設だった。日本に戻ったら、すぐに働く施設を見つけねばならない。職を求めての手紙だった。この夏の時期にすぐに見つかるかどうか確かではなかったが、希望を持ってペンを走らせた。ゲートルートが日本に来て、キリスト教関係の施設なら、周りの雰囲気は溶け込むことができるだろうと思ったからだ。

結婚式の夜に、このような手紙を書こうとは思ってもしなかった。まして明日から五日間、オーストリアのチロルの山へ新婚旅行に行くというのに。

ゲートルートが手紙を書いている私に言った。

「結婚式の夜に、求職の手紙を書かなくてもいいのでは」

「日本に帰ってから探そうとしたが、このようなことは早い方がよいと思って」

「よい返事をもらえるといいわね」

「時期的に難しいかも知れない。でも、可能性はあると思う」

祈るような心境で書き続けた。彼女は、私のうしろに回って肩をもんだ。

チロルでの新婚旅行から家に戻ると、夜の八時が回っていた。義母は日焼けした私たちの顔を見て、特に、色白の娘の額と鼻が赤く焼けたようになってるのを目にして、少し驚いた表情を浮かべた。

ゲートルートがクリームを顔や首に塗りはじめると、私の腹部が鳴り出した。

「お腹が空いているのではないですか」

義母が訊いた。

「はい、いくらか」

「地下室に、わたしが作った砂糖づけのサクランボがあるので食べますか。今、取って来ますよ」

そう言いながら彼女が椅子から腰を上げ、地下室へ行こうとした。と、ゲートルートが声を上げた。

「わたしが行くわ。ほてっている顔には、あのヒンヤリした地下室がいいわ」

義母と私との二人だけとなった。彼女が話しかけてくる。

「どうでしたか。娘は本格的な山登りはしたことがなかったので、大変だったのではないですか」

「チロルのエッツ谷のヴェント村に着いた翌日から、歩きはじめました。そこは、学生時代に行ったことがあります」

その山岳地帯が初めてでないことを伝えてから、さらに続けた。

「天気は良く、雲一つない青空の下での山歩きとなりました。出発して二、三時間は、彼女は歌を唄い、草原に咲いている野の花や高山植物を見ては、よろこんでいました。しかし、山道が険しくなってくると、苦しそうな表情を浮かべてきました。そこで、しばしば休みを取りながら登り続け、歩き出して七時間で、目的の三〇一九mのシユムラン小屋に到着しました。彼女には相当きつかったようで、やっと辿り着いたと言ったほうがよいかもしれません。何しろ、千メートルの高度差を登ったことになるのですから」

義母は机の上に両手を組んで、耳を傾けていた。

「初めての山行にしては、彼女はよく歩きました。最後の登りはハアハアと息を切らして、『もう山登りはしないわ』と言ったのですが、登り切ると、晴れ晴れとした顔となって、お互い握手を交わしたのです」

「そうだったのですか」

義母は微笑みながら言った。その彼女に、言うわけでもなく呟いた。

「ゲートルト、遅いですね。下で何をしているのだろうか？」

「熱くなった身体には、地下室がいいでしょう。そのうち戻ってくるでしょうから」

義母は、さらに話を聴きたい様子だった。

「私たちが山小屋に着いたのは、夕方近くでした。そこは、オーストリアとイタリアの国境線上で、空腹だったので、すぐにスパゲッティを食べたのです」

その時の美味しい味を想い出しながら語っていると、ゲートルトが地下室から戻ってきて、お皿にコンポートをのせながら話し出した。

「三〇〇〇mの高さの山に登ったのは初めてよ。素晴らしい眺めだったわ。真夏なのに、周囲の高い峰々は雪を被っていて、それは素晴らしいわ。もちろん、疲れたうえに顔がひりひりして痛かったけれども」

真っ赤になった顔を母に向けながら、さらに続けた。

「私たちが泊まった山小屋から、雪が積もっている三六〇六mのシユムランの山頂が望めたわ。次の日、その山へ二人で登る予定だったのだけれど、雪も積もっていたし、わたしは疲れも出ていたので、ヒデジ一人で行くことになったわ」

そう言うってから、彼女は、

「でも、出発してから、彼は二十分で戻ってきたわ」

と言い、私を見た。わたしは義母に説明した。

「新婚旅行だし、二人で歩いてこそ意味があると思う、出発して彼女のもとにすぐに引き返したのです」

更に続けた。

「とにかくその日は、頂上には行かず、疲れが出ていた彼女と、山小屋付近の平坦な道をゆっくりと歩いていました」

「それは、素晴らしい山のパノラマだったわ。感動したわ」

義母はにこやかな顔で、お皿に盛ったサクランボをスプーンで拾いながら私たちの会話に耳を傾けていた。

コンポートも食べ終わり、皆でゲームをすることになった。義母の好きなダイヤモンドゲームだった。結果は、彼女が一番となった。ゲートルトが悔しそうな声で、

「もう一回しましょうよ」

と声を出すと、

「わたしは、もう部屋へ戻りますよ」

と義母は娘に言い、椅子から立ち上り、私に優しい笑顔を浮かべながら、

「おやすみ、ヒデジ」

と言って、部屋のドアへ向った。

その彼女のうしろ姿を見て、あと五日したら、娘を連れて日本へ行くことになっていたの、申し訳ない気持ちになった。と、その時、壁にかかっていた黒い森のゼンマイ時計が、「ボン、ボン」と十一時を打ち出した。

四章 ドイツの粉ミルク

日本に着いて一週間後、妻が身ごもったことを知った。と同時に、チュービンゲンから職を求めて書き送った手紙の返事を受け取った。そこには、知的障がいのある子供の施設で指導員として、すぐに採用してもよいと記されてあった。うれしいことが一つ重なった。気候の温暖な浜松の三方原で、私たちの生活がはじまった。住居はプレハブ造りの六畳と四畳半、それに小さなキッチンがついた二軒隣の平屋建ての施設職員寮だった。

妻が最初に困ったことは、トイレだった。座って用を足す洋式ではなく、汲み取りだったからである。早速、私の初任給で洋式の簡易便器を購入した。彼女はことのほかよるこんだ。

妻にとつては異国の地、それも初めてのお産を控えていた。周りには外国人は住んでなく、日本語をまったく話せなかった彼女だった。近くにキリスト教会があったので、そこによく通うようになった。その教会員の中には英語を話す人が二、三人いたので、その人を家に招いたり、また招かれたりもしていた。

社会性を重んじている彼女だったので、買物などで一人出かけたりすると、行き来する人と笑顔で必ず「こんにちワ」と声を交わし、周りの人たちと溶け込もうと心がけていた。

私に時間があると、彼女に日本語を教えていたが、日常会話はドイツ語だったので、上達はしていかなかった。それと、私の勤務は当直もあり、また早番・遅番などもあったりしての一定した時間でなかったの、妻は戸惑ったりもしていた。

そのような妻だったが、彼女をすごいと思ったことがあった。それは、日本の民謡・童謡を二、三回聞くと、笛でその曲を奏でることができたからだ。生まれてくる子と、その時点でもうコミュニケーションをとっているようにも私には映った。

義母からは週に一回ほど、手紙または電話の連絡があった。また、出産予定日の三カ月前には、彼女が縫った小さな靴下や服などが届くようになった。それを目にした時、私と妻はこれから生まれてくる子のことを思い、胸が大きく膨らんでくるのだった。

そのような私たちの新婚生活が続き、出産予定日の二週間前だった。いつものように職場で働いていると、一人の事務職員が、「電話ですよ」と伝えにきた。

誰かと思いつながら電話が置いてあるところに行き、受話器を取った。

「奥さんが、トイレのなかで叫んでいますよ」

同じ寮に住む、隣人の甲高い声である。愕き、直ぐに家へ走った。

「どうした！」

畳の上で横になっている妻に駆け寄ると、彼女が苦しそうな表情を浮かべてお腹をさすっていた。これはいけないと思い、隣の人の車に妻を乗せ、病院へ向った。

一分もしないで病院に着くと、彼女は即分娩室に運ばれた。その室の前で待つことになった。

二時間が過ぎたが、何の連絡もない。不安な気持ちだが、むくむくと頭をもたげてくるのだった。三時間半が過ぎた。思い切つて分娩室の戸を叩こうとした時だった。戸の内側から産声が聞こえた。生まれたのだと思つた。

一人の看護師がドアを開けて出てきた。

「男の子です。母子共に無事です」

それを聴き、すぐに妻と息子に会おうとしたが、看護師に、

「明日、会つてはどうですか」

と勧められたので、それに従つた。壁にかかっている時計を見ると、三月十九日二十三日四十五分を指していた。

寮までの帰り道、歓喜のあまり、叫びたい衝動に駆られた。それを抑えるのに困つた。翌日、朝食も摂らずに病院へ行つた。我が子と初めての対面である。

息子は母親に抱かれて眠っていた。色が白く、ぼつちりとした二重瞼、生まれた直後にしては、あまりに整つた顔立ちをしていたので、ハーフだからかと一瞬、思つた。

息子の柔らかくてこわれそうな体をしばらく抱きながら、

「ご苦労さん。お母さんには、電話で連絡しておくから」

と妻に言うと、彼女は微笑みながら、私と一緒にわが子を見つめ続けた。こんな歓びがあるのだろうかと思つた。

それから五日後、二人が病院から帰宅した。息子の名前は、妻の希望でミヒヤエル、日本名では私の希望で遊（あそぶ）と名付けた。

そのあそぶは、母乳をなかなか飲もうとしなかつた。

「お乳を吸ってくれないの。一日にどれだけ飲んだかわからないわ。こうやって哺乳ビンに入れて飲ませると、いくらか飲むのだけれども、ほら、このノートを見て。毎日ミヒヤエルが飲んだ量が記されてあるでしょ」

妻はそう言つて、私にそのノートを手渡した。

「昨日の朝六時は六十cc、お昼は五十cc、夕方六時は五十cc、二四時は六十cc、合計すると一日に二百二十ccか。産まれたときが未熟児すれすれの二五五〇グラムだったな。それから二週間経つても体重が二六四〇グラムか」

わたしはそう声を出しながら、彼女が書いた数字を見入つた。

しばらくして言つた。

「これから毎日すこしずつ飲むよ。そのうち、吸いつくように飲むさ」

「そうよね。こうやって乳を搾り出す必要もなくなるでしょうね」

妻は哺乳ビンの母乳を息子に飲ませようとするのだが、息子は依然としてあまり飲もうとはしなかつた。その様子を目にしてしていると、私も心配になつた。もしかしたら、彼女も私

と同じようなことを考えているのかもしれないと思った。

「彼が、なぜミルクをあまり飲まないのかを、あの看護師さんに、家に来てもらって訊いてみようか」

「ええ、それはいいわね。あの看護師さん、とても優しくかったわ。ミルクを飲ませる工夫が、何かあるかもしれないわね」

二日後、病院での仕事を終えた看護師が来宅した。息子があまり乳を飲まず、体重も増えないことを話すと、彼女は何事もないかのように、

「そう心配することはありませんよ」

と言って、妻にミルクの飲ませ方などの指導をしてくれた。看護師は一時間ほどいてから、帰ることになった。

彼女をバス停まで送って行く途中、思っていることを話した。

「知的障がいのある子供が住む施設で働いているので、察したりするのですが、もしかしたら、息子はダウン症ではないでしょうか」

「いや、そんなことはありませんよ」

看護師は、先ほどと同じような穏やかな声で答えるだけだった。暗い夜道なので、彼女の表情を読み取ることはできなかった。

「仕事柄、彼らのことはわかっていますので、本当のことを言ってください」

「いえ、そんなことはありませんよ」

同じ返答を繰り返すだけだった。もうこれ以上訊くことはできないと思い、家まで来てくれたことにお礼をのべてから、妻と息子のところに戻った。でも、まだ看護師が言ったことを、鵜呑みにはしていなかった。

妻は電話で母と話をするのをとてもたのしみにしていた。生活するだけで精一杯の私の給料だったので、こちらから電話をすることができなかった。いつも義母からかかってきた。見知らぬ地に住む妻にとって、母だけが、私を除いて言葉のハンディーもなく、心を通わすことができる人だった。

息子があまりミルクを飲まないことを妻が話したためか、ドイツから粉ミルクなどが届くようになった。

彼の体重は少しずつ増えてはいたが、他の子と較べると極端に少なく、首が四ヶ月過ぎても座らなかつた。そこで、彼が生まれた病院ではなくて、他のクリニックで、血液を調べてもらおうとした。二週間以内に、その結果を知らせてくれることになった。

職場で働いていると、事務職員が、

「横井さん、電話ですよ」

と、伝えにきた。早速、電話機が置いてあるところに行つて受話器を取った。

「あそぶ君の血液の結果が出ました」

ハッと、いくらか恐さを覚えながらその声に耳を傾けた。

「検査の結果、二十一トリソミーのダウン症と判明しました」

それを聴くや、そのようなことだろうと想像していたにもかかわらず、私の心は動転して、何かを言おうとしたのだが、声が出なかつた。受話器の向こうで何かをしゃべっているのだが、それが耳に入つてこないのである。

しばらくしてから、「そうでしたか。ありがとうございます」と言っ
て、受話器を置いた。その時、「ありがとうございます」と反射的に自分の口から出た言葉が、妙に耳に残った。と同時に、彼が生まれた病院では、なぜ教えてくれなかったのだと思っ
た。

外国人の妻だったからなのか。でも、そうならいずれわかるのに。あとで言おうとしたのだろうか。いや、違っ
たろう。出産したあとに、すぐに我が子を見ることができず、また極端に乳を吸う力のなかった子だったので、担当の医師はこの子の生命力はないと思っ
たのではないか。だから言わなかったの
だろう。そうとしか考えられない。

受話器をじっと見つめてから、仕事場に戻った。体から力が抜けたようになって、やはりそうだったのかと何度も心の中で呟いた。家に帰ってから、彼女にどのように伝えたらよいの
だろうかと考え続けた。

勤務時間が終わり、帰宅して玄関で靴を脱いでいると、いつものように妻の「おかえりなさい」の明るい声が聞こえた。それを耳にしてから六畳の居間に入ると、彼女が話し出した。

「今日、母から小包が届いたわ。あなたが戻ってから、紐をほどこうとしたのだけれども、待ちきれなくて開けてしまったわ。ほら、母が送ってくれた木のおもちゃがあるでしょ。ミヒヤエルは、まだあのようなおもちゃで遊ばないのに。でも、そのうちに関心を示すでしょうね」

彼女はおもちゃを手にとって、私に見せた。話さなければならぬと思ひ、妻を畳の上に座らせた。

「君に伝えなければならぬことがある。今日、クリニックから電話があつて」

「そこまで言うと、前に座っておもちゃを動かしていた彼女の手が、ぴたっと止まった。

「検査の結果、彼は」

次という言葉が重たくて、なかなか口から出てこないのである。

やっと声を絞った。

「ダウン症だとわかつた」

妻は一瞬、体をギクツと震わせて視線を下に落とした。そこには、ドイツから届いたおもちゃなどが包まれた包装紙がきちんとたたまれてあつた。何と
いうことを言ってしまったの
だろう。彼女を正視しなければならぬのに、自分もその包装紙に目を落とし続けた。私たちの間に沈黙が流れ続けた。

しばらくすると、妻が立ち上がり、隣の三畳の寝室で寝ている息子のところに行き、ぐっすり眠っている彼の寝顔に自分の顔を重ねた。私たちはしばらく息子を見つめ続けた。そのあと、居間に戻った。

妻がローソクを灯しながら言った。

「ミヒヤエルがわたしを母として、そしてあなたを父として選んだのだわ。それを心に留めながら、暮らしていきましょ
う」

わたしは肯いた。ローソクの明りは、灯り続けていた。

翌日、妻は電話で母と長々と話を続けていた。

浜松の冬は明るく、セーターが要らないほどである。妻は、聖隷事業団を創立した人の奥さんから借りた竹作りの乳母車に息子を乗せ、毎日のように外に出ていた。休日になる

と、私もその乳母車を押し一緒に散歩するようになった。彼女は道行く人と出会うと、親しそうに挨拶を交わし、息子をいつも笑顔で見せ、それも誇らしそうに。それが、私はとてもうれしかった。

日本語を話せず、親戚や友人もいず、障がいのある子を持ち、今後どのように育てていいのかとの見通しも立てることができない妻だったが、明るい性格の彼女は、少しずつ体重が増えてきた息子の成長を私と共に喜ぶながら、温暖な浜松の地で暮らしていた。クリスマスが近づいた。妻は近くの林から高さ一メートルほどの木を採ってきて、居間にそれを置き、彼女が麦わらで作った星や月などを枝に吊るしはじめた、そして、十二月二十四日を待ち望んでいた。

義母からは、ドイツ製の木のおもちゃが多く入っている小包がよく届くようになった。特に、彼は音のする木のおもちゃが気に入り、それを手に持って一人で遊ぶようになった。それを目にしていた私だったので、彼がよるこんで遊ぶような音のする木製のおもちゃを作りはじめた。作っては、彼に与えていた。

そのようなある日、しばしば足を運んでいた街の図書館で、一冊の本が目にとまった。それを借りて読むと、学生時代から追求していた内容の本だった。妻は毎晩、寝る前には聖書を必ず読んでいたが、私もその本と出合ってから、毎晩のように、それを枕元において目を通してから寝るようになった。

その本というのは、宗教哲学に関するものだった。学生時代から、鶴見の総持寺に座禅を組に行き、そこで寝泊りもしていたこともあってか、その本の内容が自分の体に入ってくるように感じられ、その著者の教えている大学へ、職場の休日を利用して行くようになった。

それから数カ月後、考え抜いた末、妻に言った。

「浜松から茨城県の土浦に引っ越そうと考えているのだけど、どうだろうか？ 木のおもちゃ作り、それも障がいのある幼児のためのおもちゃ作りをしたいのだ。それに、時間が許せば、再び大学で勉強したいのだが。土浦は大学を卒業したあと、すぐに働き出した地でもあるし、友人もいる。また近くに筑波大学があって、そこで池田先生という人がダウン症のセラピー教室を開いているので、そこにミヒヤエルを通わせたいのだが」

彼女は私の目を見続けたあと、

「あなたがそうしたいのなら、いいのではない。応援するわ」

と、賛同してくれた。この地にくらか慣れてきた中で、私の願いを素直に受け入れるのは、そう容易ではなかっただろう。深く感謝した。

数カ月したら、土浦に引っ越すことになった。

五章 おもちゃライブラリーと九さん

土浦に引っ越したのは、あそぶがちょうど一歳になった時だった。

今度の住いもブリキ屋根の簡易な平屋の借家、街外れに建っていた。ここでも汲み取り

式のトイレだったので、直ぐにプラスチックの簡単な洋式便器を買い、それを取りつけた。もちろん、妻はよろこんだ。

その家から、あそぶは筑波大学で開かれていたダウン症のための療育教室に通うことになり、体の動作訓練などを受けるようになった。妻は療育室の先生たちと英語で話をし、また大学付近にドイツ人女性が二人住んでいたもので、その二人の家に、息子を背中におんぶして時々訪れたりしていた。

わたしは障がいのある幼児が遊ぶような木のおもちゃを、友人の父が運営している土浦市内の障害児施設内で作るようになり、それらを市内のデパートや地域の子供祭りなどで販売することをはじめた。でも、それだけでは生活費が足りなかったので、作ったおもちゃをダンボール箱に詰めては、近くの幼稚園や保育園に行って売り込むようになった。最初の頃、園の門をなかなか潜れなかったが、生活費を稼ぐにはこれしかないと思い、売り廻っていた。二つ、三つ買ってくれれば、うれしかった。

おもちゃを作る傍ら、火曜日の午前中の二時間だけ、筑波大学に行つて、宗教哲学の三枝先生のゼミに聴講するようにもなった。大学院でのこの授業は、とても学ぶものが多く、それを許してくれた妻に感謝しつつ、机に向かっていた。

妻は生活がいくらか厳しくなっても、何一つ辛いとは口に出さないうで、いつも明るく振舞っていた。それだけでなく、彼女は近くにプリマムという会社の社員たちにドイツ語を教え、その授業料を生活費にまわしていた。

そのような日々が続く、あそぶが三歳になった時、私たちの生活に新局面が加わった。わたしがおもちゃ作りの仕事を終え、家の玄関戸を開けると、妻の「おかえりなさい」とのいつもの明るい声を聞こえた。靴を脱いでから台所に行くと、彼女は息子を背負いながら、包丁で人参を切っていた。

「今日二つの電話がかかってきたわ。一つは母からで、もう一つはテレビ局からだわ」「テレビ局？」

「ええ、内容をすこし話してくれたのだけれど、わたしにはよくわからなかったわ。でも、明日の朝、もう一度電話をかけるそうよ」

今度は済まなそうな声になった。

日本語がまだよくわからない彼女は、受話器では相手の姿も見えず、話も聞き取りにくく、電話に出るのが好きでないとよく言っていた。あそぶが生まれてから、障がいのある息子を育てるのに精一杯で、日本語を習う時間は妻にはなかった。それに私たちの会話はドイツ語だったので、日本語は上達していかなかった。それでも、周りの人たちと接するうちに、日常会話はどうかできるようなにはなつてはいたが、十分ではなかった。

翌朝、わたしが作業所へ行こうとすると、家の電話ベルが鳴った。受話器を取ると、NHKのテレビ局からだった。私たち夫婦が開設しているおもちゃライブラリーを取材したいとの申し込みだつた。思いも寄らない話だつたので、「明日、返事をします」と答えてから受話器を置いた。

その晩、あそぶが寝てから妻と話し合った。

「どうしよう、ぼくはマスコミが好きではないのだ。断ろうか」

「でも、あなたが開いているおもちゃライブラリーは、商売でしているわけではないし、障がいのある子供を持つ親たちが、自然と集まって、できたのでしょ。それとあなたがい

つも言っているように、この活動がここだけでなく、至るところにできてくればと願っているでしょ」

「そうだが。しかし、どのように放映されるか」

「では、あなたの希望をそのテレビ局の人に話してみたら？」

「そうだな」

しばらく考えてから、彼女に言った。

「よし、承諾しよう。さらによい活動となるように。しかし、もつと忙しくなるかもしれないぞ」

「わたしで、できることはするわ」

妻は、障がいのある幼児用のおもちゃライブラリー活動に協力的だった。

翌日、NHKから電話がかかってきた。こちらの希望をのべたあと、承諾することになった。おもちゃライブラリーの、ここに至るまでのことが浮かんた。

障がいのある幼児は、市販されている一般の玩具ではなかなか遊ぼうとはしなかった。しかし、音のするおもちゃには関心を示し、遊ぼうとした。あそぶもそうだった。そこで、彼に音のする木のおもちゃを作っては、与えていた。おもちゃで、私の家の三畳間は足の踏むところもないほどとなった。そのことを知った、近所に住む障がいを持つ幼児の親たちが私の家に来るようになり、おもちゃを借りていくようになった。

そのようなことをしているうちに、おもちゃを借りに来る親子が次第に増えて、私の狭い家では十分な対応ができなくなってしまった。そこで、土浦市内の古い木造アパートの一室を借りて、毎週の土・日曜日をおもちゃの貸出日として無料で提供することをはじめたのだった。

自分たちの生活費が足りないのに、アパートの一室の家賃を払い、そのようなことをするのに勇気がいった。が、共通する悩みを持つ親たちと話し合っているうちに、どうしてもおもちゃライブラリーを開こうと決心したのだった。

開設当初は、妻と私とで訪れてくる障がいのある幼児と親に應對していた。そのことが地域の新聞に載り、訪れてくる親子の数が少しずつ増え、私と妻との二人だけでは十分に対応ができなくなってしまった。さいわい、近くの筑波大学で障害教育を専門に学んでいる大学院生数名が、手伝いに来るようになった。

手作りの木のおもちゃを貸し出していたので、数を増やさねばならなかった。これもまたうれしいことに、近くに住む主婦グループの人たちがおもちゃ作りに参加してくれるようになった。学生たちも主婦たちも私たち夫婦も、皆ボランティアだった。私たちはお互いに助け合いながら、おもちゃライブラリーの活動をするようになった。

NHKのテレビでの放映は、約十分間だったが、多くの人が観る朝の時間帯だったこともあってか、大きな反響があった。まして、国際障害者年でもあった。それに、関東地区にはおもちゃライブラリーがほとんどなかったもので、放映後、毎日数十件の問い合わせの電話が入るようになった。それに応じなければならなかった妻は、不自由な日本語、それも電話での対応だったので苦労していた。

土浦おもちゃライブラリーに来る家族は、増え続け、県外からも訪れるようにもなり、またマスコミなどの取材も多くあった。この活動が関東地区、さらには全国にまで広がって、障がいのある幼児をもった家族に温かい場となるようにと願いながら、私たちは活動

を続けていた。

そして、ありがたいことに、安田火災保険会社から援助金として五十万円を頂くことになった。それで市販の木のおもちゃを購入して数を増やしたり、手づくりのおもちゃのカタログを作成したりしていた。

そのような中、坂本九さんが北海道の三十分番組のテレビ取材で、私たちのおもちゃライブラリーに訪れてきたのだった。

真っ白い半袖のシャツと紺のズボンを着た九さんは、私たちが作ったおもちゃ一つひとつを手にとって、感心しながら見ていた。その表情には、あのテレビで観るような優しさがあった。

ライブラリーでの二時間ほどの取材が終わったあと、九さんが私たち夫婦に微笑みながら言った。

「このような活動が広がるといいなあ」

「ええ、おもちゃを媒介にして、親は自分の子供と遊び、会話もできます。またここにあるおもちゃは、子供たちの発達を助長するように作られています。ほとんど手作りのおもちゃです」

さらに説明した。

「障がいを持っている幼児たちは、家からなかなか出られないのです。でも、このようなところで、同じ悩みを持つ親たち同士がお互いに会話をしたりするなかで、励まされたり、不安なども軽減されたりして、親、とくに、お母さんが元気になるのです。連帯意識は自然に生じてきます」

さらに続けた。

「ここに来るには、父親が車で運転して、父親も養育の役割を知っていくのです。障がいのある子供を育てるのは、母親だけでは無理です。母親にもストレスが溜まります。それを和らげるためにも、父親、そして地域の人たちの協力が必要です。このおもちゃライブラリーは、そのようなことを考慮に入れながら活動しているのです」

それを聴いた九さんは、私の目を見ながら言った。
「何か書くものはありますか」

妻が一枚の紙とペンを渡した。と、九さんはその紙に、

どの花にも

草にも

どのおもちゃにも

ひとつのいのち

と、筆を運ばせた。

それを読んだ時、九さんはなんと優しい心を持った人なのだろうと思った。花や草にいのちを見出し、おもちゃにもいのちを見出している九さん。一つのおもちゃは孤立してそこにあるのではなく、そのおもちゃとそれで遊ぶ子供との間に、いのちの繋がりをみてい

る九さん。

澄んだ九さんの瞳を見ながら、「ありがとうございます」と感動した声で言って、九さんの手を握った。と、九さんはしっかりと握り返してくれた。

二時間ほどいてからの別れ際、九さんはニキビの跡が残っている顔で、ニッコリして私と妻に言った。

「わたしの祖母は茨城に住んでいるのですよ。またこのライブラリーに来るよ」

それからというもの、妻は九さんの歌「幸せなら手をたたこう」をしばしば口ずさむようになった。

六章 二人の母

土浦で暮らすようになって二年が過ぎたある日、関東地方に台風が上陸するだろうとのニュースがラジオから流れた。それを台所で料理していた妻に伝えると、彼女は不安そうな顔を浮かべた。

「母があさって日本に来るといのに、飛行機は成田に到着できるのかしら？」

「台風が上陸するまでには、まだ四日もあるし、そう心配することはないよ」

「でも、母が来るときに、台風がくるなんて」

強い台風がもし来たら、今住んでいる家の屋根が吹き飛んでしまうだろうと思った。ブリキ張りの木造建ての簡易な貸家だったので、大型の台風直撃されたら、一溜まりも無いだろう。裏はピーナツ畑。屋根が飛ばされたら、三人をどこへ連れて行こうかと真剣に考え出した。

さいわい、台風は速度を緩め、上陸は五日後との予報を聞き、私たちはホッと胸を撫で下ろした。

二日後、安い値段で購入した車で、つくば学園都市に住むドイツ夫人宅へ向かった。と言うのも、その夫人の母も義母と同じ飛行機に乗って日本へ向ったので、彼女が成田空港へ二人を迎え、連れてきたからだ。私の古い車だと、成田に着くまでの間にエンストする可能性があった。

ドイツ夫人宅での義母との再会である。長い飛行機の旅にしては、彼女の頬には赤みがさして、以前とあまり変わりのないように見えた。

エンジンをかけてから、私たちの住まいへ向った。

「遠いところから、よく訪れてくれました。日本に来るのに、一大決心がいったのではないですか」

「そうね。でも、あなたたちに会いたかったから。それにミヒヤエルの姿も見なかったし、彼は元気なんでしょう？」

「はい、四歳となって、やっとひとり歩きができるようになりました。今は近くのキリスト教系の幼稚園に通っています」

「早く会いたいわ」

そう言いながら、私のほうに顔を向けた。

「ヒデジと会うのは、何年ぶりになるのかしら？」

「五年が過ぎています。お母さんは以前とそう変わりがないように見えますが」

「ええ、大きな病気はしませんでしたよ」

義母はニッコリしてそう応えたあと、初めて見る日本の風景に目を注ぎ出した。

十分足らずで家に着き、玄関前で車を止めると、妻が格子戸をガラガラと開けながら出てきた。母と娘の久しぶりの再会である。娘は背の高い母を抱くようにして、お互いに頬と頬を合わせ、数秒間抱き合ったままでいた。

私たちが六畳の居間に入ると、ミヒヤエルが畳の上で寝転びながら、木のおもちゃを手にして遊んでいた。その彼を抱き上げて、

「おばあさんが来たよ」

と言うと、彼はおばあさんのほうを見た。

義母は孫の小さな手を取った。

「こんにちは、ミヒヤエル」

彼女の横にいた娘が声を出した。

「ここにいる人が、あなたのおばあさんなのよ」

言葉がまだ出てこないでいたあそぶは、「アー、アー」と発しながらおばあさんを見続けた。義母はあそぶの頬に自分の頬を重ね、彼を胸に当てた。

障がいのある長女を育て、今度はダウン症の孫を持ち、義母の胸の内には言えない思いがあるに違いない。ちょうどその時、外のスピーカーから、こんにちはは赤ちゃんのメロディーが流れはじめた。

「あの音は何なの？」

母が娘に訊いた。

「あれは果物や野菜、それに牛乳などを車に積んで売り歩いている人が来たことを知らせるメロディーなのよ。新鮮な食べ物売られ、わたしも時々買ったりしているわ」

日本の生活に慣れてきた娘が、母に説明した。彼女はコートも脱がずに、あそぶを抱きながら、娘の言うことに耳を傾けていた。

しばらくすると、義母が居間にある簡易ソファーに腰かけた。そして、コーヒーを飲みながら、飛行機内で起こったことや二人の息子たち家族のことを語り出した。

元気とは言え、七十四歳である。一時間もすると、欠伸をするようになった。それを見たので、義母に訊いた。

「疲れていませんか」

「ええ、そうですね」

「時差の違いもあるし、すこし休んだほうがいいですよ。お母さんはいつも昼寝を欠かさずにしていましたし、機内ではそれもできなかったでしょうから」

「それでは、そうさせてもらおうかしら」

押し入れから蒲団を取り出して、敷き出した。と、義母が低い声で隣にいた娘に囁いた。

「寝るといっても、この部屋で横になるの？」

「ええ、そうよ。そこに四枚の襖があるでしょ。それで仕切るから、向こうが寝室となつて、こちらが居間になるのよ」

娘はさらに続けた。

「食事のときは、この居間がこんどはダイニングルームにもなるのよ。そればかりではなく、ここが教室にもなるのよ。今、近くのプリマムハム会社の社員に、ドイツ語を週に一回教えているわ。社員六名がここに来て、ドイツ語会話の時間となるわ」

母は娘の話を肯きながら聴いていた。ドイツの暮らしとはまったくかけ離れた生活に、驚いたに違いない。でも、彼女はそのような表情を少しも見せずにいた。

義母は、一日目と二日目は娘と絶えず話をしていた。三日目の夕方から、土浦が台風の暴風雨圏内に入った。大型の台風だったが、日本に近づくにつれて小型となった。が、それでも強い風と雨である。木枠で作られた窓がガタガタと音を立てて揺れ出し、横なぐりの雨が窓を沫くようになった。

台風がさらに接近してくると、窓の隙間から水と風が部屋に漏れ出してきた。急いでトタン製の雨戸を閉めたのだが、それでもどこからか水と風が侵入してくるのだった。しかし、義母は心配そうな表情を少しも見せずに、娘と夜が更けるまで話し続けていた。さいわい、屋根は吹き飛ばされずに済んだ。

台風一過の翌日は、澄んだ青空になった。秋晴れの下、娘と母はミヒヤエルをベビーカーに乗せて、彼が数カ月前から通い出した地域の幼稚園へ向かった。その幼稚園は、イギリスの牧師が運営していて、妻はその人と英語で話しをしていた。

あそぶはひとり立ちができてはいたが、排便はまだ一人ではできず、保育士たちを何かと悩ませていた。家の中ではドイツ語、外では日本語に日々だったので、彼の頭の中は混乱していただろう。まして、筑波大学の先生が私たちに、

「ダウン症のなかでも重たいほうで、動きが多いですね」と、話したのだった。

あそぶは無断で幼稚園の門から出たことが何度もあった。そのような息子を、妻は自転車の前座席に乗せて、幼稚園へ行き、他の子どもたちと一緒にいるのを目を細めて見ていた。それに、他のお母さん方とよく話をして、たのしそうだった。また、あそぶの誕生日には、お母さんたちと子供たちを家に呼んだりもしていた。

その幼稚園へ、おばあさんが滞在中、妻は母と送り迎えをしていた。わたしが義母に、

「どこかへ行きましょうか」と訊くと、

「娘と孫と家にいるのが一番よいから」と、静かに答える義母だった。

その義母は、私たちの貧困な生活を見てとつただろう。彼女からもらったチェロも生活費に困って、先のドイツ夫人に二十万円で売ってしまったことも知っているに違いない。それで遠慮しているのだろうと思った。ミヒヤエルを含めての四人で、京都に連れて行きたかったが、それができず、私の母が住んでいる東京に一度、それに筑波山に行っただけに終わった。

日本を発つ前日、これから寒くなるからと言って、母は娘に自分の二枚のセーターを手渡し、ミヒヤエルには、ここ一カ月の滞在中に編んだ毛糸の靴下をテューブルの上に置いた。それを目にして、義母を遠くに案内できずにいた自分の不甲斐なさを思い、生活を安定さ

せていかねばと意を強くした。

それから半年が過ぎた頃だった。リュウマチとパーキンソン病に患って、自分一人では歩けない状態だった、わたしの母が土浦に四週間の予定で遊びに来ることになった。私たち家族はよろこんで母を迎え、たのしい時を持った。その母が東京の家に戻る一週間前、私に言った。

「よかつたら、あなたたちと一緒に暮らしたいのだけれど」

それを聴き、次男のわたしは直ぐに返事をする事ができなかった。と言うのも、障がいを持つ息子がいるからで、さらに妻に負担がかかると案じたからだだった。その夜、妻に母の願いを伝えると、彼女は躊躇もなく、「いいわよ」と応えた。そこで、母と一緒に暮らすことになった。父は二年前にすでに亡くなっていた。

私たちの狭い家から、母のベッドが置けるようなやや広い住宅に住むことになった。

その母を車椅子に乗せて、妻はミヒヤエルが家にいない午前中は毎日外に散歩に出かけるようにもなった。近くに住む主婦たちが、

「お宅の奥さんえらいですね。感心するわ」

と言ったのを、何度も耳にした。また、母を連れて週に一回ほど通う国立霞ヶ浦病院の婦長さんも、

「親孝行のお嫁さんね」

と、褒めた。それを聴くたびに、妻に感謝した。

多くを語らない母は、大変苦労した人だった。私の少年時代は父が不在だったので、母は私たち子供四人を育てるために、朝から夜遅くまで着物の仕立てをしていた。学校から戻ると、母はいつも四畳半の居間兼仕事場で、長い裁縫台を前に座っていた。私の「ただいま」の声を聞くと、母はすこし顔を上げて、「おかえり」と優しい声で返事をし、手を休めずに着物を縫い続けていた。私たち子供たちが布団に入ってから、隣の四畳半部屋にはずつと明かりが灯っていた。

私たちが起きる頃は、隣で寝ていた母の姿はなかった。台所のトントンという音でいつも目が覚めた。子供を育てるのが私の生き甲斐とも語った母だった。

高校受験を前にしたことだった。勉強が好きでなかったわたしは、学校はどこでもよいと思いい、受験する高校への願書も出さずにいた。それを知った母が、

「なぜ、願書を出さないの」

と、四畳半の居間で一緒に炬燵に入っていた私に、いつになく真剣な顔で言った。しばらく黙っていると、私を凝視していた母が、急に炬燵から出て、

「バカ、バカ、バカ」

と声を荒げて、私の頭を何度もたたいた。隣にいた妹が、「お母さん、お母さん」と声を出して止めに入った。

母にたたかれたのは、初めてだった。いつも私たち子供の言うことに、耳を傾け、怒ったことのない母だった。驚きのあまり、何もできずに打たれるままでいるしかなかった。

その母は、兄の友人である慶応大学の学生に頼んで、私の成績がなんとか向上するようにと、中学三年から週に一回の割りで家庭教師をつけてくれた。それによって、私の並だった数学と英語の成績はたしかに向上した。家庭教師代を出せない家計の中で、それをしてくれたのだった。

母にたたかれたことは、それ以後、ずっと忘れたことはなかった。今も骨身にこたえている。

裁縫を毎日していたせいか、指が変形してリュウマチに悩まされてしまった母。その母から、妻は赤飯の作り方や魚の焼き方を、「おかあさん、おかあさん」と言いながら教わるようにもなり、体重三十六キロになってしまった寝たきりの母を抱えながら、三日に一度はお風呂と一緒に入っていた。

仕事から戻ると、わたしは先ずベッドで横になっている母の部屋に行った。

しばらくすると、妻とミヒヤエルが部屋に入ってきて、家族四人で今日何が起こったかを話をしたり、テレビを観たりしての日々が続いた。妻がいつもニコニコしながら母と接しているのを見るにつけ、深く感謝をした。

その母は、身体が日ごとに衰えてしまった。

あそぶが七歳になったある日、夕食を終え、ミヒヤエルを寝かせたあと、居間でお茶を飲みながら新聞を読んでいると、妻がドイツの母からの手紙を私に見せた。

そこには、義母の住んでいる五階建ての家の三階が数カ月したら空くと書かれてあった。遠回しに私たちが、そこに住んではどうかと記されてもいた。それを読み終えてから、妻に言った。

「お母さんは、体が弱ってきたのだろうか」

「そんなことないと思うわ。ただ、その手紙に書いてある通り、三階に住んでいる家族が引越しをするそうなの」

いつもとは違う、彼女の低い声である。

「この手紙を一週間前に受け取ってから、ミヒヤエルのことを考え続けたわ。このままここで教育を受けさせてよいのかと。そうすると、肯定的な答えがわたしのなかで見つからないの」

彼女はゆっくりと自分にも言い聞かせるように言った。それを聴いて、驚いた。今、やっとこの土浦の地で生活ができるようになって、これから本格的におもちゃの製作活動に取りかかり、障がいのある人たちと一緒に活動し、ミヒヤエルが養護学校を卒業するまでには、それなりの作業所を開こうと思っていたからだだった。

妻の顔をしばらく見つめてから、言った。

「このことはよく考えてから、お互いよく話し合ってから決めよう」

それから数日間、考え続けた。よくよく考えた末に言い出したことだろう。今までグチや不満を何一つ口に出さず、怒った顔を見せたことのない妻だ。よくやってきた彼女だ。もう限界なのかも知れない。ダウン症候群の中でも障がいの重いほうに入るミヒヤエルを異国の地で七年間育て、私の母を二年間介護し、経済的困窮をしいたげた自分に、原因があるのだろうか。

義母の住んでいる家の三階が空くということは、何かの縁があつてのことかもしれない。ミヒヤエルを中心にして動いている私たち家族だ。彼が活動し易いようにしなければならぬ。ここ土浦での本格的な作業所づくりはできなくなるが、ドイツにいても何か福祉的な活動はできるだろう。おもちゃライブラリーも軌道に乗りつつある。自分がいなくても大丈夫だろう。また浜松で、私の願いに何ひとつ反対もしないで受け入れてくれた彼女だ。

それに、私と知り合ってまもなく日本行きを躊躇なく受け入れてくれた妻。未知の国に住む覚悟で来たのだ。今、自分がここで尻込みしたらいけないと思った。

それから彼女としばしば語り合い、テュービンゲンに移り住むことに決めた。そう決心してから出発までの半年間、ドイツでの生活がどのようになっていくかの不安はなかった。寧ろ、新しい地での挑戦だと思おうようになっていた。ただ、まだよく知らなかった義母と一緒の暮らしが、どのようになるかと少し気にはなっていたが、不安を抱くほどではなかった。

七章 ハウスマンとして

日本からドイツのテュービンゲンに移り住むようになった私たち。今度の家は、今までと違う石造りの建物だった。二階には七十六歳の義母が、三階には私たち三人が暮らすようになった。

「ドイツではわたしが仕事をするわ」

妻がそう主張したので、それを受け入れ、わたしが家事と子供の世話をする主夫（ハウスマン）となった。

主夫をしながら、時間があると、福祉に関するミニ情報誌を日本の知友たちに、定期的に送る活動をするようになった。また、日本から福祉関係の人たちが来ると、こちらの高齢者ホームや障害者施設を案内することもはじめた。

二年が過ぎたある日の午後のことだった。ミヒヤエルが一人で家から百五十メートル離れたパン屋に、夕食のパンを買いに出かけた。いつもは十分で帰ってくるのに、二十分が過ぎても戻ってこなかった。心配となったわたしは、パン屋へ行った。

「息子が、パンを買いに来ませんでしたか」

「あれ、ミヒヤエル君なら、もう十五分も前に帰りましたよ」

いつもの若い娘が不思議そうな顔で言った。

「おかしいな。家にまだ戻ってないので」

「彼なら、店から出て、マルトクのほうへ向かいましたよ」

それを聴き、急いで広場に行ったが、彼の姿を見つけることができなかった。その周辺をしばらく捜したが、いなかった。ひよっとしたら戻っているかもしれないと思い、家に戻ることにした。

居間に入ると、ソファアに浅く腰かけていた義母が立ち上がり、

「ミヒヤエルはいましたか」

と、訊いた。

「いいえ、どこにもいないのです。パンを買って、店から出たのですが」

「変ですね」

義母は心配そうな顔つきで窓辺に寄って、通りに目をやった。

わたしは妻の職場に電話をかけようとしたが、もう一度マルトク広場の周辺を捜してみようと思い、義母に、

「ミヒヤエルを探してきます。どこからか、連絡が入るかもしれませんが、電話番号をお願いします」

と、言ってから外に出た。

二十分ほど捜し続けたが、彼の姿を見つけないことができなかった。仕方なく家に戻り、妻に電話をかけることにした。

ミヒヤエルが帰ってこないことを話すと、彼女が、

「わたしから、警察に連絡するわ。すぐ、そちらへ行くわ」と、声を上げた。

十分後、自転車に乗って、妻が家に戻ってきた。ハアハアと息を切らしていた。その彼女に事の経緯を詳しく話すと、彼女は、

「自転車で彼を見つけるわ」

と言い、外に出た。私も再び外に出ることにした。

捜している間、頭に浮かんでくるのは、彼が車に撥ねられて今ごろどこかの病院に運ばれているのではないだろうか、ネッカー川に落ちたのではないだろうか、誰かに連れ去られたのではないだろうか、バスに乗って遠くまで行ってしまったのではないだろうかという暗いことばかりである。

ミヒヤエルはこの街に大分慣れてきたので、将来一人でパン屋へ行き、パンを買ってやることができるようにと半年前から訓練をしていた。今まで四回試みて、成功していたのに、今回はどうしたことか、戻ってこない。

三十分以上も街の中を歩き廻ったが、彼を見つけないことができないでいた。仕方なく家に戻ると、居間で妻と義母とが落ち着かない表情で立っていた。それを見て、彼がまだ見つかっていないことがわかった。

「どこへ行ってしまったのだろう」

わたしは誰彼に全く言った。と、妻が、

「ミヒヤエルが街のなかで迷子になったのは、今回で三度目になるわね。今まではすぐに見つかったのに。あの子、どこへ行ったのかしら。もう三時間が過ぎているというのに」と、落ち着きのない声を出した。

「警察からの連絡を待つしかないね」

「そうね。でも、もう一度をさがしてくるわ」

妻はそう言うことから、再び外に出た。そのあとを追うようにして、私も車で郊外を捜そうとした。車で見つけ出すことは、ほとんど期待できないのだが、居ても立ってもいられなかったからだだった。

三十分してから家に戻ったが、どこからも連絡が入っていなかった。妻も戻ってきた。日は少しずつ傾き、夕闇が迫りはじめていた。春になったとは言え、夜空の下はまだ寒い。私たち三人は、受話器に目を注ぎ続けていた。

一時間が過ぎた。重い空気が流れ出した。と、電話のベルが、「リンリン」と鳴り響いた。私たちはお互い目を見交わした。妻が受話器を取った。

「ハイ、ハイ、そうですか。でも、まだ発見できないのですね。パトカーは一台で

はなく、数台でさがしているのですね。私たちも、そちらへ行きましょうか」

私と義母は、彼女を見つめ続けた。

「ええ、わかりました。では、家で連絡を待ちます」

妻はそう言って、受話器を置いた。

バスの車掌がミヒヤエルらしき子を街郊外で降ろしたとの通報が警察に入り、今その周辺を捜索しているとの知らせだった。それを聴き、再び車で捜しに出かけようかとしたが、妻が警察の連絡を待ったほうがよいと言ったので、それに従った。

二十分が過ぎた時だった。再び「リンリン」と鳴った。妻が受話器を取った。

「見つかったのですね。わかりました。すぐ、そちらへ行きます」

私と妻は、義母を家に残して車で警察署へ向った。

辺りはもう暗い。車中、私たちはほとんど話をせずに、「よかった、よかった」とお互いに数回言っただけ。極度の心配から解き放された安堵感、このような時は、その言葉しか出てこなかった。

十分もしないで警察署に到着して、入り口のインターホーンで私たちが来たことを告げると、厚いガラス戸が開き、係りの人が私たちをミヒヤエルのいる部屋に導いてくれた。

ドアを開けると、長椅子に腰かけていたミヒヤエルが私たちを見た。妻が足早で彼のところに寄った。と、彼は、「ママ、ママ」と言いながら、手に持っているパンの袋を指差した。寒いところにいたのか、鼻水が出ていた。そのミヒヤエルを、妻は体全体で包んだ。

警察官が事情を話し出した。彼はバスに乗って終点で降り、森の入り口付近をブラブラと歩いていたら。もし彼が森の中に足を踏み入れていたら、捜し出すのが難しかっただろうと語った。

家に戻ると、義母が待っていた。ミヒヤエルはおばあさんの姿を見るや、大きな声を出して駆け寄った。

「おばあさん、おばあさん」

「どこにいたの？」

優しい声を出しながら、義母は彼を抱いた。ミヒヤエルはおばあさんの胸に顔をあて、ニコリと笑い返した。少しすると、義母が私たち三人に、

「みんな、お腹が空いたでしょう。今日は、わたしが夕食の支度をしましたよ」

と言ってから、キッチンへ向った。居間のテーブルには、彼女が用意したお皿がすでに並んであった。

ジャガイモ・スープの鍋を持って、義母が居間に入ってくると、ミヒヤエルは今までのことはすっかり忘れてしまったかのように、ニコニコ顔となった。

湯気が昇っているスープとパンを前にしての四人の夕餉となった。

「ミヒヤエルが買ってきた今日のパンは、何か特別な味がするわね」

妻がスープを飲みながら言った。

「苦かったり、甘かったり、複雑な味だね」

わたしがそれに相槌を打つと、義母はスープを飲んでいるミヒヤエルを見ながら、

「これを食べたなら、明日はまた新たな一日のはじまりとなりますね」

と、言った。それを聴き、彼女に、

「夕食を作ってくれて、ありがとうございます」

とお礼ののべると、七十八歳の義母は微笑んだ。

昨日の迷子の出来事を忘れたかのように、ミヒヤエルは朝食を摂ってから養護学校に行き、午後の授業を終えて帰宅した。彼は勢いよく木の階段を上り、おばあさんの部屋に入った。

「おかえり、ミヒヤエル。今日はどうだったの？」

「うん」

笑顔で迎えたおばあさんにそう答えてから、彼はカバンを床に下ろし、テーブルに着いた。目の前には、おばあさんがいつも用意したパンとジュースが置いてあった。早速、そのパンを食べようとした。

「まず手を洗いなさい」

私にそう言われると、彼はバスルームへ行き、洗った手を見せてから、パンを食べはじめた。美味しそうに食べている彼の姿を目にしながら、わたしは義母の部屋から出た。

三十分ほどすると、ミヒヤエルが満足した表情で階段を上ってきた。それを待って、夕食のおかずを買うために外に出た。今晚の献立は、彼と義母が好きなマーボー豆腐だった。

近くの肉屋に行くと、いつもの娘さんがミヒヤエルにハム一枚を渡した。彼はそれを口に入れて、「ンケ」と声を出した。ンケとはダンケ（ありがとう）のことで、日本での七年前の生活は、彼のドイツ語発達にかなりのマイナスとなっていた。娘さんが、「学校はどうだった？」と訊くと、ミヒヤエルは、「うん」と答えた。まだ単語を二語以上並べて言うことができない彼だった。

買物を終えてから、いつものようにわたしはキッチンに立った。ドイツの夕食はパンにハム、チーズをのせ、火を通さないのが一般的である。しかし、日本ではいつも暖かいものを食べていた私たちだったので、夕食もつねに湯気が出る料理を作っていた。

一時間ほどで料理ができ上がり、居間に入ると、ミヒヤエルとおばあさんがボール投げをしていた。義母は腰を折り曲げて、ボールを取っては彼に投げ返していた。ミヒヤエルは不器用なこともあってか、おばあさんのところになかなか小さなボールが届かない。その二人の様子を見ながら、

「おばあさんのところに、しっかり投げなさい」

と彼に促すと、義母は笑いながら、

「いいから、いいから」

と言って、柔らかいボールを拾っては孫に投げ返していた。相当な忍耐力がないと、ミヒヤエルの相手はできないだろう。ミヒヤエルに、

「料理ができたので、ボール投げは止めにして、お皿を並べるように」

と伝えると、彼はおばあさんと一緒に皿を並べはじめた。

妻がテュービンゲン駅でのミツシヨンの仕事を終えて家に戻ったところで、賑やかな夕餉となった。

妻の仕事は、テュービンゲン駅構内で助けを必要としている高齢者や障がいのある人たちに手を貸したり、時にはカバンを持ってあげたりすることが勤務だった。その他にも、ホームレスの人やお腹を空かしている人に、駅内にあるミツシヨンスペースやコーヒールームなどを出したりもする。とにかく、駅構内にいる困った人たちを援助、世話するのが彼女

の務めだった。この駅ミッシヨンは教会組織が運営しているもので、妻は常に生き生きと働いていた。人の助けを自ら進んでするこの仕事に、彼女はよろこびを感じていた。

その彼女は、「おいしい、おいしい」と言いながら、今日一日の仕事内容を話し出した。テーブルを囲んでの夕食が終わり、いつものように四人でゲームをすることになった。ミヒヤエルは小さい時分から、ゲームをよくしていたので、ゲーム遊びが好きだった。おばあさんがまるで恋人でもあるかのように、隣に座る彼だった。

義母はミヒヤエルと二人でよくゲームをしたり、ボール投げをしたり、また絵本を読み聞かせ、孫の彼という時間がたのしそうで、いつも和んだ顔をしていた。そのような姿を見ていると、この人はなんて素晴らしい人なのだろうと次第に思うようになった。しかし、ここに至るまでの間、悩みもした。彼女と住みはじめた頃、三世代同居の難しさを味わった。

あれはテュービンゲンに住んで、八ヶ月が過ぎたある日のことだった。家を出て、しばらくしてから妻に電話をかけた。

「あなた、今どこにいるの？」

いつもとは違う高い声だった。

「知人宅にいる」

「急に家を出て行ったので、心配だわ」

「……」

「ねえ、家に帰って来て！ あなたが家を出た理由は、大体わかるわ。お互い胸を開いて話し合いましょうよ。もし必要ならば、母も一緒に」

「あと二日ここにいる、考えてみる」

ミヒヤエルの様子を聴いてから受話器を置いた。そのあと、妻が言った「ねえ、帰って来て！」の言葉が耳から離れなかった。それに、土浦でパーキンソン病とリュウマチの母を二年間看てくれた彼女の姿も浮かんだ。

ひとりではお風呂に入れない細身の母を、抱くようにして一緒に入浴し、慣れぬ日本食を母に作り、異国で障がいのある子を抱え、よくやってくれた彼女だ。当時三世代同居の暮らしは、大変だったことは確かだ。グチ一つ言わなかった妻に、再びハッとさせられた。

二日後、妻と長時間に亘って話し合った結果、今まで食事は義母と一緒にだったが、朝食だけは義母ひとりでこれからは二階の自分の部屋で摂ることになった。

たしかに、三世代同居の暮らしはそう容易ではなかった。でも、それ以上に、ハウスマンとしての自分の存在に、意味を見出していなかったのを妻との話し合いで知ったのだった。これは何とかしないといけない、自分自身が生き生き暮らすようにしなければならぬと思ひ、家に戻った。

それからと言うもの、ハウスマンの活動に積極的に意味を見出そうとした。と、毎日料理や洗濯や子育てをしていることが、ゴミや食物や健康の問題、それに自然環境問題にも通じていると思うようになった。家での活動は人間が生きていくうえで、根本的な活動だと気がついたのだった。

そのような中で、社会および地域と結びついた自分を発見し、新たな意識を持って、ハウスマンの活動を続け、それを一層深めようとした。そうすると、自分は家族・社会・自然それに他者との関係の中で暮らしているのを知り、こころが満ちてくるようになった。

それに、義母との関係でも、彼女とより繋がりが強くなってくるのだった。ハウスマンに、自分は賭けるのだと思うようになった。

八 章 笑顔の輝き

日本にいた時、私たち夫婦は、息子を地域の幼稚園へ通わせたこともあったので、彼が通学している養護学校の先生にお願いして、地域の小学校へ週に何日か通わせたいと要望を出したのだった。

こちらでは養護学校と地域の学校の先生二人がお互い話し合って承諾すれば、それは可能だった。さいわい二人の先生が労を取ってくれたおかげで、ミヒヤエルはもう一人の生徒と一緒に、週に二日の午前中の授業に、とりあえず二年間地域学校に通うことになった。私たち夫婦は、それが実現となったのをとてもよろこんだ。なぜなら、私たちが住んでいる州では今までインテグレーションはまったく行われてなく、難しいだろうと想像していたからだった。養護学校と地域小学校の二人の先生に感謝した。

この地域小学校の父兄会に招かれた時、わたしは集まった親たちに語った。「障がいがあるなしに拘わらず、子供同士がお互いに遊び学ぶことは現在だけでなく、将来も意義があります。この州の学校当局が、今後どのような判断を下していくのかわかりませんが、是非インテグレーション(統合教育)を進めてほしいのです。ただ残念なのは、二年間で終わることです。でも、その期間、息子は地域に住む子供たちと知り合いになり、今後いろいろな面でお互い関係を持てると思うのです。通りで息子に会ったら、声をかけてください」

妻も私と同じようなことを語った。

地域小学校に週二回通い出した頃、妻とわたしは街の図書館で、『布の絵本展』を開いた。私たち家族が日本にいた時、布の絵本を作っている横浜の布のグループとコンタクトがあつて、そのグループからミヒヤエルにと、三十種類以上の布の絵本が送られてきたのだった。それを妻は街の子供たちにも見せようとしたのだった。それに、彼女が日本で暮らしていた時に集めた、二百冊以上の日本絵本も一緒に展示したのである。

二ヶ月の展示期間中、市内に住む多くの子供たちと、その親たちが見学に訪れていた。ミヒヤエルが通うようになった地域小学校の子供たちも来てくれて、一緒になって布の絵本で遊んだりもしていた。

布の絵本はドイツにはなかったもので、皆驚きの目を向け、賞賛していた。絵本に書かれた日本語を、妻はドイツ語に訳しておいたので、わかり易かったようだ。ミヒヤエルは学校の時間だけではなく、このような機会を通して近所の子供たちと知り合いになっていた。

この布の絵本展はとても好評だった。チュービンゲン周辺の街々や他の養護学校からも展示の要望があり、貸すことにもなった。日本のお母さんたちが作った布の絵本に、私たち夫婦は誇りを感じたりもしていた。これも、インテグレーションの一つだと思った。

またテュービンゲンの街では、毎夏六歳から十五歳までの子供たち四百名を、前期と後期の三週間にわけて、毎朝八時半から夕方六時半まで一グループ二十名前後で近くの森の中で泥んこになって遊ぶプログラムがあった。ミヒヤエルも、もちろんそれに参加した。そのようなこともあって、ミヒヤエルが近くに住んでいる彼らと通りで会うと、挨拶をしてくれるようにもなった。それに、知り合った彼らと、その親たちが私たちの家に来て、一緒に食事をするようにもなっていた。

そのようなことをしての二年間が過ぎようとした頃、再び二人の先生が話し合い、二年間だけではなく、さらに一年間延長となったのである。私たちが夫婦はよろこんだ。

「さあ、ミヒヤエル、走るぞ！」

「ヤー、パ、パ」

それを聴き、彼と一緒に漕ぎ出した。

通りで知り合いの人が、「ハロー」と手を上げると、ベルを鳴らす。子供たちの、「あつ、タンデムだ！」との声を何度も耳にする。

二人乗りのタンデム自転車を妻の知人から安い値で買ったのは、夏がはじまる前だった。それ以来、週末は街郊外やネッカー川に沿って設けられている自転車道を走るようになった。

平坦な道の両側には、やわらかそうな麦畑が延々と続き、身の丈二メートルほどの大きなヒマワリの花が所々に咲いている。それらが笑っているかのように、私たちを歓迎してくれるのである。

大人と子供用に作られたタンデムなので、脚力が異なる二人にはピッタリ。

「もつと漕げ！」

と、ミヒヤエルに促すと、

「ヤー」

と声を上げて、力強くペダルを踏む彼。

走りながらの会話もでき、なによりも周りに映る景色を二人で共有できるのである。それに、うしろで漕いでいる彼の息づかいが伝わってきて、共にといった感じになるのだ。

二人で乗り始めたころ、家から十キロメートル離れた郊外の起伏のないところを走り回っていた。が、少しずつ慣れてくるにしたがい、遠出するようにもなった。ときには、電車で自転車を乗せ、丘陵地で降り、そこから走り出すこともあった。限りなく続く緑の草原に、たわわになっている赤いリンゴの実を目にしながら走行である。ゆったりとした気分となって、心が自然と躍ってくるのだった。

上り坂がかなり急になると、うしろで漕いでいるミヒヤエルに、
「もつと力を入れて！」

と、声高に叫ぶ。背を丸くしながら、汗をかきつつ登る二人。その時は、周囲の景色をたのしむ余裕はない。が、下り坂となると、風を切つての走りとなるのだ。その心地良さは、言葉では表現できないほどだ。

「ヒュー、ヒュー」

ミヒヤエルは声を発してよろこぶ。景色が飛んで行く。これを体験したらもう止められ

ない。

ある時、急に空が暗くなり、風雨に打たれながら走ったこともあった。またある時はギリギリと照りつける太陽の下、休みなしで二時間も走り続け、喉がカラカラとなって、村の食堂で、笑顔を浮かべながらジュースを飲んだこともあった。

一人では自転車に乗れないミヒヤエル。このタンDEMが気に入ったようで、日曜日になると、自分のヘルメットを持ち出して、催促するのである。

「漕げ！」

「ヤー！」

うしろから、ママの「気をつけて！」の声が飛んでくる。

一緒に暮らしている義母は七十八歳の誕生日が過ぎた頃から、体の衰えを少し見せはじめたようになった。でも、頭と精神の働きは活発で、月に数冊の本は読み、手紙をまめに書き、それに電話でよく友人たちと話をしている。月々の電話代は、私たちの二倍は支払っているだろう。

心臓が弱いので、菓を二十年以上飲み続けているが、買物物は毎日出かけ、自分の衣類は自分で洗い、私たちの衣類までもアイロンをかけてくれる。その彼女が、ある日、「今の時間は神からの贈りもの」と言ったことがあった。それを聴いた時、数カ月前に起こった一つの出来事が浮かんだのだった。

わたしが家の前を車で通り過ぎた時だった。ふと、バックミラーをのぞくと、誰かが玄関の石段から、よろけるように倒れるのが映った。もしかしたら、義母かも知れないと思いき、車から急いで降りて、百メートル先の家の前まで走った。

玄関前には、想像したように彼女が倒れていて、頭から血が多量に流れ出ていた。愕き、駆け寄った。と、その時だった。立襟の白衣を身につけた人が急に現れて、出血している箇所を白い布で素早く押さえたのだった。それで、出血は止まった。

その人が一体どこから来たのかと辺りを見回すと、一台の救急車が数メートル先で停まっているのが見えた。白衣を着たその人は、その救急車に同乗していた医者だったのである。義母が倒れるのを目の前で見て、駆けつけたのだった。

彼女はすぐにその救急車に乗せられて大学病院に運ばれ、深く切れた頭の傷を縫ってもらい、その日のうちに家に戻って来る事ができた。もし救急車が家の前を通らなかったら、多量の出血でどうなっていたらどうかと青ざめた。

救急車が来たか彼女が倒れるのを知っていて、そこに待機していたかのように思えた。滅多に救急車が通らない道だ。これは偶然のこととは考えられなかった。何かを守ってくれたのだろうかと思った。

義母は数日間、ベッドに横たわり、知り合いの人が見舞いに来ると、いつも笑顔で対応していた。彼女は若い時分から、「りんごのおばさん」と皆から呼ばれ、笑うと頬が赤くなるのである。その顔を目にすると、誰でも和らいだ気持ちになるのだった。

『和顔愛語』という言葉がある。その語は義母にぴったり合うだろう。

人に会う時に自然と生じてくる彼女の笑顔。と同様に、話す言葉にも優しさがあった。そのことを一緒に暮らしているときしばしば感じるのだった。

その例として、月に一回の割でいつものホームレスの人が、五マルクほどの日用品を持

って家に来ると、義母はその人を居間に入れて、三倍近くの値でそれを買おうとすると、彼は、「それは、もらい過ぎです」と言つて、そのお金を受け取らない。これなどは、彼女の真心のこもった言葉が、相手に通じていたからだろう。

またこんなこともあった。義母の親しくしていた人が自殺し、そのことを非常に悲しんでいた。彼女の部屋に入ると、ランプの下で聖書を読み、祈っている姿を何度か目にした。その人の死は、けて他人ごとではなく、自分自身の命と重ねているように映った。人々を思いやる彼女の心に、わたしは強く打たれたものだった。

年齢を重ねて行くと、人は頑固になり、おごり高ぶると聞く。しかし、義母はそうではない。何事においても「ありがとう」を言う。また、彼女は私たちと一緒に夕食を摂るのだが、料理したものはすべてきれいに食べてくれるのである。

夕食後は、私たちと一緒にテレビを観たり、ゲームをしたりして過ごす。それが終り、寝るために自室に戻る際は、私に必ず、

「ありがとう。ヒデジ」

と、声をかけてくれるのである。

それを聴くと、こちらこそお母さんと一緒に食事ができ、夕方の団欒の時間を共に過ごすことができ、「ありがとう」との感謝の気持ちになるのだった。

また、このようなこともあった。ある時、居間に入ってきた蜂が窓から出られずにいたのを見て、義母はその蜂を自分の両手で包むようにして、外に放ったこともあった。わたしが、

「刺されませんか」

と訊くと、

「今まで刺されたことはありませんよ」

と、笑顔で答えたのだった。優しい心を持った人の言葉だと思った。

その義母と、半年後、隣の国である東ドイツへ訪れようとした。その日が来るのを、待った。

九章 東ドイツ訪問

「これから社会主義国か、どのような社会だろう？」

車のハンドルを握りながら、隣に座っている妻に訊いた。

「西側とは、まったく異なる世界よ。驚かないでね」

「そんなに違うのか、興味が湧くな。とくに、君の友人の家に泊まることになっているから、彼らの生活を見ることもできるだろうし」

「とてもいい家族たちよ」

妻の弾んだ声である。後席では、義母がミヒヤエルに絵本を読んで聞かせていた。その彼女に、妻がうしろを振り向きながら訊いた。

「お母さんが最後に彼らの家へ行ったのは、もう何年前のこと？」

「ヒデジと初めてペーテルで会ったときが、東ドイツへの最後の訪問だったから、十二年が経っているわね」

「でも、その期間、お母さんは毎年クリスマスには彼らにプレゼントを送っていたわよね。そのころ、わたしは日本に住んでいたの、まったく連絡をしていなかったわ。だから本当に久しぶりに会うことになるわ」

二人の会話に、私も加わった。

「お母さんは、何を送っていたのですか」

「チョコレートとかコーヒー、それから良質の布などを郵送していましたね。でもね、送った相手に、すべてが届いたわけではなかったのですよ」

「どうしてですか」

「小包も手紙も五回に一回の割で、友人たちに届かなかったのですよ。東側では、郵便物が配達される前に必ず検査があって、そこで止められてしまうこともあるのですよ」

それを聴いていた妻が、一オクターブ高い声を上げた。

「電話だってそうだわ。友人とやつと電話が通じてても、そのほとんどが盗聴されているわ」

「そんなことが許されるのか」

「東側の市民が西側の人と接触を持つと、スターシーが動くのよ」

「スターシー、何のこと？」

「秘密警察のことよ。あなたとわたしがこれから訪問する老人ホームでも、あなたが来ることは彼らには知られていると思うわ」

「秘密警察？ よくわからないな」

「そのうち、わかるようになってくるわ」

車は予定通り、チュービンゲンから三時間半で東西ドイツの国境線に到着。検問所には十数台の車が列をなしていた。

入国手続きはかなりの時間待たされると覚悟していたのだが、予想に反して三十分ほどで私たちの番となって、パスポートを提示するだけで終わった。荷物のチェックが厳しいと思っていたのだが、意外と簡単に入国することができた。

「いやに簡単に、入国できたな」

それを聴いた妻が、パスポートをハンドバックに納めながら淡々とした声で言った。

「今日は天気がよいし、検査官は機嫌が良かったのではないかしら。それと、申請書に友人宅訪問と書いてあったし、高齢の母も一緒だったし」

何回も東ドイツに来ていたので、慣れているのだろうと思った。

検問所近くの監視台には、数名の見張人がいて、こちらを双眼鏡でのぞいていた。そこも何事もなく通過して、二十分ほど走り続けた。

「道路の幅は狭いので、対向車にも気をつかうし、走りづらい道だ」

「気をつけてね。ゆっくり走るのが一番よ。追い越しは、しないほうがいいわ。ここは西側の道路と違うのだから」

私の車は中古車だが、性能は良い。東ドイツ製の小さな箱型車がのろのと走っていると、つい追い越したくなる。そうすると、対向車線より黒い煙を出しながら、トラックが走ってくるので危ない。妻の言う通り、ゆっくりと走るのが良さそうだ。どの車も、マフラーから灰色の排気ガスを出している。

「それにしても臭いな。環境汚染は考えないのだろうか」

誰彼に言うわけではなく呟いてから、後席に座っている義母に、

「窓を閉めたほうがいいですよ」

と勧めると、彼女はゆっくりと窓を閉めながら話し出した。

「これから訪れる友人宅では、数年前にやっと自分の車を手に入れたのですよ。新車を申し込んでから、十年ぐらいは待たねばならないと聞きましたよ。お金があっても、ここには品物がないのですよ」

十分ほど走っていると、村らしきところに入った。道路は、十センチほどの立方体の石が敷き詰められ、その石が所々欠損しているのである。それを、避けるようにしての運転となった。

「独特の臭いがしてくるな」

「石炭の煙のせいよ。ほら、どの家の壁も黒っぽいでしょう。石炭の煤が、長い間にこびりついてしまったのよ」

「今は夏、これが冬だったらさらに臭いだろうな」

過ぎ去っていく景色は、どことなく小さい時分に目にしたような光景と似ている。垣根の腐った板、何本も並ぶ木の電信柱や古い型の一両の箱電車など、日本の三、四十年前の風景だ。

さらに走り続け、やつのことで、ドレースデン市郊外のレナーテの家に到着。呼鈴を押すと、レナーテと夫のヘルムートがドアから出てきた。妻と義母にとっては、十二年ぶり、お互い肩を抱き合つての再会となった。

夫妻の住む二階へと通されたのち、夕食となった。私たちはレナーテの手作り料理を食べながら、日本での生活や義母の日本訪問、それにミヒヤエルのことなどの話に花を咲かせ続けた。

それが終わり、紅茶を飲んでいると、長時間運転をしていたせいか、疲れが出はじめてくる。義母も疲れた様子を浮かべはじめた。そこで、ミヒヤエルを連れて準備してくれたベッドに、私たち三人は入った。一方、妻は友人夫妻と夜遅くまで話に興じていた。

翌朝、目を覚ますと、四十六歳のエンジニアのヘルムートはすでに勤めに出ていた。私たちのために休暇を取ってくれた、看護師のレナーテとの朝食となった。

彼女には三人の子供たちがいて、二十一歳になる長男には、もう六カ月になる赤ちゃんがいた。一般に東ドイツでは若い年齢で結婚し、共働きとなるようだ。次男は十七歳で職業訓練学校に通い、それに十四歳になる中学生の娘がいた。

レナーテ家族が住んでいるのは、外壁が所々剥がれた四階建ての家。そこに階を違えて四家族が暮らし、浴室は一階に一つだけである。それを四家族が共同で使用するので、急に誰かが、「入浴したい」と言っても入れない。それに石炭と木で湯を沸かすので時間がかかるのだ。

トイレは各住居内にはなく、外の階段に取り付けてある便器に座つての作業である。ミヒヤエルもその便器に座つて用を足すのだが、油断すると、数メートル下の穴蔵に垂直に落ちてしまうだろう。私か妻が付き添つての排便となった。

朝食を摂ってから、私たちはレナーテとスーパーマーケットへ買い物に出かけた。

どの棚も品不足で、チョコレートやコーヒーなどは置いてない。店内は殺風景なもので

ある。バターやパンやジャガイモなどの食料品や新聞などは非常に安く売られていたが、テレビと洗濯機は高く、日本製の二万円ぐらいのラジオが二十万で売られていたのに驚いた。

午後は、ドレースデンの市内見学となった。

道幅の広い大通りを歩いている市民の姿に、生き生きしたものを感じられない。質素な服を着た人が、変化のない大きな建物に呑まれてるように映った。それに、芸術的な建物が破壊されたままで残っている姿に、不気味さを感じた。また、市内を流れるエルベ川の水は汚く、紙や木片が浮いている。それらを見ながらの歩きである。

義母は、テュービンゲンからの車の旅で疲れが出てきたこともあって、市内見学には行かなかった。しかし、明日訪れるレナーテのお母さんが一人で住んでいる家へは、私たちと一緒に行くことになっていた。

翌日、私たち家族四人は、十四年前に夫に先立たれて以来、ひとりで一戸建ての修理された家で暮らしている八十五歳のレナーテの母宅を訪ねた。

とても元氣そうな顔で、私たちを迎えてくれる。簡素なキッチン兼居間に入り、古い造りのテーブルの周りに座ると、夫人がこの地方独特の訛りのある声で話し出した。

「三部屋あるこの家で子供八人を育て、二十六名の孫と十四名のひ孫がいるのですよ。これ、裏の畑で採れたラズベリーといちごで作ったものです。どうぞ、食べてください」

夫人はそう言って、ケーキを私たちのお皿に盛り出した。先に来ていたレナーテが、その様子を見ながら話し出した。

「とても元氣でしょう。母は毎日裏の畑で野菜や果物を作っているわ。孫やひ孫が大勢いて、一人ひとりの誕生日には、かならずお祝いの連絡をするのよ」

それを聴き、わたしは夫人に訊ねた。

「ひ孫の誕生日まで覚えているのですか」

「みんな覚えていますよ。子供たちや孫が毎週末には来るので、そのときは、わたしがねえ、ケーキを作るのですよ」

夫人はニッコリした顔で答えた。それを見て、思った。この方は一人暮らしだが、家族との定期的な交流もあり、独りぼっちという気持ちでここに住んではないのだろう。机の上には毎日配達されてくる新聞が置いてある。世の中の出来事にも関心を向けているのだろう。

ケーキを食べ終えた時、妻が夫人に、

「裏の畑を見せてくれませんか」

と言うと、彼女は腰が曲がった姿勢で私たちを庭に案内してくれた。

約百平米の庭には、トマトやきゅうりやインゲン、それに各種のいちごがなっていた。妻と義母はいちごを採っては、それを口に入れていた。

レナーテの母宅に三時間ほどいてから、私たち四人は再び車に乗った。

助手席の妻が話し出した。

「レナーテの母は、自分自身の家に住んでいるのよ。古くてもきれいに修理されていたでしょ。大体、東ドイツでは、ほとんどの人が国から家を借りているわ。だから家の一部が壊れても、自分の家ではないので修理をしないわ」

「そういえば、レナーテが住んでいる家の外壁も所々剥がれていたな」

社会主義体制の暮らしぶりが少しずつ見えてきた。明日はレナーテが以前働いていた老人ホームの訪問だ。

ミヒヤエルと義母をレナーテ宅に残して、見学を申し込んでいた老人ホームへ妻と一緒に出かけた。車のタイヤが傷むようなデコボコ道を走り続けた。

「昨日訪れたあのおばあさん、元気だったね」

「母と六歳ほど違うかしら」

「あのように一人で暮らし、毎週末には子供や孫たちが訪れ、社会との接触もあるように思えたが」

「そうね。あの方は恵まれているかもしれないわね」

妻は少し黙ったのち、話し出した。

「でもね、ヒデジ、こちらではアルコール依存者が西側と較べると倍ぐらいいはいるのよ。それに、高齢者の自殺率もきわめて高いと言われているわ。西側みたいなホームヘルパー制度もないし、皆共働きになるから子供たちは親の介護がなかなかできないのよ。だから年をとると、老人ホームに入るか、あるいは体が丈夫なうちはひとり家で家のなかで暮らすことになるわね」

「あの方と比較はできないが、お母さんも、私たちがチュービンゲンに来る前は一人で暮らしていたし、今だって社会とのコンタクトは多くあるし、積極的に生きているよね」

「そうね」

車はゆっくりと走り続け、三十分ほどで住宅地内に建っている大きな古い建築物の老人ホームに到着。車を降りると、石炭の煙の臭いが鼻を突いてくる。空気は淀み、石とレンガで造られた三階建てのホームは石炭の煤で黒くなっていた。

建物内に入るが、どこに受付があるのかわからない。人の姿はなく、壁が所々剥げ落ちていた。薄暗い廊下を進んで行くと、調理室らしきところに出た。窓からのぞくと、お揃いの簡素な服を身につけた七名のお年寄りが座って、黙々とジャガイモの皮を剥いているのが見えた。妻はドアを開けて、なかにいた一人に近寄った。

「見学に来たのですが、係の人はいませんか」

「ちよつと待っていてください。ホーム長を呼んで来ますから」

そう言って、八十歳ぐらいのお年寄りが室から出ていった。

数分後、施設長が私たちの前に現われた。その人から、このホームについての説明を伺うことになった。

入所者は約七十名。介護職員は十五名いて、その内訳は看護師五名と他の十名は専門の資格を持っていない人たち。ホームにはアルコール依存症の人や、精神に障がいのある人も一緒だ。費用は一人につき、千東ドイツマルクである。本人負担分は年金額四百マルクから百十マルク払い、残りは国が出すなどを話してくれる。

それを聴いたあと、私と妻は施設長に案内されて、ホーム内を歩き出した。

三階建ての古い建物は室内が薄暗く、狭い廊下の壁は剥がれ落ちて色もくすんでいた。各居室は小さく、簡素なベッドが二つ、四つ、六つと置いてあるだけである。共同トイレは廊下にあった。

入浴室には、ペンキが剥がれた鉄製の長い湯船が真ん中の一つ置かれてあった。大量の

湯を一度に沸かす器具がないので、六週間に一回の割りで入浴（シャワー）をする。また、体の不自由な人が入浴するための機械などの設備はない。このホームには洗濯機もないので、湯船で衣類を洗う。乾燥機もないので雨天の日には、その浴室で乾かさねばならない。洗濯はお年寄りと職員が一緒にして、調理も共同でする。

朝六時から夜九時までには職員がいるが、それ以後はお世話する人は誰もいない。緊急ベールはどこにも付いていない。

二時間あまりの見学を終えてから、別れ際、施設長に日本の扇子と人形、それに何かの足しにしてもらおうとして、西ドイツのお金を手渡した。施設長は、笑顔でそれを受け取った。

車に乗ってから、妻に話しかけた。

「ホームには、車椅子が二台しかなく、その二台も壊れていたね。寝たきり状態の人が何人かいたし、リフト設備もないから職員も大変だろうな。職員の数も少なく、西ドイツとは、あまりに違っていたので比較はできないが、どう思った？」

「わたしが想像していたよりも、よかったと思うわ。レナーテが居室に入ると、尿の臭いがするかもしれないと言っていたけど、そうでもなかったじゃない」

「いや、居室のなかはいやな臭いがしていた。布おむつなので、洗濯機や乾燥機がないから雨の日は大変だろうな。それと看護師が話していたけれど、注射針は熱湯消毒して、何度も使うらしいね」

「そうね。でも、職員とホームの住人が共同で掃除をしたり、調理したり、あの施設長は、何度も『共同で何事もする』と話したわね」

「でも、その共同とは、そこに住むお年寄りがそうせざるを得ないためだろう。辛い場合もあるのではないか。建物内にも人にも、暗さが漂っていたな」

「そうね」

今見学したホームを思い出しながら、これが東側なのだろうと思いつつ、わたしは運転を続けた。

妻が話し出した。

「今の東ドイツ体制で、キリスト教徒として生活して行くことは、大変なことなのよ。牧師の子供という理由で、大学に入学できないケースもあるし。それと、あなたが希望していた障がいのある人たちが住む施設への見学は、結局断わられたでしょ。それには理由があったのよ。昨日、レナーテからそのわけを聞いたわ」

「どんな？」

「ここでは共稼ぎの親が多く、障がいのある子を持つと、養護学校があまりないので、家にいるか、または収容施設に入ることになるわ。その施設というものが、酷いらしいの」

次に何を言うのか、耳をそば立てた。

「レナーテは看護師だから、その分野の情報には詳しいの。わたしはそれを聴いていて驚いたわ」

妻が何を言うかに耳を傾けた。

「施設には、たしかに数人の職員がいるが、ほとんどが資格のない人たちで、その職員が障がいのある人たちと接触するのは、食事と薬を飲ませるときだけなのよ。もちろん、セラピーなどはなく、障がいのある人たちは庭に出ることもなく、ベッドの上で寝転がって

いるだけらしいの。室内は尿の臭いがするらしいわ」

「それは酷いな。親たちは、何も言わないのだろうか」

「それがここでは、親の会の組織はなく、皆何も言えないのよ」

「そんな、ばかな。親たちが発言してこそ、行政は動くのに！」

ハンドルを強く握りしめた。この市民たちは自由を奪われ、国家に統制されながら暮らしているのはつきりとなった。これが社会主義体制の暮らしなのかと思いつつ、レナテの家に戻った。

夕方、次男であるカールの十八歳の誕生日となった。私たち家族も、皆と一緒に祝った。そのカールが東ドイツから西ドイツに亡命したのは、それから一年が過ぎてからだだった。

十章 人を信用しない社会

ドレーズデンのレナテから電話が入った。

「息子のカールが西ドイツへ亡命して、今そちらに住んでいるので、連絡して会ってほしいわ」

妻は驚き、すぐにカールに電話をかけ、長々と話をしていた。

それから三週間経った一九八九年十一月九日、カールが来宅した。この日、まさかと思うようなことが起こった。

東ドイツ人が西ドイツへビザ無しで、入国が可能となったのである。この報は東西ドイツ国内だけでなく、世界の国々へ稲妻のように走った。朝からテレビとラジオで、絶え間なくこのニュースが流れ、ほとんどの人が感動の渦の中にいた。私たちの家でも、カールが顔を見せに来たこともあって感極まっていた。

「ベルリンの壁が落ちた！ ベルリンの壁が落ちた！」

テレビのアナウンサーが何度も大きな声で叫び、それを耳にするたびに、妻と義母はちり紙を手にして鼻をかんでいた。ドイツ人でない私も、ベルリンの壁を自由に乗り越える若者たちの姿を目にして、胸が熱くなった。半年前に東から西に亡命したカールは、目を凝らしながらテレビの画面をじっと観続けていた。

妻が母に話しかけた。

「ベルリンの壁が築き上げられたのは、あれはいつだったかしら？ わたしが幼稚園の教員養成学校に通い出した年だから」

「そう、あれは一九六一年八月十三日の夏だったわ。そのニュースを聞いたときは、冗談だと思っただわ。当時のベルリン市長はウイリー・ブランプトだったわね。前から少しずつ築き上げられた壁が朝までには膝の高さまでに積み上げられ、その日の夜までには人間の高さまでになってしまったわ。その様子をラジオのアナウンサーが逐次伝えていたわね」

義母は、いつもより声高に言った。今度は妻が当時の様子を話し出した。

それを聴いていたカールが、自分がどのようにして西ドイツへ亡命して来たのかを語り

はじめた。

「半年前から、何とか西ドイツへ亡命しようと思っていたのです。そのことを、両親や兄弟には伝えていませんでした」

それを聴いたわたしは、彼の顔を正視した。

「なぜ言わなかったの？」

「秘密警察が動いたりしたら、僕は刑務所入りになりますから」

「でも、両親が知らせるわけではないだろう？」

彼はしばらく黙ったあと、

「誰かがふとしたことで、僕が亡命しようとしていることを知るかもしれません。そして、僕は」

と言い、また黙った。

少ししてから、彼が語った。

「とにかく、従姉妹と一緒にハンガリーに入国し、ハンガリー国境を越えてオーストリアに入ろうとしたのです。でも、警備隊に見つかってしまいました。僕たちは死を覚悟していたので、取り調べは厳しいと思っていたのです。しかし、意外なことに簡単に終わり、二日後、ブタペストの西ドイツ大使館に送られたのです。そこで亡命の申請をして、さいわい受理されました」

自由を求めての亡命だった。

「とにかく、東ドイツについては、将来の希望は持てなかったのです」

彼はそう言うてから、深いため息をついた。家族と別れての亡命、その胸の内は計り知れない。カールの話はなおも続いたが、わたしは眠くなってきたミヒヤエルをベッドに連れていかねばならなかった。彼と一緒に部屋から出た。また義母も疲れが出てきたように、自分の部屋へ戻った。妻はカールと夜遅くまで話し合っていた。

翌日レナーテの来訪に、妻はことのほかよろこんだ。ビザ無しで西ドイツへの入国が可能になったので、早速息子に会いに来たのだった。

テュービンゲン駅で久しぶりに対面する親子。母は東ドイツ人、息子は西ドイツ人となつての再会である。駅のホーム上で二人は抱き合い、母は目に涙を浮かべていた。その情景を前にして、私の胸は熱くなった。

それから二人を車に乗せ、私の家へ向った。

二人は今までに起こったことなどを話し続けていた。最初は真摯な声で話していたが、時が経つにつれて二人とも笑い声が出るようになっていった。

私の家で三日間滞在したカールは、すでに西ドイツに来て機械工員として働いていたので、職場に戻らなければならなかった。テュービンゲン駅での母と子の別れとなった。

母は、息子が乗った電車が見えなくなるまでハンケチを振り続け、電車が線路から消えたあとも、その方向を眺め続けていた。

ベルリンの壁の崩壊と、この母子の再会を目にして、もはや国家によって制限されずに、これからは人間一人ひとりが自由に行き来できる時代になったのを知った。それが再び逆戻りすることはないだろうと思つた。

それから一カ月が経った十二月二十二日午後三時、西と東の両ドイツの首相が、ブランデンブルク門の下で握手を交わす歴史的瞬間となった。この一九八九年の一年間に東ドイ

ツから移民してきた人の数は三十五万人にもものぼった。そして、一九九〇年十月三日、正式にドイツ統合となったのである。

統一ドイツから一年半後、再びカールが私たちの家に遊びに来た。前に会った時とは違って、どことなく元気がない。疲れている様子に見えた。ソファアに腰かけている彼に、「何かあったの？」

と、訊いた。

「友人のことが心配なのです。彼は、僕より三カ月も前に西ドイツへ亡命して来たのですが、ホームレスになってしまったのです」

彼は心配そうな顔で答えた。

妻がコーヒーカップを持って部屋に入ってきた。

「その人は学校時代の友人なの？」

「いいえ、僕より二歳年上で、隣の街に住んでいたのです。彼は自動車修理工をしていたので、こちらに来てはすぐ仕事先は見つかりました。しかし、そこを一年半勤めたあと、解雇されてしまったのです。それから仕事先を探したのですが、見つからず、やけになってビールやワインばかり飲んでいたものだから、アルコール依存症となってしまいました。そして借金も多くなって、今は路上のホームレスの人となってしまったのです」

それを聴き、テュービンゲンでも最近増えてきた三十名にもものぼるホームレスの人たち、特に、若者たちの姿が浮かんた。妻はカップにコーヒーを注ぎ、それを彼の前に置いた。「僕らが、東側からカバン一つで亡命してきた際は、二百マルクの歓迎金を国からもらい、住まいと仕事もそんなに困らずに、見つけることもできました。西側の人たちは、僕らを快く迎えてくれました。しかし、壁が落ちてから、東側から多くの人たちが職を求めてこちらに来たでしょう。そうになると、働く場もそう簡単には見つからず、失業率もどんどん上がってきましたよね」

カールは、コーヒーを一口飲んだ。それを見ながら、彼に言った。

「政府は統合すれば、東西ドイツの市民生活、特に、東部ドイツ市民の生活は良くなると言ったが、そうはならなかったね。東部ドイツは三人に一人は今失業しているし、問題だらけだ」

さらに、彼に隣国のやはり民主化路線を歩んでいるチェコの経済政策についての話を続けた。妻は、私の話が終わるのを待っていたかのように、カールのほうを見て言った。

「そのような話よりも、カールはもっと市民の、個人的レベルでの話がしたいのではないの？ そうでしょ」

「いいえ、今の話とても勉強になりました。僕たち東側で育った者は、西側の市場経済がどのようなものか、まだよくわからないのです。だから、経済的にも精神的に困惑しているのです」

「でも、カールはこちらに来て、すぐに職を見つけ、工場で働いていたのよね。今は、老人介護の専門学校で勉強していると聞いたけれど」

「はい、最初の一年間は工場で働いていました。でも、将来に不安を感じたので、介護士の資格を取って、その分野でこれから働く積もりです」

それを聴いた妻は、カールに言った。

「カールはまったく新しいシステムのなかで自分の将来を考え、選択して少しずつ学んで

いるのだわ」

彼は肯いた。そして、今までの憂慮に満ちた顔がやわらいだようになって、妻に話し出した。

「東側にいたころは、レストランに入ってもウエイトレスが来るまでじっと待っていたのですが、今はこちらからウエイトレスにサービスを求めています」

「カールは、今は西の人でもなく、東の人でもなく、統合後の新しい世代の人なのよ」

妻はカールの顔を見ながら言った。その二人の会話に、わたしは口を挟んだ。

「いや、それはどうだか。カールの次の世代には、そのことが言えるかも知れないが。東の人が西側に溶け込み、西の人が東側の人と共に問題なくやっていけるには、社会主義体制が約四十年間続いたのだから、同じように四十年間はかかるよ」

「そうね、そうかも知れないわね」

妻は肯いた。その時、義母が居間に入ってきて、カールと握手を交わしながらソファアに腰かけた。その彼女に、わたしが言った。

「カールから、こちらでの生活ついて聞いていたところですよ」

「そうだったの。わたしは先ほどまで、教会の婦人会の集まりで、旧東ドイツのスターシー（秘密警察）のことをテーマにした話し合いに参加していたのですよ」

スターシーの言葉が出たので、わたしは興味が湧き、身を乗り出して、その話がどのようなものだったかを義母に訊いた。

「旧東ドイツの人がいろいろな話をしてくれましたね。それを聞いて、なんと恐ろしい組織なのだろうと驚きましたね」

義母はいつもより頬を紅くして、次のようなことを語った。

彼らスターシーの役割はたくさんあるが、そのうちでも重要な任務は、誰が政府、政党に批判的なのか、誰が西側とコンタクトを持ったのかといった反政府市民の情報を集めることだった。それに、市民一人ひとりが何に関心があり、何を望んでいるのかなどを書くファイルに詳しく記入することだった。

彼らは個人情報を得るために様々な方法を用いていた。たとえば、街の要所に隠しカメラや盗聴用の録音装置を置いたり、偽装用のかつらや髭を常に持っていたりした。また十分なお金があった。スターシーにとって、最も重要な情報収集源は、皮肉にも市民だったのである。旧東ドイツには、少なく見積もっても十万人の市民が秘密警察に情報を流していたのである。市民が市民を、家族が家族を監視していたのだった。一人ひとりの自由の表現が許されていなかったのである。

以上のようなことを知り、旧東ドイツでは市民一人ひとりが監視され、コントロールされていくことが手に取るようにわかった。

義母は語り終え、溜め息をついた。ドイツが二つの異なる社会体制になるとは、若い頃は想像もしなかっただろう。その彼女に、妻が話し出した。

「カールはこちらに来てもう二年が過ぎ、今は、老人介護士の養成学校に通っているのよ。こちらの生活にも少しずつ慣れて、自分の道を自分で選択しながら歩んでいるわ」

そして、カールの顔を見た。

「そうなのでしょう？」

彼は答えなかった。返事をしないのが自然のように思えた。というのも、社会主義体制

の中で育った人が、民主主義の社会で、それもわずか二年間暮らしただけで、一人ひとりの自由の選択と権利を実感するのは、難しいと思つたからだつた。

私たちは、カールの近況や家族のことなどをしばらく聴き続けた。彼はそれを話すことによつて、塞いでいた気持ちが晴れてきたようで、明るい表情を浮かべるようになっていった。

その彼は、明日は妻とミヒヤエルとで近くの森へピクニックに行くことになっている。私と義母は、以前から約束していた義兄宅への訪問だ。

十一章 青年たちの自立

カールと妻とミヒヤエルは家を出て、黒い森へ出かけた。そのあと、私と義母は車で義兄宅へ向つた。

真綿色をした白い雲が、青く澄み渡つた空に湧き上がっているのを目にしながらの走行である。道の左右にはリンゴ、ナシ、プラム、チェリーの花が、やわらかい太陽の光を浴びながら輝くように赤く白く咲いていた。その奥には薄緑の麦畑と黄色の菜の花が縞模様を呈している。まるで白い服を身に着けた花嫁が恥じらいながら微笑んでいるかのような、この地方一帯の五月初旬の田園風景だ。

助手席に座っている義母に話しかけた。

「お母さんはいいですね、毎月二人の息子たちの家に交替で招待されて」

「そうですね。でも、今日はミヒヤエルがいないので、ちよつと寂しいわね」

彼女が二人の息子の家へ行く時は、ミヒヤエルも必ず招待されていた。その彼は、今日は母親とカールと遠足に行つたので一緒ではない。

「このように、お母さんと二人でエアハルトの家へ行くのは、滅多にありませんね」

「そうですね」

「ラジオでもかけますか」

義母は軽く手を横に振り、うららかな春の景色を眺め続けていた。その彼女に再び話しかけた。

「昨日、カールは西側に亡命してからのことを語りましたね。どうも精神的に参っているみたいでしたね。民主主義という新しいシステムのなかで、困惑しているようでしたね」

「そうですね。西と東がこんなにも早く統合されるなんて、誰も想像しなかったでしょうね。壁が落ちて、もう二年になりますね。東の人たちは、とくに、大変だわ」

義母は毎日新聞を欠かさず読んでいたので、東部ドイツの経済状態が悪く、失業者が増加していることをよく知っていた。

「カールは二十一歳ですね。これからですよ」

そう声を出して、彼女は窓を開けた。菜の花の蒸せるような甘酸っぱい香りが、車中に漂つてきた。彼女の「これからですよ」の言葉を聴き、自分が二十一歳の頃はどうかだつた

かなと思い起こしながら、運転を続けた。

しばらく走っていると、義母が呟くように言った。

「わたしの部屋に咲いている花に、水をあげるのを忘れて出てきてしまったわ」

「あと三十分したら義兄宅に着きますから、そこから電話をかけましょう。ゲートルトはまだ家にいるので、彼女に頼んで水をかけてもらいましょう」

彼女の部屋には何種類もの花が咲いていて、毎朝それらに挨拶をするかのように水をかけていた。花をもらうと、とてもよろこぶ義母だった。

春の日差しが心地良い。過ぎ去る景色を見ている義母の青春時代は、どうだったのだろうと思っただ。

「お母さんの若いころは、第二次世界大戦前でしたね。何か大きな体験をしましたか」

「そうですね。女学校を卒業してから、すこしの間、イギリスに滞在していましたね。姉がロンドンの郊外に住んでいたもので、彼女と一緒に暮らしていましたよ。初めての外国生活だったので、驚いたり、たのしかったり。外国での生活は、何かと多くのことを考えさせてくれたわね」

「そのようなことで、お母さんは英語が話せるのですね。たしか、秘書をしていたとか聞きましたか」

「ある会社で、しばらく働いていましたね」

当時を思い返しながら、義母はいつも弾んだ声で語り出した。それを聴いて思った。カールが今体験していることは、青年時代の激しく燃え、苦悩しながら生きる中で、大切なことなのだ。そう思っていると、彼女が私に訊いた。

「ヒデジは学生時代、一年間外国で生活したと娘から聞きましたけど？」

「はい、大学を一年間休学して、外国にいました。新潟から船でナホトカに渡り、そこからシベリア鉄道でハバロフスク、モスクワを経由してウイーンまで行きました。当時は、それがヨーロッパに行ける最も安いルートだったのです。リュックサックに寝袋を詰めて、ヨーロッパ中をひとり歩き廻っていました。お金を持っていなかったもので、ドイツでも皿洗いや木工所で働いていました。そこで得たお金で、スイスやチロルの山々を歩いたりして十カ月間過ごしていました。残りの数カ月間はアメリカのサンディエゴにいました。当時、わたしみたいな冒険好きな若者が多くいました」

さらに続けた。

「それぞれの国で、いろいろな体験をしました。フランスのニースでは、自分の寝袋のなかにサソリが這っていたこともありました。アルプスで何日も簡易テントで過ごしたこともありました。いくつもの思い出があります。でも、あの時期に経験したことが、今の自分の生きる方向を導いてくれたように思うのです」

「そうだったのですか」

ふと気がつくと、あと少しで義兄宅である。傾斜のある坂道で車を止め、義母が座席から降りられるように体を支えた。昨年までは、ひとりで乗り降りすることができたのだが、今はそれができなくなってしまった義母だった。

玄関で呼び鈴を押すと、クリスタが戸を開けて出てきた。背の高い彼女は、まず義母と握手を交わしながら左右の頬と頬を合わせ、私とも頬を合わせた。クリームの香りが、一瞬、漂った。妻も義母も化粧はしたことがないので、こんなに近くでクリームの匂いをか

ぐと、それはあとまで残る。ウイーン生まれの彼女は、親しい人と挨拶する際は必ず頬と頬を合わせるのである。最初にこれをされた時は戸惑ったが、今では慣れた。

クリスタと初めて会ったのは、ゲートルートとテュービンゲン市庁舎で結婚式を挙げる数日前だった。明るい髪に青い瞳、これほどまでに容姿の整った女性を身近で見たことがなかったので驚きもした。

そのクリスタは、私のよき聴き人でもあった。義母と住みはじめた頃、三世代同居の暮らしに難しさを感じ、自分の胸の内をクリスタに打ち開けたことがあった。この人なら、こちらの身になって悩みを考え、共有してくれると思っただからだ。彼女は耳を傾けながら聴いてくれた。ありがたい対話時間だった。彼女は義母とも仲が良く、しばしば二人でコンサートや劇場に行ったりもして、お互いの信頼関係は強かった。

私と義母が居間に入ると、テーブルの上にはすでに昼食のためのお皿などが並んであった。私たちはソファアに腰かけてから、義兄と二人の息子としばらく会話をたのしんだ。テーブルを囲んでの七名の昼食となった。カールのことを話題に出してみた。それを聴いていたクリスタが、話しはじめた。

「たしか、一九六〇年代後半に女性解放運動があったわね。その運動を通して、今までは保守的な考え方をしていた女性たちが、選択の自由と権利を求めるようになっていったわ。それとカールの今置かれている立場は、よく似ているのではないかしら」

彼女自身もその運動によって変化したと語った。それを聴き、先ほど義母が言った「これからですよ」のことが浮かんた。私たちは体験したことを生かしながら、変化しつつ成長をしていくのだろうと思った。

料理を食べ終えると、甥のフィリップとギオクが後片付けをはじめた。義母と義兄は昼寝。クリスタはケーキを焼くために、キッチンに立った。

片付けを終わらした二人と、近くの森へ散歩に出かけることになった。

歩いて数分もしないうちに、もう森の中である。新緑で覆われた樹木の梢に小鳥たちが止まり、盛んに鳴いているのを耳にしながら、私たちは三人はゆっくりと歩いていた。

「フィリップ、夏休みまでにはまだ数日あるけど、何か計画していることがあるの？」

十七歳の次男のフィリップに訊いた。

「フランスへ行きます」

「一人で行くの？」

「はい、去年の夏もフランス人家庭に泊まって、小さい子供たち三人の世話をしながら、フランス語の勉強をしました。今年も、そのようにします」

彼は母親に似て、とても色が白く、優しさも持ち合わせていた。ミヒヤエルが一月に一回義母と一緒に招待されて行くと、彼がミヒヤエルの面倒をよくみていた。

その彼から半年前のこと、驚かされたことがあった。いつもの顔つきで、彼が「おじさん、ぼく、落第しました」と言ったのである。この国では落第は珍しいことではなく、しばしば起こり、特に、高校では学年が上がるごとに、一クラス三十人近くのうち数名の生徒たちが落第、もしくは中退すると聞いてはいたが、驚いた。

日本の学校教育制度の中で育った私だったので、当時落第した人は周りにはほとんどいなかった。ただ、自分自身大学時代に、山のクラブ活動に熱中したあまりに留年したことがあった。これも落第なのかもしれないが、その時は、「自分は自分」という意識が強く

あったので、一学年を繰り返すことにまったく抵抗はなかった。しかし、それが中学や高校の時分だったら、抵抗があったに違いない。

日本では大学時代はともかく、それ以前の落第は、生徒も親も学校側も避けようとするだろう。落第となると、今まで所属してきたクラスと学年の集団から離れ、その生徒は不安に陥り、何よりも恥ずかしいという意識が生じ、心理的に自分は落ちこぼれだと思ってしまうからだろう。

その点、ドイツでは、「自分は自分、人は人」という考えが濃く、落第を恥ずかしいとは思わない。また、落第をしてもコンプレックスをそう持つてはいない。学校側も本人も、それに親も落第を適切な処置とみなしているのである。

その背景には、学力が低くても、他の分野で十分に活躍できる場がいくつも用意され、その選択の中から、自分の能力に適したコースを進み、そこで自分の幸せを見つけたことが大切だとする考えがあるからだろう。そこには、『個の確立』を目指した教育がなされているからだ。彼の落第を通して思ったことがあった。

その彼に、歩きながら訊いた。

「外国での体験は、文化や習慣が違うので、いろいろと考えさせられたのでは？」

「そうですね。異なる文化や伝統を知り、その国の人と知り合いになることで、今までの自分の枠から出たような解放感を持ってました。それがよかったです」

彼はそのフランス人の家族のことを語り出した。時々、葉と葉の間から春の光がキラッとキラッと差し込んでくる。私たち三人は森の中をゆっくりと歩いていた。

一時間半の散歩を終えて、家に戻る途中、義母と義兄と一緒にゆっくりと歩いているのを見たので、その二人に合流した。

玄関のドアを開けると、ケーキを焼いた香りが漂ってきた。手を洗ってから、私たちは席に着き、クリスタが作ったりんごパイを食べはじめた。

そのケーキを口にしてしていると、背丈が二メートル近くもある長男のフロリアンが高齢者ホームでの勤めを終えて帰宅し、ケーキを食べていた祖母に腰を屈めるようにして握手をした。

「おばあさん、いつごろ、来たのですか」

「お昼前に来たのよ。今日は早番勤務と聞いていたけれど、どうだったの？」

「ええ、朝の六時から今まで仕事でしょう。いつも家に帰るころには、クタクタに疲れてしまつて。とくに、今日は日曜日だったので、看護師や老人介護の専門職員が少なく、そのぶんだけ、兵役義務の代わりに働いているぼくたちが職員のように働かねばならなかった。忙しかったです」

ドイツの健康な青年男性には兵役義務があつて、兵役に服するか、またはその免除を受けるために、社会福祉関係の分野で一定の期間働かなければならなかった。毎年約十万人の二十歳前後の青年がその分野で働いていた。二十歳のフロリアンもそのうちの一人で、自ら希望して、高齢者ホームで働くことになった。彼は自分の考えをしっかりと持った青年だった。

義母と私たちは彼の話に耳を傾け続けた。しばらくすると、フロリアンが祖母に誘いの言葉をかけた。

「おばあさん、また例のゲームで遊びましょうか」

「ええ、いいわね」

彼女はそう応え、今度は皆でゲームをすることになった。ゲームをするまで時間があつたので、わたしは先ほど自分の部屋に戻ったフィリップとギオクのところに行くことにした。

ドアが開いていたので、軽くノックしてから中に入った。

「これからゲームをするけど、来ないか」

二人とも机に向かって何かを書いていた。フィリップは、「行きます」と答えたが、一番年下のギオクは、「今日中に作文を書かなければ行けないので、僕は遠慮します」と言った。その彼に訊いた。

「何についての作文を書いているの？」

「四日前にクラスでダッハウ收容所に行つて来たので、その時の感想文です」

「それは、ミュンヘンの近くにあるナチ時代の強制收容所のこと？」

「はい、そうです。おじさんは行ったことがありますか」

「うん、あるよ。そういえば、そこに行つた際に君ぐらいの中学生たちが、先生と一緒にいたのを見かけたことがあつたよ」

そう言ったあと、ギオクがそこに行つて、何を考えたかを知りたくなつた。

「君はそこで何を見て、何を考えた？」

「それが宿題のテーマなのです」

彼は握つていた鉛筆を机の上に置いた。

「僕たちは、当時の写真や書かれたもの、それにフィルムを観ました。それから、ユダヤ人たちが暮らしていた簡素なバツラク小屋へクラスメート三十名と先生とで行き、ガイドの人から、当時のユダヤ人たちの生活ぶりを聞きました。そのあと、その場で皆と討論をしたのです」

ギオクの前に置かれてあるノートには、まだ数行しか書かれていなかった。

「君がおもに書くこうとしていることは、何なの？」

彼はゆっくり考えながら答えた。

「ユダヤ人殺戮を体で知つた今、僕は思うのです。僕たちの世代には当時の責任はないです。でも、彼らと共に平和な未来をつくっていく責任はあります。そのことを、今回收容所を訪れて考えました。それについて書く積もりです」

それを聴き、当時の惨たらしい歴史を次の世代にしっかりと伝え、決して再びあのようなことを起こしてはいけなさと徹底的にナチ時代の歴史を批判し、警告しているドイツの学校教育なのだ。批判するには自分の考えをまとめなければならぬ。自分の言葉で表現しなければならぬ。今のドイツの民主主義社会と文化を創り出しているのは、ナチ時代の過去の克服をしっかりと市民一人ひとりに伝えてきたからでもあるだろう。

彼ともっと話をしたかったが、邪魔をしてはいけなそうと思い、部屋から出た。居間では、ゲームがはじまるころだった。

義母はゲームが好きで、皆とよく遊ぶ。特に、頭を使うゲームが好きだった。そのことを知っていたフローリアンが、ルミーという日本のマージャンによく似たゲームを準備していた。彼女が得意とするものだった。

皆で冗談を言いあいながらの賑やかな時間となつた。しばらくすると、ギオクも来た。

義母が孫たちと真剣になつて遊んでいる姿は、微笑ましいものがあつた。結果は、彼女が二番となつた。

「おばあさんはつよい、つよい」

孫たちにそう言われ、拍手をもらう義母だつた。熱心に遊んだためか、彼女の頬は赤くなつていた。腕時計をのぞくと、六時が過ぎていた。

「そろそろ家に帰りましょうか」

義母にそう訊くと、彼女は肯いた。それを見たクリスタが、私たちを引き止めたので、夕食も摂ることになつた。

和やかな笑い声が絶えない夕餉も終わり、家を出たのは薄暗くなつた八時過ぎだつた。車のライトを点けて走り出した。助手席に座っている義母の顔を見ると、ゲームの時の紅潮した頬は消えて、今はライトに照らされている前方を静かに見つめていた。

「ラジオでもつけますか」

「わたしはいいですよ。もしヒデジが聞きたいなら、どうぞ」

ラジオをかけないで、走り続けた。

「今日はたのしかったですね。食事もおいしかったですね」

「そうですね。皆と一緒に過ごせてたのしかったですわ」

穏やかな顔を浮かべながら、彼女は言つた。それを目にして、優しい息子夫妻と孫たちに囲まれて、この人は幸せだなと思つた。

「あの三人の青年たち、自分でものを考えながら判断し、自分の人生を歩もうとしていますね」

彼女は肯いた。

私も三人の青年とゆつくり話すことができ、彼らが主体的に何ごとにも取りくんでいる姿を見て、頼もしさを覚えた。それと、彼らの両親が子供一人ひとりの個を尊重し、温かく見守り、このようにして子供たちは自分の幸せを求め、自立して行くのだろう。そして、自立するにつれて、周囲の人と共に生き、自分が生かされていることに気付き、そのことによつて人や自然への感謝の念がより深まっていくのだろう。そのことを何の気負いもなく、淡々と日ごろの生活の中で実践しているのが、隣にいる義母なのだ。

一週間後に、八十歳の誕生日を迎える義母。疲れが出てきたようで、目を閉じ、眠りはじめた。

十二章 愛でる心

義母と二人で義兄宅に訪れてから一週間が過ぎると、チュービンゲンの草木たちも春を待つていたかのように一斉に花を咲かせ、新緑の葉で木全体が覆われ出した。

わたしが住んでいる通りにもニセアカシアの木が街路樹として数本立ち並び、家の寝室の窓からも、それらの枝に付けた新緑の複葉と甘い香りを発散する白い花を目にすること

ができた。

ある朝、窓を開けると、そのニセアカシアの梢に止まって小鳥が盛んに囀っていた。その鳴き声で、隣で寝ていた妻も目を覚ましたようだ。

「今日は、いやに高らかに歌っているな」

「そうね。彼らも母の誕生日を祝っているのよ」

私たちが小鳥たちの鳴き声に耳を傾けていると、隣の部屋で物音がした。

「何かしら？」

「ミヒヤエルだよ。朝食の準備をしているのだろう」

「今、何時なの？」

「六時半。今日がおばあさんの誕生日なのを知って、張り切ってお皿などを並べているのだよ」

「母の八十歳の誕生日なのに、わたしは仕事に行かねばならないわ。残念だわ」

私たち二人が服を着替えて居間に入ると、テーブルの上には四人分のお皿が並んであった。朝食はいつも三人で摂るのだが、今日は義母の誕生日なので、ミヒヤエルがおばあさんのお皿とカップも置いたのだった。

「おはよう」

ミヒヤエルにその声をかけると、彼はうれしそうにいつも座るおばあさんの席を指差した。その彼に、妻が両手を挙げての大袈裟なジェスチャーをした。

「ミヒヤエルが、一人で全部したの？」

「うん」

彼はニコニコしながら答えた。

私たちが階下の義母の部屋に行くと、彼女はソファアに座って、いつものように郵便箱から取ってきた新聞を読んでいた。その前で、私たち三人は声を合わせて誕生日の歌を唄った。それが終わると、妻は母を抱き、ミヒヤエルはおばあさんの頬に自分の頬を合わせた。私も彼女の温かい手を握った。

「誕生日、おめでとございます」

「ありがとうございます」

義母はとてもうれしそうな表情を浮かべ、ニコリした。しばらくしてから、私たち四人は朝食を摂るために上の階へ向った。

ミヒヤエルはいつもと違って、今日はおばあさんと一緒に朝食なので終始ニコニコ顔である。食べ出すと、階下の義母の部屋から電話の音が聞こえてくる。足が弱っている義母に代わって、ゲートルトが急いで下へ行った。

コーヒーをゆっくりと飲んでいる義母に話しかけた。

「お母さんの誕生日がはじまりましたね。それも八十歳。今日は、忙しくなりますよ」

「そうですね」

彼女はよろこびに満ちた顔で応えた。その時、妻が下から戻ってきた。

「お母さんの友人からだったわ。あとで、また電話をするらしいわ」

そう言って、彼女は椅子に再び座った。

四人での朝食も終わり、義母は自室へ戻った。妻は、八時に始まる駅ミッションの仕事へ行かねばならない。家を出る時、彼女は申し訳なさそうな顔で、

「午後二時ごろには、戻るわ。今日の午前中は、お客さんが何人も訪れて来ると思うから、コーヒーを入れてあげてね。済まないけど、よろしくたのむわ」と言つて、職場へ向かった。

朝八時を過ぎると、近くに住む義母の友人が訪れてきた。義母はその彼女と一緒にソファに座つて話をはじめた。わたしはその人にコーヒーを入れてから、上の階に行つて居間に入った。と、ミヒヤエルが朝食の後片付けを終えて、掃除機を回していた。彼は学校休みの週末は、自分のやることはわかっていた。

一通りの家事を済ませてから、義母の部屋へ再び行くと、先ほどの友人は帰つて、代わりに牧師が義母と話をしていた。彼女が通っている教会の牧師である。その牧師のもとで週一回開かれる聖書を読む会には、義母は持病の痛風で足が痛む時でも、杖を持って足を引きずりながらも必ず出席していた。

その牧師は、毎日曜日の礼拝後、教会の出口で参加した人たち一人ひとりと握手を交わして見送るのだが、その隣にミヒヤエルは必ず立ち、牧師の真似をして一人ひとりと握手するのである。微笑ましい光景とも言えるだろう。

その牧師にコーヒーを入れていると、玄関のベルが鳴った。市長の代理の人が、一冊の本と花束を持つての訪れである。そのメッセージを聞いていると、今度は電話のベルが鳴った。親戚からだつた。すぐに受話器を義母に渡した。

牧師と市長の代理人が帰ると、婦人会の人や近くに住む甥や姪、それに友人たちが絶え間なく訪れてきた。電話も鳴り通しである。やっと昼近くになると、来訪者が途絶え、電話もかかつてこなくなった。

義母の部屋のテーブルには、いくつもの花束が並んでいた。その前で彼女は、今日届けられた十数通の手紙をソファに座つて読みはじめた。その姿を見ながら、彼女に、「いい香りですね。疲れたでしょう」と訊くと、義母は、

「ありがたいことですね。皆さん土曜日の午前中は、家で何かと用事があつたでしように」と言い、クリスマスカードから目を離れた。そして、再びカードに目を注いだ。

それを見て、わたしは昼食の準備をするために上の階に行き、キッチンに立った。ミヒヤエルも野菜を切つたりして手伝ってくれる。一時間して、料理ができ上がったので、ミヒヤエルに、

「おばあさんに食事ができたと伝えて」と言つと、彼はたのしそうな表情を浮かべながら、おばあさん呼びに下の階へ行った。二人が揃つて部屋に入ってくるや、義母がニッコリした顔で、「スブタね」と、声を出した。

彼女は、わたしが作った料理は何でも口に入れてくれた。特に、酢豚とマーボー豆腐を好んで食べてくれた。わたしが作るものは醤油味となるのだが、今までお皿に盛つたものを残したことはない。高齢で自分好みの味を持っているはずなのに、慣れていない料理をよるこんで食べてくれるのである。

テーブルには、ミヒヤエルと妻の合作である手作りローソクが八本立っていた。それに火を灯すと、ミヒヤエルはおばあさんのほうを向いて手を叩いた。義母は微笑み、食前の

お祈りになった。

食べ出すと、妻が仕事から戻ってきた。

「家のことが気がかりで、早く帰らせてもらったわ」

彼女はそう言いながら、席に着いた。私たちが午前中の来客者について話をしていると、また義母の部屋の電話が鳴り響いた。が、そのままにして食べ続けた。

昼食が終わると、義母はいつものように自室に戻っての昼寝となった。妻はケーキ作りをはじめた。

そのケーキが四人のお客の前に出されたのは、お昼のコーヒータイムの時だった。その四人とは、義母の女学校時代からの友人たちである。皆、電車で一時間かけてやって来たのだ。義母を含めて五人とも、よく笑い、その笑顔がまた素晴らしいのだった。

老いはその人の生き方の歴史であり、そこから生じる自然な笑顔はとても貴いものだ。私も高齢になったら、この人たちのように自然と生じるような笑顔を持てるような生き方をしなければと思った。その五人の笑い声が、時々上の階にまで響いてくる。友人たちは二時間ぐらい歓談してから、それぞれの家に帰った。

それから一時間ほどすると、義母の二人の息子家族たちが訪れ、総計十三名の賑やかな夕餉となった。音楽好きな家族たちなので、バイオリンとチェロとアコーディオンを弾きながらの宴である。

義母は自分の誕生日に、友人や知人そして親族を自分から招き、心からよろこんでいた。その姿を見て、私たちもよろこぶ気持ちになるのだった。

その一夕も終わり、義母は花の香りが漂っている自分の部屋にゆっくりと向った。そのうしろ姿を見ながら、思った。

「人は絶えず、自分から当事者となって、そこから生きる意味を見出すことが大切ですよ」と。

義母は大きな病気や怪我もしないで、穏やかな年月を過ごしていた。そのようなある日、彼女が妻と私に通の封書を見せた。

「ウルリケとは、久しく会っていないわ。その手紙にも書いてあるとおり、家族全員が招待されているのだけれど、訪れてみてはどうかしら？」

「もちろん、行きましようよ。ウルリケおばさんが私たちに会いたがっているのだし」妻がそう言うと、義母は手を合わせてよろこびの表情を浮かべ、私に語り出した。

「ウルリケは遠い親戚にあたる人で、わたしより九歳年上だから、今は九十二歳になるかしら。夫が黒い森で牧師をしていたころ、彼女とよく会っていましたね。当時彼女は、カルプ市に住んでいたのですよ」

「カルプ市と言うと、あのヘルマン・ヘッセの生まれた地の？」

「ええ、そうですよ。彼女は、ヘッセが生まれた家に住んでいたのですよ」驚いた。まさか義母との会話の中で、ヘッセの名が出てこようとは思いませんでしたか

らだ。彼女はさらに続けた。

「夫は、よくその家に出かけていましたね。ウルリケは一階で布地のお店を開いていたのだけれども、経済的に一時大変な時期があったので、夫は布を買いに彼女のお店によく行っていたわね。それから、夫はヘッセの大ファンで、ヘッセの作品をよく読んでいました

よ。ヘッセに手紙を書いたこともあったのですよ」

「ヘッセに、手紙を直接書いたのですか」
「またも驚いた。」

「ええ、そうしたら返事がきましたね」

耳を疑った。次に何を言うのか、彼女の口元を見続けた。

「ただし、ヘッセ本人からではなく、彼の代筆をした姉妹からの手紙でしたね。その返事は、かなり長いものだったわ」

「どんなことが書かれてありましたか」

「内容がどんなものだったかは、かなり昔のことなので、忘れてしまいましたね」

義母は淡々と語った。それを聴き、ヘッセの名前をこんなにも身近に感じられ、興をそそられた。

「それで、その手紙、どこにあるのですか」

「夫の書類が入っているケース箱に、それはあると思いますよ」

「そんな貴重なもの、ぜひ読んでみたい」

妻と一緒に、亡き義父の書類箱を探したが見つからない。昔の人の筆記体は読みづらいこともあって、見過ごしたかも知れないと思い、再び目を通したのだが、発見できないでいた。

その手紙を探していたら、一九三十年の消印で、十銭の切手が貼ってある「シベリア經由獨逸国行」と記された一通の封書を目にした。時代が昔に溯ったような気持になった。

妻はヘッセの姉妹からの手紙を探すよりも、古い封書を開いては、今まで自分が知らなかった出来事を母と話していた。結局、手紙は見つけることができなかったが、ヘッセがより身近に思える存在となった。

カルプ市へ行く日になった。テュービンゲンから車で四十分かけて走り、九十二歳のウルリケ伯母さんが住む家に到着。三十年前にヘッセの生まれた家を出た彼女は、今はカルプ市郊外の閑静な住宅地に住んでいた。

玄関のベルを押すと、七十代の二人の女性が私たちを迎えに出てきた。義母の姿を見るや、二人は駆け寄り、

「マリアンネおばさん、マリアンネおばさん、よくいらっしやいました」

と声を出しながら、義母の肩を抱いた。

私たちは、二人に案内されて大きな家に入った。玄関の間には、ウルリケ伯母さんが杖を持って立っていた。義母は懐かしそうな表情を浮かべ、ウルリケ伯母さんの顔を見ながら握手を交わした。

居間に入ると、重厚な机の上に、コーヒー茶碗とケーキがきれいに並んであった。ウルリケ伯母さんが、椅子に腰かける義母を見ながら穏やかな声で、

「もう、どのくらい会っていないかしら？」

と言うと、義母はゆっくりと

「二十年以上になるかしら。でも、あなたのことは、二人の姪からよく聞いていましたよ」と、応えた。私たちは二人の姪から、「何を飲みますか」と訊かれたので、義母と妻は「コーヒー、私とミヒヤエルは紅茶をお願いします」

ウルリケ伯母さんは昔の出来事や今の生活について、手を動かしながら話しはじめた。

顔の色艶もよく、張りのある声でユーモアを言い、その姿はとて九十二歳には見えなかった。一緒に住んでいる七十二歳と七十六歳の姪からすれば、姉のような若さである。この若さは一体どこからくるのかと、紅茶を飲みながら思った。

ウルリケ伯母さんは、今度は隣に座っている義母と話を始めた。その中に二人の姪と妻が加わって、賑やかな会話となっていた。

ミヒヤエルは手作りのケーキを食べ、退屈そうな表情を浮かべ出した。それを見た姪姉妹が彼に、

「ミヒヤエル君、庭に出てみましょうよ」

と誘うと、彼は肯いた。私も一緒に外に出ることにした。

居間から庭に出るまでの長い廊下を歩きながら、姉妹に訊いた。

「大きな家ですね。ほかに誰か住んでいるのですか」

「いいえ、私たち三人だけです。時々親戚や友人が来て、泊まりますけど。よかつたら、家のなかを案内しますよ」

すでに歴史を思わせる古い家具を目にしていたので、わたしは「はい、見たいです」と答えると、姉妹は二階建ての大きな家を案内してくれた。壁にかかっているいくつもの油絵などは、素晴らしいものだった。それらをゆっくりと鑑賞していたかったが、ミヒヤエルが退屈そうになっていたので、私たちは庭に出た。

広い庭園には、花が色とりどりに咲き、甘酸っぱい香りが漂い、まさに五月の春の匂いだ。芝生の土を踏んでいると、体が浮き上がってくるのだった。

「この花はライラック、あれは駒草、あそこに咲いているのはキンバイソウ……」

姉妹は、私に花の名前を熱心に言い出した。

「こんなにたくさんのお花が見事に咲いて、一体、誰がこの花の世話をしているのですか」

「私たちがしています」

「それでは、九十二歳のウルリケ伯母さんもしているのですか」

「ええ、調子がよいときは一緒にしますが、おもに私たち二人でしています」

「それにしても、この広い庭を毎日世話するのは、大変ではないですか」

「力仕事をする際は、知人たちが来てくれますから。ほら、わたしの手を見てください」七十六歳の手にしては、硬くゴツゴツしている。

「毎日この花の世話をするのが、私たち仕事なのです。それに、毎日、どの花も昨日とは違う顔をしているのですよ」

姉妹はお互いに顔を見合わせて微笑んだ。その顔を見て、感じ取った。この二人は真心を込めて花の命を大切に世話して、毎日少しずつ変化・成長している花を見て、よろこび、それが彼女たちの生活を潤しているのだと。

そのような思いになったわたしは、自分もこの花によって心が豊かになったようになり、花を愛でる気持ちが生じてきたのだった。そうなる前、前にいる姉妹が急に身近な存在となつて、言うにいわれぬ親しみを感じはじめたのである。

以前の私だと、この庭のように秩序正しく形作られながら整然と咲いている花を見て、これがヨーロッパ風庭園の美のとり入れかたなのだ、日本ではこのような花の植え方はない、一つひとつの花の素晴らしさよりも、先ずそのことを思ったに違いない。しかし、今は、そのような庭園の美の比較などは、全く問題ではなく、一つひとつの花を愛する心

が、大切なのだと気づいたのだった。

そうすると、今、目の前にいる二人の姉妹から、言葉で言い表せない大きな贈りものを戴いたような気持となり、心の中が段々と明るくなっていく自分を感じ出したのだった。三人の若さの秘訣は、この愛でる心にあるのだろうと思った。

そのようなことを考えていると、妹が何処からか毬をもつて来て、

「ミヒヤエル君、一緒に遊ぼう」

と声を出して、ボールを投げた。彼はよろこんでそれを拾い、投げ返した。妹はそれを両手でつかみ、再びミヒヤエルに投げた。それを見ていた姉が話し出した。

「彼女には孫が七人いて、その子たちとよくボール投げをしているので、上手につかむでしょう」

「七十二歳には見えませぬね」

私もボール投げに加わった。

二階のバルコニーでは、義母が私たちに手を振り、その隣にはウルリケ叔母さんと妻も立っていた。五月のうらかな陽が、周りの花々に注ぎ、より鮮やかに輝いているのだった。

三時間があっという間に過ぎて、別れの時刻となった。私たちはウルリケ叔母と二人の姪の肩を抱き、感謝の意を伝え、家から出た。義母はゆつくりと杖をつき、娘と一緒に家の前に止めてある車へ向かった。そのあとを、私とミヒヤエルが続いた。

車の座席に腰掛けてから、私たちは窓を開け、家の前に立っている二人に手を振った。テュービンゲンへの帰り道、ヘッセの「人は成熟するにつれて、ますます若くなる」との言葉が浮かんだ。成熟するとは、愛でる心を抱きながら、この時間を大切に生きるという姿勢なのだろうと思った。子供のようにシンプルな気持ちで、こころたのしく。

それを今別れてきた三人、それに助手席に座っている義母に言えるだろうと思いつながら、運転を続けた。

十三章 耳を澄ます

九十二歳のウルリケ叔母さんを訪問してから三週間が過ぎた。昼食を終えようとした義母に、誘いの言葉をかけた。

「お母さん、今日は天気も良いし、皆で森へ散歩に行きませんか」

「そうですね」

義母は少し躊躇するような表情を浮かべた。それを見た娘が母に言った。

「ここところ足の具合もそう悪くはないみたいだし、お母さん、行きましようよ」

ミヒヤエルも、「おばあさん さんぽ」と声を出した。

「それでは行きましようか。痛みも今日はあまりないですし、長時間でなければ歩けるでしょう」

義母は肯いた。そこで、皆で森へ出かけることになった。

家から車で十分で、森の入り口に到着。初夏を思わせるような晴れ上がった天気である。どこからともなく小鳥たちの鳴き声が聞こえ、さやかな風に揺られて木の葉がサラサラと音を立てていた。森閑とした中を、義母の歩調に合わせてのんびりと歩きはじめた。

少し行くと、ミヒヤエルが何を思ったか一人でどんと先へ走っていった。森の中で彼を見失うと、捜すのが大変なので、わたしが彼のあとを追いかけてしようとした。と、妻が声を上げて駆け出した。

「わたしが追いかけるから、あなたは母と一緒に歩いて」

樹と土の香りが漂う小径を、義母と肩を並べてゆつくりと進んだ。ベーターで彼女と最初に会った時は、私と同じくらいの背だったが、今では低くなって杖をつきながら歩くようになった義母である。

私たち二人は何も語らずに歩いていた。突然、義母が立ち止まり、小径の脇にあった野の草をじっと見つめた。何かそこにあるのかと思ひ、私もそのほうへ視線を向けたが、変哲な野草が目に入っただけである。

「何かあるのですか」

そう訊くと、彼女は杖をその野草のところへ指して静かな声で言った。

「ほら、白い花が咲いているでしょう」

それでも私には見えなかったもので、近づいて腰を屈めると、草の間に小さな白い花が咲いていた。

「あつ、こんなところに花が！ お母さんは歩きながら、よくこの花が目に入りましたね」
彼女は何も言わずに、なおもその花を見続けていた。その顔はなんと穏やかで、安らいでいるのだろうと思った。花に愛されているのを感じている顔だ。杖をつき、今はゆつくりと歩かねばならぬ義母だったが、その足取りの中で、この小さな神秘的な花を見出し、よろこびを得ていたのだ。

先に走っていったミヒヤエルの速さでは、この花を目にすることはできなかっただろう。またこのようなところに花は咲いていないだろうと、ひとり勝手に思っていた私にも、この花は見出せなかった。しかし、義母はゆつくりとした足取りの中で、あるがままに自然に咲いている花を見つけ、そこによるこびを得ていたのである。

義母と一緒にその小さな白い花を眺めてから、再び歩き出した。少し行くと、丸太でつくられた形のよいベンチがあった。

「座りましょうか」

「まだ大丈夫ですよ。先へ行きましょう」

高い針葉樹に囲まれた小径をさらに進むと、展望のよい明るい場所に出た。そこにもベンチがあったので、再び彼女に訊いた。

「休みましょう。すこし疲れてきたわ」

小さな声で答えた。そこで、私たちは腰を下ろした。

「二人は、もう先に行ってしまったようですね」

そう言うから、わたしは先ほど見つけた小さな花についての話をはじめようとした。「先ほど出合ったあの小さな花、いろいろなことを考えさせてくれました。お母さんはゆつくりとした足取りのなかで、あの花を見つけたのですよね。わたしには、見つけること

はできませんでした。自分自身、若いころから心がけていることがあるのです。それは、ゆっくりということですよ」

義母は、目の前に広がる明るい景色を眺めていた。

「でも、毎日の生活のなかで、このゆっくりがなかなかできないのです。そのときは、大抵自分の目先のことばかりが気になり、時間に追われ、自分の心を失っているのです」

今までベンチにもたれ掛かっていた姿勢から、今度は深く座りなおした。

「お母さんはゆっくりとした歩きのなかで、あるがままに咲いているあの小さな花を見つけ、じっと眺めていましたよね。その姿から、お母さんはとても豊かな時間を持てる人だなあと思ったのです。まるで、花と対話して耳を澄ましているかのようでした」

彼女は少し黙ったまま遠くを眺めていた。私たちの間にしばらく沈黙が流れ続けた。

義母が話し出した。

「ゲートルトが黒い森地方の小さな村で生まれたことは、知っていますね」

「はい、あそこには二回ほど行ったことがありますから。景色のいいところですよ。緑の草原と小さな川が流れ、川べりには花が咲き、今でも、あの風景を想い出すことができます」

「当時、夫はその村で牧師をしていましたね。小さな村だったので、周辺のいくつかの村の教会も受け持って、毎日自転車で行き廻っていましたよ」

「あの辺は、冬は雪が相当積もるものではありませんか」

「ええ、そうですね。雪の降った日は、長靴をはき、スキー板を背負って、遠くの教会へ数時間かけて行っていましたよ」

彼女はその情景が目の前に浮かんでいるかのように、生き生きとした声で話し続けた。

「夫は毎日忙しかったわ。そのようなある日、アンネを車イスにのせ、近くの野に花摘みに出かけ、摘んできた花を夫に上げたら、とてもよろこんでくれたわ。夫はしばらくその花を眺めてから、アンネに『ありがとう』と優しく言ったのですよ。アンネはとてもよろこんだわ」

義母は一息入ってから、今度は少し声を高くして言った。

「わたしもよろこんだわ」

それを聴いて、車椅子の娘との大変な暮らしがあつたからこそ、その時のよろこびが大きかったのだろうと思った。

と同時に、高齢者は現実の世界ともう一つの世界を持っているのだとも感じ取った。もう一つの世界とは経験した想い出の世界である。それはその人にとっては家にもなるし、故郷にもなるし、辿り着くところは、パラダイスにもなるだろう。高齢者は、多くの想い出を自分の引き出しの中に納めてある。もしその人が亡くなれば、一つの図書館が無くなると言えるだろう。その歴史のある図書館から、何かを引き出すことができるかどうか、それは今のこの時にいる自分にかかっているのだ。聴かねば、耳を澄ませねばならない。しばらくすると、ヤッホーと一際高い声が響いてきた。そのほうに視線を向けると、妻とミヒヤエルが手を振りながら、駆け足でこっちへ向かってくるのが見えた。

ミヒヤエルが先に着き、息を切らせながら妻がそのあとに続いた。その彼女がベンチに腰かけている私たちを見ながら、

「まだ、そんなに歩いていないでしょうに。お母さん、もうすこし歩かなければだめよ」

と言うと、義母は、

「そうね、そうしましょう」

と声を出して、微笑んだ顔を私に向け、腰を上げた。

しばらくすると、義母は疲れてきたようで、娘と腕を組んで歩くようになった。ミヒヤエルはその二人の前後を行ったり来たりしている。妻は小径の脇になっている赤い野イチゴの実を採っては、それを母に渡していた。

その二人の話し声が、時々私の耳に入った。どこからともなく小鳥たちの歌う声が聞こえ、私たちは森に包まれていた。

八十四回目の義母の誕生日が過ぎて、三ヶ月が経ったある日のこと。妻が少し変わったイベントを計画した。

それ以後、彼女は会場を探したり、招待状を書いたりして、熱心にその日に向けて準備をはじめた。それも、自分でたのしみながら、

「ケーキは誰が持つてくるの？ 夕食はどうしましょう？ 誰がスピーチをするの？ 音楽演奏は？」

と電話で、親戚の人たちと打ち合わせをするようになった。

いよいよその日となった。会場はテュービンゲンの教会集会所内の小さなホールである。義母の両親が結婚して今年で百年目にあたるので、それを祝おうとするものだった。

妻がこのプランを企画した時、核家族になっていて現代で、特に、三世同居をほとんど見かけないドイツで、この集いに来る人はそう多くはないだろうと思った。が、集まった人はなんと約六〇名にも及んだのである。義母の四人の兄弟たちは他界していたが、その子供たちと孫たちが寄り集まったのだ。半分以上は、わたしが以前会ったことのない親戚の人たちだった。

ドイツでは、誕生日などを祝う会は家庭で頻繁に行われているが、このように広範囲の親族が、葬式でもないのに出席するとは思っても寄らなかつた。

驚いたことに、六十名のうち二十歳前後の青年が九名も来たことである。彼らはこのような集まりに興味を持たないだろうと想像したのだったが、違っていた。ホールの飾り付けや、後片付けをお互いに協力しててきぱきと行い、ドイツ青年の意外な面を知った思いとなった。

午後二時から始まり、ケーキを食べながら、一人ひとりがスピーチをのべていった。六十名のドイツ人が集まれば、楽器を奏でる人は数名がいるもの。その人たちがバイオリンとオーボエとホルンで合奏し、皆で歌を唄い、簡単なゲーム遊びなどが行われていった。

そのような中で、今までそう話し合うこともなかつたいとこ同士とか、甥姪などがお互いに知り合う機会となった。もちろん、親族の中で最年長の義母は、今は亡き両親ときょうだいのことを語った。マイクロホンのない小さなホールなので、声をいくらか高くして、頬を紅潮させて話す義母だった。その彼女の話しに、親族の人たちは耳を傾けていた。

その情景を目にして、思った。彼女が今ここにいるのも、過去の数知れぬ親族との交流のうえに成り立ち、今のこの行為が未来をつくり上げていくのだろうと。

最後に、義母が立ち上がった。

「このような会が開かれ、皆がお互いに交流ができ、よかったわ」

そう言ったあと、彼女は父母と亡くなったきょうだいのことをのべ、最後に「ダンケシエーン」と皆に言ってから席についた。と、皆から拍手が湧き起こった。

解散の時刻となった。多くの人が妻と握手しながら、「ダンケ（ありがとう）」と声を出していたのが、私には爽やかに聴こえた。というのも、このような集いをしながら、親族関係の繋がりを保ち、そして深めるのだろうと思っただけからである。

私と妻は、体が弱ってきた義母を両脇から支えるようにして外に出た。と、辺り一面が初夏の夕陽に照らされて、眩しいくらいに茜色に染まっていた。義母の頬も赤く帯びていた。

それから十ヶ月が経った、六月上旬のよく晴れ上がった午後、私たち家族四人はテュービンゲンから車で三〇分走ったところの、人口九百名が住む小さな街ハイガーロッホへ向かった。

青く澄み切った広々とした空には、白い雲がポカリポカリと浮き、淡緑の麦畑とむせるような黄の菜の花が縞模様を呈しながら続いていた。それを目にしながらの走行である。

街に着くと、教会の鐘の音がちょうど三時を告げた。妻が、

「まずコーヒーを飲んでから歩きましょう」

と言ったので、小高いところに建っている喫茶店に行くことにした。

私たちがバルコニーの椅子に座ると、目の前に素晴らしい景色が目飛び込んできた。眼下に小川が流れ、それに沿って古い木組の家々が建ち並び、六百年前に建築された城と大きな教会が望め、まるで絵本に出てくるような光景である。しかし、年間二万人がここを訪れるのは、この美しさのためではなく、その教会の下にある洞穴が目的なのだった。そこは、かつてはビールの地下蔵だったが、一九四四年にベルリンの空襲を恐れたドイツの物理学者たちが、その洞窟に集まって、戦争が終結するまで原子爆弾の研究をしていたところだった。今は地下室の原子博物館となっていた。

コーヒーを飲み終えると、娘が母に言った。

「ユダヤ人のお墓へ行ってみない？」

「そう、いいわね」

それを聴き、妻に訊いた。

「ここにユダヤ人が、住んでいたのだろうか」

「もちろんよ。この街には、多くのユダヤ人が暮らしていたわ」

彼女はそう答えてから、この地方の歴史を話し出した。私たちは一時間ほどしてからこの店を出て、曲がりくねった坂道を三〇〇メートル下って行った。と、道路の脇に一つの記念碑が目にとまった。

『この街には、約四〇〇年以上も前から大勢のユダヤ人が住み、多いときは三〇〇名が暮らし、ナチ時代にも二〇〇名近くが生活をしてきた。その彼らのうち、一九二名が強制収容所へ連行され、生き残った人はわずか一名だけだった』

それを読み、このような美しい景色の地にも、ナチの傷跡が残っているのだと思うと、溜め息が出た。さらに歩いて行くと、古い石壁で囲まれた墓地が見え出した。

ユダヤ人墓地というのは、一種独特のものがあつた。以前プラハのユダヤ人墓地を訪れた時もそうだったが、ここに入ると厳肅な気持ちにさせられてしまうのだった。

どの墓石も、質素な石板一枚の上にヘブライ語とドイツ語が刻まれ、すべてがイスラエルの地である東を向いて整然と規則正しく並べられ、花は飾ってなく、ドイツの墓地のように、散歩するような雰囲気はまったくない。死者の威厳を感じるのだった。祖先を大事にしている民族なのを知る思いとなるのである。

私たちは大きな石板の前に立った。ナチ時代に強制収容所へ連行された人たちが眠っているところだ。その墓石の上には、いくつもの小石が並んでいた。ここを訪れたユダヤ人たちが置いていったのだろう。妻と義母は、しばらくその墓石前で頭を垂れていた。ナチ政府時代にドイツ人がした行為を、自分の心の中で見つめているかのように私には映った。墓地に三十分ほどいてから、ここを出て、車でテュービンゲンへ走った。

家に戻り、夕食の準備をしていた時のことである。妻がジャガイモを剥きながら、キリスト教信仰に関する詩を突然吟ずると、義母もニンジンを切りながら、娘と声を合わせて詩うたい出した。

今まで聴いたことのない句だった。二人がリズムをとりながら、いつもよりも声を高くして祈りの詩を吟唱しているのである。三、四分は続いただろうか。それが終わると、二人とも、顔を見合わせて微笑んだ。母と子の重なった顔である。

それを目にして、思った。二人は、キリスト教の歴史を背景としながら生きているのだ。人間の本質と可能性をキリスト教から見出しているのだろうか。

十四章 故郷、そして

コーヒーを飲みながら、義母が娘に訊いた。

「黒い森地方で、二週間ぐらい滞在しようと思っただけだけでも、どうかしら？」

「どうしたの、何か用事でもできたの？」

「特別な用はないのだけれど、もう一度、昔暮らした黒い森地方へ行ってみたくなったわ。あそこは空気もよいし、知人たちもいるし、そして……」

義母は珍しく言葉を濁した。

「でも、体の具合はどう？ 足は痛くないの？ 一人で大丈夫かしら？」

娘は心配そうに、八十六歳になった母を見つめた。

「滞在するところは、あなたが生まれた村の近くにある民宿にしようかと思っただけだけれど。あそこの主人をよく知っているし、あなたも何度か行ったことがあったでしょ」

「村外れにあつて、裏が森でとても眺めのよいところね。でも」

「平気ですよ」

きっぱりと言い、もう決心しているようだった。その二人に、わたしが言った。

「お母さんが希望しているのだから、いいじゃないか」

何か考えがあつたことだろうと思つたからである。それを聴いた妻は、母に、

「わかつたわ。それで、いつごろを予定にしているの？」

と、訊いた。

「今はまだ暑いから、秋になったらと思っているわ」

自分の望みが叶って、義母は満足そうな表情を浮かべた。

それから三ヶ月後、義母はエアハルトの車に乗って黒い森へ出かけた。家の中は、彼女がいなくなったので、何か物足りない空気が漂っていた。テーブルにお皿などを並べる係りのミヒヤエルは、おばあさんの食器も必ず置き、寂しそうであった。

彼女が黒い森へ行って一週間後、妻は体の弱ってきている母のことが気になり、仕事を一日休んで母の滞在している村を訪れようとした。

わたしが、「車で一緒にいくよ」と言うと、妻は、「電車で行くのもいいわ。一時間半で、母が滞在している民宿に着くから」と応えて、ひとりで向った。

その妻が家に戻ったのは、その日の夜の十時過ぎだった。ミヒヤエルはすでにベッドで眠っていた。彼女に暖かい紅茶を入れながら、

「お母さんの様子はどうだった？」

「元気だったわ。毎日森の小径を散歩したりしていたわ。わたしが着いたときは、ちょうど昼寝がすんで、今から散歩に出かけようとしているところだったわ」

「それはよかった。それで部屋とか食事などは、どうだった？」

「部屋は、二階ですこし狭い感じがしたわ。でも、木造の昔風の家だったから母にはよかったみたい。シャワーやトイレも付いていたし、食事もおいしいと言っていたわ」

「二階では、上り下りが大変なのでは？」

「それはあんまり苦にならないみたい。家でも階段を上がったたり下りたりしていたし」「毎日の散歩以外に、何をしていたのだろうか？ 何冊も本を持っていったようだけど」

「宿の主人と話をしたり、他のお客さんと話をしたりしていたわ。昔の知人たちも、訪れていたようだし」

「それはよかった。お母さんの年齢でふるさとへ行くということは、意味が十分にあってのことだと思っよ」

「どのようなの？」

「お母さんは長い間、黒い森の地で暮らしていたよね。そこは、彼女にとっては過去の歴史が詰まったところ。その地で自分と語ろうとしたのではないだろうか。高齢者にとって、過去の出来事は変わることのない存在で、それは記憶のなかでいくらか変化はしているだろうが、今も心の奥に生き続けていると思うよ。それを確かめるために、お母さんはふるさとへ行ったのだよ」

「そういえば、最近は昔のアルバムをよく観ていたわね」

妻はそう言いながら、手提げ鞆から一枚の写真を取り出した。そこには黒い森地方特有の、魚のうろこを重ねたような壁で造られた家が写っていた。

「わたしが子供のころに育った家へ、母と一緒に行ったわ。ほら、あなたの手に持っている写真に、その家が写っているでしょう。あの辺は、昔とまったく変わっていないわ。あなたも行ったことがあったわよね」

昔のことを想い出しながら話す妻の瞳は、輝いていた。

「その周辺をすこし散策してから、わたしと母は、当時お手伝いさんだったマーガレットが住む家を訪問したわ。そして、彼女の作ったケーキとコーヒーを御馳走になって、しば

らく話し込んだわ。母はとってもよろこんでいたわ」

空になった妻のカップに、二杯目の紅茶を入れた。

「マーガレットは、当時私たちの家に毎日来てくれて、姉の世話をよくしてくれていたわ。母は牧師夫人として毎日忙しかったので、車イスに乗ったアンネのことをなかなか見ていられなかったのよ。母は、いつもマーガレットに感謝していたわ。別れ際、母は深くマーガレットにお礼をのべていたし」

「お母さんの過去は、今も心のなかで生き続いていたのだろうな。それと語っていたのだよ」

「そうでしょうね」

「お母さんは、今まで生きてきた出来事、とくに、アンネのことが心の奥に深く残っていて、それを感謝の念で結んだのではないだろうか」

妻は少しの間黙っていてから肯き、湯が立っている紅茶を飲んだ。そして、再び話し出した。

「民宿に戻る途中、母と一緒に、昔から続いているレストランで食事をしたわ。子供時代を過ごした地を再び母と歩いてよかったわ。でも、ちょっと気になることもあったのよ」

「気になること？」

「話の最中にね、母は、時々わたしの声かけに反応しないことがあったのよ。今までそんなことはなかったのに」

「それは多分、久しぶりに懐かしい地のふるさとを訪れて、気分が高揚していたからではないか」

「そうならいいのだけど」

母と長年一緒に生活してきた彼女の「ちょっと気になる」という言葉に、少し引つ掛かるものを覚えた。

二週間の滞在を終え、義母は義兄の車に乗って帰宅した。家に戻った彼女に、

「あちらで毎日何をして過ごしていたのですか」

と訊ねるが、

「毎日、散歩していましたよ」

と、答えるだけで多くを語らなかった。以前の彼女なら自分で体験したことは、表情豊かに何でも話してくれたのだが、今はそれがなくなってしまうた。高齢になると短期的な記憶力は低下するので、それをいくらかでも防げればと思い、

「散歩中に誰か知り合いの人に遭いましたか。どのような処へ行ったのですか」

と訊ねるのだが、なかなか頭に浮かんでこないようであった。

義母が黒い森から戻り、三ヶ月が過ぎたある日のこと、彼女が娘に言った。

「足がすこし痛いんだけど、今日はどうしても教会へ行くわ」

それを聴いた娘は、母の腕を支えながら家から五分ほどに建っている教会へ向った。私とミヒヤエルも一緒だった。

毎年十一月九日は、義母も妻も必ず教会の礼拝に出席していた。私たちがテュービンゲンに引越した年も、この日四人で教会に行った。その時、妻が私に語ったことがあった。

「この日は私たちにとって、とくに、母にとっては忘れられない特別の日なのよ。一九三

八年十一月九日の夜、ヒットラーのナチ政府は、国内にあるユダヤ教の会堂やユダヤ系の商店・墓地・事務所などを焼き払うように命令を出したわ。それは実行され、数知れぬユダヤ人が逮捕され、家々が焼かれたのよ。その日のことを、『水晶の夜』と呼ばれているわ。ここテュービンゲンでも会堂が焼かれ、何人ものユダヤ系市民が逮捕され、その一人に母の知り合いの人がいて、その人も強制収容所へ送られてしまったのよ。私たちドイツ人にとつて、この日は、決して忘れてはいけないのよ」

それを聞いた時、義母は当時の暗い体験を省みながら、そして妻は当時の歴史を批判的に見ながら、二人とも将来に目を向け、そこに明るい希望を抱き、だからこそ、このような教会の集いに来ているのだと思つた。

私たちが教会に着くと、もうすでに市民五百名ぐらいが席に着いていた。そのうちの半分以上が若者たちだった。

ユダヤ人の学生によるフルートの演奏ではじまり、次に旧約聖書の詩編をヘブライ語で皆と一緒に歌い、そのあと、一九三八年十一月九日に起こった生々しい出来事を、当時を知る人たちが語り出した。

私たちは静かにその話しを聞いていた。とても厳粛な式だった。それも一時間で終わり、教会を出ようとした時だった。妻は友人とぼったり出逢い、その人とおも話をしたい様子だった。そこで、妻に代わって、わたしが義母の腕を支えて家まで帰ることになった。

義母の腕の温もりを感じながら、彼女に話しかけた。

「先ほどの話、感慨深いものがありましたね」

「そうですね」

義母はゆつくりと足を前に進ませながら言った。その彼女に、先ほどの式典で私の頭に浮かんだことを話そうとした。

「この日に、ユダヤ人抹殺に先立って、精神病の人たちや障がいのある人たちが約十万人が抹殺された歴史についても、触れてくれればよかったのに」

それを訊いた義母は急に立ち止まり、私たちの前を歩いているミヒヤエルのうしろ姿を見ながら、

「そうですね。ヒデジの言う通りね」

と言い、さらに続けた。

「わたしは様々な経験をしましたが、障がいのあった長女との暮らしは、わたしが生きていくうえに、大切な意味をもたらしてくれましたね」

それを聞いた時、彼女を支えていた私の腕に力が入った。と、義母の温もりがさらに伝わってくるのだった。

それから、ちょうど一年が過ぎて十一月中旬となった。

毎年この頃になると、義母はクリスマススの贈り物のために靴下を編みはじめるのだが、今年はその様子がまったく窺えない。ソファーに横たわっていることが多くなってしまう彼女だった。

そのようなある日、娘が母に訊いた。

「今年は編み物をしないの？」

「しようとしたのだけれど、編み方を思い出せないの」

母は静かに何事もないかのように答えた。

「わたしが片足を編むから、お母さんはもう一方を編んでよ」

娘は毛糸と編棒を手渡し、二人並んでソファアの上で編み物をはじめたが、母の手は一向に進まない。それを目にした娘は、子供に教えるように母の手を取るのだが、その手は正確には動かない。それでも、母の編み棒は娘の手と一緒に動き続けた。

いよいよクリスマスの日となった。義母にとっては、八十六回目である。数日前から足に痛みが走っていた義母が、寂しそうな声で娘に言った。

「残念だけど、教会の礼拝には行けそうもないわ」

「歩けないほど痛いのか？」

「ええ、そうね」

それを聴いたゲートルトが私を見た。

「それでは、あなたの車で、教会の入口まで母をのせていったらどうかしら？」

「それはいい案だ。そうしよう。でも待てよ、あそこは車進入禁止だ。許可がないとだめだろう」

「そうね、あなたの車では無理ね」

妻は残念そうな表情を浮かべた。が、そのあと、声を上げた。

「そうだわ、わたしの事務所に車イスが一台あるから、それが使えるわ」

「うん、それはいい」

三十分後、車椅子に彼女を乗せ、私たち四人は教会へ向った。昨年のような大雪ではないので、車椅子は支障なく進んだ。

いつもの日曜礼拝だと二百名ぐらいの出席者だが、今日は千名以上の人たちで、堂内は膨れ上がった。私と妻とミヒヤエルは長椅子に座り、義母は車椅子の上で歌を唄い、そして説教に耳を傾けていた。

そのクリスマス礼拝が終わり、外に出ると、教会の鐘の音が辺り一面に響き渡り出した。その音を耳にしながら、私たち四人はゆっくりと家へ向かった。

家の前に着くと、妻は車椅子から母を降ろし、彼女の足が痛まないように体を支えながら木の階段を上った。

居間には、昨日マルクト広場で買った高さ二メートルの樅の木が立ち、小枝には手作りの作った木の星と月、それに妻が編んだワラの星などがぶら下がり、その下にはドイツや日本から送られてきたプレゼントがいくつも並んであった。

四人での夕食を済ませてから、その贈り物を開けることになった。

何が出てくるのか楽しみで、包みを一つひとつ解くたびに、私たちはよろこびの声を上げた。ミヒヤエルは、おばあさんから童謡のカセットテープと暖かそうな帽子をもらって、ニコニコ顔である。カールからは、美しいテーブルクロスが送られてきた。パートナーができ、高齢者ホームで介護士として元気に働いていると、そのことが便箋に書かれてあった。それを読んで、私たちはよろこんだ。

もみの木に七本立っているキャンデルに火が灯った。それを見たミヒヤエルが、本棚から賛美歌集を取り出して、私に持ってくる。義母と妻は歌集なしで唄い、ミヒヤエルは自分なりの唄い方で私たちに合わせて声を出した。四人の声は教会堂内のように響かなかったが、キャンデルには届くようで、炎が時々揺れた。

誰彼ともなく歌声が去り、私たちは静かに燃えている炎を眺めるようになった。わたし

は、来年も、義母とこのキャンドルの炎を見つめることができるようにと祈った。妻も同じ思いだろう。

義母は何を思いながら、この炎を見つめているのだろうか。自分の子供時代、青春時代、結婚、娘のこと、夫のこと、そして私たちとの暮らし……。そのすべてが、炎に包まれているのではないだろうか。彼女の横顔が、それを物語っていた。

冬が去り、春の訪れを感じるようになっても、ソファアに横たわる日々が多くなってしまった義母だった。それを目にするたびに、わたしは彼女の頭の働きまでも低下しないようにと気をつけていた。特に、義母と二人で摂る昼食の時間は、自分なりに努めた。できるだけ彼女の好みに合うものを作り、食事中に交わす会話も、昔のことをよく覚えていた彼女だったので、当時の出来事などを話してもらっていた。ただ、こちらの問いかけには応じるのだが、以前のように自分から話し出すことが少なくなってしまった。

それでも、義母と一緒に摂る昼食は、窮屈さを感じない、静かな時間であった。開放している窓からは、時々小鳥の鳴く声が聞こえ、二人だけの昼食が済むと、義母はいつもにこやかな顔で、

「おいしかったわ。ありがとう、ヒデジ」と、言ってくれた。

その言葉を耳にするたびに、わたしはよろこび、彼女に感謝するのだった。

花が咲きはじめる五月となった。義母は杖を持って三日に一度は買物に出かけていたが、それができなくなってしまう。痛風に罹ってしまい、それもかなり重い症状となってしまうからだった。歩くと、足が痛み、部屋内でのベッドとソファアの往復だけとなってしまった。と同時に、短期的な記憶、たとえば、前日に何をしたのかを忘れてしまうようにもなった。そのような彼女を目にしていたので、以前から考えていたことを実行しようと決心した。

それは、日本の友人たちや知人たちに定期的に送っているチュービンゲン便りを、ドイツ語に翻訳することだった。というのも、義母は毎号印刷された、その便りを必ず手に持って、「またできたのね」とニコニコして私に言い、一頁一頁めくるからだった。日本語で書かれてあったので、読むことはできないのだが、目を通し、それを自分の部屋に持っていくのである。

そのような彼女を目にして、今しかないと思い、自分のドイツ語力で翻訳するか、または翻訳をしてくれる人を捜せねばと思っていた。と、ちょうどその時、チュービンゲン大学の日本文学館に勤めるオットー・プッツさんと知り合いになり、その方に私の望みを話すと、よろこんで翻訳を引き受けてくれることになった。夏目漱石や遠藤周作や大江健三郎などの本をすでに翻訳している人である。まだ読書力はそう衰えてない義母だ。ゆっくりと読んでくれるだろう。

再び義母の誕生日の五月二十二日となった。八十七歳になった彼女の体調はよくなかったが、来てくれる人たちをよろこんで迎えていた。

それから二カ月が過ぎた日のことだった。

いつものように昼食の支度を済ませ、義母の部屋に行き、ドアを何度もノックしたのだが、返答がなかった。気になってドアを開けると、彼女がソファアの上で横たわっていた。

「昼食の用意ができました」

「昼食？」

義母は空ろな目で、私を見た。

「はい、よく眠っていたようですね。お昼をどこで食べますか。いつものように上でしますか。それとも、今日はお母さんのこの部屋でしますか」

一カ月前から腫れがひどくなつた片足を見ながら、訊いた。

「上へ行きますよ」

ゆっくりと半身起こしながら、彼女は答えた。

十分ほどしてから、いつものように二人での昼食となった。まずお祈りをしてから食べ出した。が、義母はいつもと違い、ナイフとフォークが上手くかみ合わないで、食べ物をお皿からこぼしてしまうのだった。

「どうしたのですか。気分でも悪いのですか」

「そんなことはありませんよ」

彼女は何事もないかのように低い声で答え、黙々と食べ続けていた。が、半分ぐらい食べ終えると、わずかに聴き取れる声で言った。

「今日はもういいですよ」

義母がお皿に盛つたものを残したのは、初めてである。心配になった。

「大丈夫ですか」

彼女は何も答えずに椅子から立ち上がり、腫れている足を引き摺るようにして自分の部屋へ戻った。そのうしろ姿は、いつもの義母ではなかった。

すぐに妻の職場に電話をかけることにした。

「どうもお母さんの様子が変だ。ナイフとフォークが上手く使えなくて、食べ物をこぼしてしまうのだ。左手が自由に動かないようだ。どうもおかしい」

「そんなこと、今までになかったわね」

「うん。食事も半分しか摂らなかつたし、何を訊いても答えないのだ。頭がボーとしているみたいだ」

妻は緊急事態を察したのか、急に一オクターブ高い声を上げた。

「お医者さんの電話番号を知っているでしょう。一刻も早く連絡してほしい。すぐそちらへ駆けつけるわ」

妻に言われたように、すぐにホームドクターに電話をかけてから、義母の部屋に行った。と、彼女はソファアに横たわっていた。いつもは体全体を包むようにかけてある薄い毛布が、足元に置いたままであった。それを広げ、彼女にかけた。嫌な予感が走った。

ドクターはすぐに来るといったが、十五分してもまだ訪れてこなかった。早く来てくれることを願っていると、家の前で車の止まる音がした。急いで玄関まで出て、ドクターを迎えた。

ドクターは部屋に入るや、黒い鞆から聴診器を取り出して、義母の胸に当てた。

「このようになったのは、いつからですか？」

「昼食のときに、おかしいのに気がつきました」

そう答えた時、玄関先で妻の自転車が止まる音がした。

息を切らして部屋に入ってきた妻に、ドクターが、

「これから救急車を呼びます。すぐに入院しなければなりません」と、言った。

そのあと、ドクターは義母の耳元で語句を強くして語りかけた。

「今から病院に行きますよ。わかりますか」

義母はかたくなに目を閉じたままだった。娘は母の手を握り、

「お母さん、おかあさん！」

と、呼び続けた。

病院で四十日間入院したあと、「お母さんを家で看たい」と望む私たち夫婦の願いで、義母は家に戻ってきた。

彼女が家で過ごし、一カ月が過ぎた十月一日のことだった。わたしがキッチンで昼食の後片付けをしていると、昨日から再び肺炎に罹ってしまった母を看ていたエアハルトがやって来て、

「ヒデ、これから薬局へ行ってくる。十分で戻るから」

と、言った。わたしは肯いた。

数分が過ぎた。何か胸騒ぎを覚えた。お皿をまだ拭き終わっていなかったが、義母の部屋に行くことにした。

ドアを開けると、彼女は眠っているようにも見えた。安心してそのまま部屋から出ようとした。が、どうも気になった。ベッドに寄った。顔がいつもよりも白い。口元に耳をあてたが、何の音もしない。

「ムッター（お母さん）！」

返答がない。どのくらいが過ぎたのか、わからない。エアハルトが薬局から戻り、母を見るや、直ぐにドクターとゲートルト、それにライターに電話をかけた。

妻は職場からすぐに駆けつけた。

二十分後、ドクターが来て、

「死亡と確認します」と、告げた。

ドクターが帰ってから、妻が二人の兄たちに言った。

「清拭しましょうよ」

バスルームから湿った熱いタオルを持ってきた妻は、兄たちと一緒に母の体をゆっくりと拭きはじめた。皆と同様に私もタオルを持って、彼女の手に触れた。いつものように温かい。その手を持って拭き続けた。

終章 再び、大自然

義母が逝去した次の年、私たち家族は毎年行っていた夏山登山をしなかった。が、翌々年、妻が高山植物を見たいと望んだので、再びアルプスへ行くことになった。

助手席に座っていた妻が、コップに入ったリンゴジュースを私に手渡ししながら、「デュービンゲンを発つて、もう五時間も走っているわね。あとのくらいで着くの？」と、訊いた。

「一時間半はかかるだろう」

そう答えて、ジュースを一気に飲んだ。喉もとに心地良さが走った。

車窓からは、標高二千メートル以上もある山々の頂上付近に張り付いている残雪がくつきりと見える。その模様を眺めていた彼女が、体を半ひねりしながら、

「あれはウサギのようね。その隣はウシのようね」

と、後部座席のミヒヤエルに指差した。彼はその方向に目を向けた。

イタリア北部の高速道路を出てからしばらく走っていると、土道になった。と、野に咲いている赤や白や黄色の花々が顔を見せはじめた。妻はその花々を見続けていた。その彼女の横顔を見ながら、

「今年は、いつもよりも早い山歩きとなったね。この六月下旬は山が開くときで、一斉に花が咲きはじめるよ」

と言うと、彼女はニッコリして、

「そうね。今年の山登りは、わたしの希望が叶ってうれしいわ。以前から、高山植物の花が咲き乱れる時期に、山に入りたかったから。胸が高鳴っているわ」

と、応えた。

私たちの車は、標高九九四メートルの南チロルのザイス村に到着。早速、村の観光案内所に行き、これから九日間宿泊するところを幹旋してもらおうと、二つの休暇用貸住宅を薦めてくれる。そこで、それらを見てから決めることになった。

最初の貸住宅は、村の真ん中に建っていた。買い物には便利だが、一人一日四千五百円である。あまりに高い額なので、貸主に、「もうすこし、安くしてくれませんか」とお願いすると、三千五百円まで引き下げてくれた。しかし、それでも高いと思う、ここはやめにして、次の貸住宅に向った。

村外れの森に入ったところに、それは建っていた。気の良さそうな農婦らしき人おばあさんが私たち三人を迎え、手作りのニワトコの実ジュースを勧めてくれる。その美味しいこと。そのあと、彼女が住居内は案内してくれる。三つの部屋とキッチンと見晴らしのよいバルコニーがついていて、一人千六百円である。迷わずにここに決めた。

翌朝ベッドで目が覚め、腕時計をのぞくと、五時前である。周囲から、小鳥たちの鳴く声が盛んに聞こえてくる。それも、「ピーピー、キューロキューロ、カッコーカッコー、ヒューヒューヒュー」と色々だ。なんと明るい音色なのだろう。

妻はその鳴き声で目が覚めたのだろうか、ベッドの上で、

「鳥たちがぎやかに囀っているわね」と、声を出した。

「さつきから聞いているのだけど、鳥たちの大合唱だ。森のなかとはいえ、こんなにも鳴き交わしているのを今まで耳にしたことがないよ」

「あら、カッコー鳥の呼ぶ声だわ」

私たちは、様々な声で鳴き続けている声に耳を傾けていた。しばらくすると、彼女がべ

ツドから身を起こし、寝室の窓を開けた。と、冷たい新鮮な大気が室内に漂い出した。

私もバルコニーに出た。目の前には、何本もの大きな木々が立ち並んでいる。そのうちの一際高い松の梢に、カササギが止まって尾を振りながら鳴いているのが見えた。ほかの木々にも、いろいろな鳥たちが小枝に止まって囀っている。

ミヒヤエルもバルコニーに出てきた。

「パパ、ママ」

驚いたような声を上げて、木々を指差した。私たちはパジャマ姿のまま、バルコニーに立ち尽くしていた。まるで小鳥たちのコンサートだ。聞き入った。

朝食を済ませてから、昼食用のおにぎりを作り、ヨーロッパの中で一番広いとされる緑の高原地ザイサーアルム（標高一八〇〇メートル）へ向った。

車の中で、妻が言った。

「どのような花が咲いているのかしら。天気は良いし、歩くのがたのしみだわ。あなたも花の名前をいくらか覚えてたでしょ？」

「十年以上も毎年アルプスに来て、君から教わっているので、だいぶ覚えてよ」

そう応えて、運転を続けた。

さらに薄暗い針葉樹の森をゆっくりと走っていると、急に目の前が明るくなり、アルプの匂いがしきりにしてくる。車が走れるのはここまでだ。これから先は、自分たちの足で進むのだ。

三人とも小さなリュックサックを背負って歩き出すと、今までうつすらと立ち込めていた朝霧が散って、青空が見え出した。深く息を吸うと、山の新鮮な大気が体中に流れ込んでくるのがわかり、爽やかな気分となった。

三十分ほど行くと、もう緑の大草原の中だ。緩やかな優美な曲線の道が、数百メートル先まで続いているのはつきりと見える。その背後には、ドロミテ特有のマグネシウムを含んだ怪奇的な大きな岩峰群が天を突くように連なっている。比類ない、圧倒的な眺めだ。どの峰々も、三千メートルの高さはあるだろう。

前を歩いていた妻が、足元に咲いている色とりどりの花たちを見ながら、

「あ、これはアネモス、トリカブト、キンバイソウ、アザミ……」

と、枚挙にいとまがないほど声を上げている。遠くの岩峰を眺め続けていた私に、彼女が身丈七センチほどのリンドウの一種の花を指差した。

「あなた、見てよ。こんなに澄んだ色のエンチアンが」

足元を見ると、鮮やかな青紫色が目に入った。ハツとするほどの美しい素顔だ。周りには、心をなごやかにしてくれる可憐な高山植物が競い合うように咲き乱れている。辺り一面が花々で膨れ上がっていた。花に優しく迎えられたような気分となった。

柔らかい土道を踏んでいると、山靴が沈み、体が浮くようになった。耳を澄ますと、牛のカウベルが風に乗って聞こえてくる。見渡すかぎりの草原だ。緑と花と岩とが、視界を独占しているのである。まるで絵本の中に出てくる光景だ。

ミヒヤエルは、道行く人とすれ違うたびに、「モルゲン（おはよう）」と声をかけていた。相手からは、イタリア語でボンジョルノ、英語でグッドモーニング、それにフランス語、ドイツ語の挨拶のことばが返ってくる。それが愉快そうで、彼は笑顔を浮かべながら歩いていた。

夕方の五時近くに宿に戻ると、疲れも出てきたので、私たちは棒のようになった足をソファーに伸ばした。と、外で鳴いている小鳥たちの声が聞こえ、自分も彼らと一緒に歌っているような錯覚に陥るのだった。

しばらくしてから、バルコニーに出て、長椅子に身を横たえた。すると、沈みかけた朱色の陽が、松の樹間からキラッキラッと射し込んでくるのである。その光を浴びながら、「ああ、すべてがここにある。わたしのすべてがここに、解放そのものだ」

と、つぶやいた。目の前のバルコニーに咲く、ゼラニウムやペゴニアの花が眩しいほどに輝いている。自然を見て、自分を眺め、観察する。そうすると、謙虚になっている自分を知るのだった。まさに自然からの恵みだ。

私たち三人は、広々としたこのザイサーアルムの草原に咲く花々に魅せられてしまい、三日間澄み切った青空の下を、毎日十キロほど歩き回っていた。

そのあとの二日間は雷のともなう雨だったので、日中は部屋の中でゲームをしたり、外に買物に出かけたりして過ごしていた。雷が時々鳴り響くと、ミヒヤエルは怖そうな表情を浮かべた。その彼に言った。

「明日は、晴れるぞ。きつと晴れる。そうしたら、また山歩きだ」

降り続いた雨も止み、翌日は期待していたような青空となった。車を三十分走らせ、ローゼンガルテンの山麓に到着。さあ、これから本格的な山登りだ。目の前には、薄ねずみ色をしたいくつもの険しい岩峰が、角を立てたように天に向かって聳え立っている。数日前に目にしたお花畑の山域とは、まったく違う景色だ。

まず私たちはリフトに乗って、標高二三〇〇メートルで降りてから、岩場の狭い道を南へ向かって登り出した。

周囲には樹木はなく、岩だらけである。岩場の間には、薄黒くなった雪がまだこびりついている。朝日は反対側の岩壁を照射しているので、私たちの側は日陰である。吐く息は白く、立ち止まると、ヤッケを着けていても、身震いするほどの寒さだ。歩き続けた。

しばらくすると、体が少しずつ暖かくなってくる。足もとに目を落とすと、ピンク色の身丈二センチほどの小さなシレネとアカウリスの花が、大きな石の上に張りついたように密集して咲いているのが見える。草原に咲く花よりも、このような険しい道を踏みながら、ふと出遭う花により魅せられてしまう。花と交差する瞬間、

「ああ、美しい」

と、感嘆の声が自然と出てくるのだった。高山に咲く花は、身丈が低く葉も小さいが、品と気高さを備えているのだ。

陽が次第に高く昇るにつれて、前に立つ岩壁に朝日が照りはじめた。三十分もすると、赤い壁と呼ばれる直下に立った。凄みのある岩だ。直立するこの大岩壁に落日の陽があたれば、赤みを帯びると言う。その残照はさぞ美しいことだろう。

下り道となった。今までの岩の道が土の道に変わり、何種類もの高山植物が目なかに飛び込んでくる。妻はしばしば歩みを止めては、

「これは、何々よ」

と、花の名前を言いながら歩いていた。

さらに下って行くと、道端に浮いていた小石にわたしは足をとられ、山側の斜面に尻もちをついてしまった。と、岩石の裂け目にアルプスの星と呼ばれる花が、四つ咲いている

ではないか。

「あつ、こんなところに、エーデルワイスが咲いているぞ」

わたしは、おもわず声を挙げた。

「えっ、本当なの？」

妻が駆け寄ってきた。

「自生のものは初めてだわ。人工栽培で、何回も目にしたことがあったけれど」

「それにしても、ここで出遭うとは」

私と妻は、しばらくそのエーデルワイスに目を注ぎ続けた。ミヒヤエルはその私たちの姿を見て、うれしそうにしていた。

さらに下って行くと、こんどは松と樅の樹海の中に入った。今までの暑さから、急に涼しくなった。樹と土の帯びた大気が肌にとっても心地良い。エーデルワイスの歌が、口から自然と出てくるのだった。

翌朝寢室のカーテンを引くと、昨日と同様に雲一つない青空だ。

「アルペンローゼが誇るように咲いているところがある」

と、宿の女主人から聞いたので、そこへ行くことにした。

車で四十分走り、リフトに乗って高さ二二五〇メートルで降り、すぐに歩き出した。

正面には、巨大でどっしりとしたセラ岩峰群の大岩山(三二五二メートル)が望め、右手奥には、急峻な岩山ラングコッヘル(三二二八メートル)が雄々しく聳え立っている。まるで大巨岩が、突如平たい地盤を突き破って出てきたかのような格好だ。愕きのある山容とも言えるだろう。

山々に囲まれた壮大な景色を眺めながら、私たち三人は緩やかな草原の尾根道を歩き続けた。足元には、身丈十五センチの黄色い丸い花のキンバイ草と、色鮮やかな青紫色をしたリンドウ、それに小さなアザミなどが競い誇るかのように咲いている。

一時間ほど進むと、目の前に、真っ赤な色をした、つつじ科の花であるアルペンローゼの群生が姿を現し出した。赤い帯状が、百メートル以上もなびいているのである。深みのある色彩に、私たちは飽きることなく眺め続けていた。

辺りに登山者の姿を見かけない。静寂そのものだ。さらに行くと、松と樅の樹で覆われた森の中に入った。急にあたりが薄暗くなった。今までの強い日差しから解放されて、肌がよるこんでいるのがわかる。

樹と木の間に、素早く飛ぶ何かが走った。

「あ！鹿だ。それも二頭だ」

うしろにいた妻に、声を低くして言った。

「ええ、わたしも見たわ」

彼女も声を落ししながら言った。鹿は私たちの行く先を案内するかのように、時々姿を現しては消えた。

さらに森の奥へ歩いて行くと、無人の小さな丸太小屋が目に入った。ちょうど、昼食を摂ろうと思っていた時だった。おにぎりを食べることにした。

小屋の前は直径三十メートルの草原が広がり、色々な花が咲き乱れていた。その奥には、白い雪で覆われた三千メートル級の大岩山が聳え立っているのが望める。近くからは沢の水音が聞こえ、それがいつそう静けさを呼ぶのだった。

かつおぶしと梅干入りのおにぎりを食べ終えてから、草の上に体を横たえた。青い空には、ポツカリと白い雲が浮いている。

あお向けになった姿勢から眺める花たちは、今までとは違った姿だ。その上で、蝶たちが花から花へと飛び廻っている。風にのつて、松ヤニの甘酸っぱい香りと花の匂いが漂い、自分の存在さえも、時の流れさえも忘れて、空っぽの心になったようになった。

一時間半近くが過ぎた。

再び歩き出すと、こんどは今までとは違った急な下りとなった。地図にも記されていない健脚向きの道を、ミヒヤエルの手を握って慎重に足を運んだ。登山慣れた人がいないと、危険な道だ。とくに、枯れた松葉が地面に一センチほど積み重なっているので、足をとられやすい。妻は怖がりではなかったが、

「早く、このくだりを終えたいわ」

と声を出しながら、私たちのうしろを歩いていた。

ミヒヤエルの手を握りながら、この手は決して離さないぞと思いつつ、一步一步足元を確かめて下った。三十分の急傾斜の途中、妻は一回、ミヒヤエルは二回ほど転んだ。やっと緩やかな道に出た時は、三人とも笑顔で、

「やった！」

「やったね！」

と、声を上げながらの握手となった。

何も起こらなかったのもホッとした。登山者の姿がないこの道で、急に雨に降られたらと思うたら、ぞっとした。恵まれたと感謝しなければならぬだろう。

八キロの尾根歩き、それに緊張した場面も何回もあったので宿に戻ると、疲れが急にでて、両足の筋肉が張って痛みも生じてくるのだった。

夕食を済ませてから、三人ともシャワーを浴びて早々にベッドに潜り込んだ。

翌朝起きると、昨日の疲れがまだ溜まっているのがわかる。一日中、宿でのんびりと過ごすことになった。

最後の夕餉となった。妻の案で、宿から歩いて十分ほどの丸太造りの山荘風レストランに行くことになった。今回の山旅で、初めての外食だ。

中庭に置いてある分厚い木の丸テーブルを囲んだ席からは、夕陽に照らされたシュレーンの大きな岩山が望め、その岩壁が時間を追うごとに、オレンジ色から淡い赤に変わり、やがて濃い赤色になった。何という色彩の演出なのだろう。光が醸し出すスペクトルだ。眺め続けた。